長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第２集

諫早家御屋敷跡

長崎県立諫早高等学校附属中学校校舎建設工事に伴う発掘調査報告書

Pla. 1　遺跡遠景（後方に高城を望む）

発刊にあたって

本書は長崎県立諫早高等学校附属中学校校舎建設工事に伴い平成21年度に実施した「諫早家御屋敷跡」の発掘調査報告書です。

「諫早家御屋敷跡」は中世に高来郡を支配した西郷氏にかわり、1587（天正15）年に伊佐早の領主となった龍造寺氏、後の諫早家の屋敷跡で、別名「諫早陣屋」とも呼ばれます。平成21年８月22日から９月８日にかけて実施した試掘調査によって新たに発見、周知された遺跡です。この屋敷跡は明治以降も存続し、1923（大正12）年に県立諫早中学校（旧制）建設のため解体されたといわれています。

調査の結果、近代における区画のための石組み側溝や江戸時代の溝や礎石、また安土桃山時代終末期頃の溝など屋敷にともなう遺構や、多くの肥前陶磁器や土師器などの遺物が確認されています。特に諫早家の家紋である「昇り藤」をあしらった瓦や染付は直接的に諫早家と関係するものであり、大変興味深いものです。

調査に際して諫早市教育委員会文化課、県立諫早高等学校などの多くの方々にご協力いただいたことに深く感謝しますとともに、本報告書が今後の諫早家、または諫早市における中近世研究の一助になれば幸いです。

平成23年３月31日

長崎県教育委員会教育長

寺　田　隆　士

例　　言

1．本書は長崎県立諫早高等学校附属中学校棟建設工事に伴って平成21年度に実施した諫早家御屋敷跡の発掘調査報告書である。
2．本書は平成22年度長崎県立諫早高等学校附属中学校棟建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書作成費にもとづいて発行した。
3．本事業は長崎県教育庁教育環境整備課が主体となり、調査主体は長崎県教育委員会が、調査担当は長崎県教育庁学芸文化課および原の辻遺跡調査事務所（平成22年１月１日以降は長崎県埋蔵文化財センター）が行った。
4．調査組織は下記の通りである。

(1)　試掘調査

学芸文化課

課長補佐	古門	雅高
係長	冨田	和宏
文化財保護主事	寺田	正剛（※試掘調査）
文化財調査員	川淵	雅行（※試掘調査）

(2)　本調査

学芸文化課

課長補佐	古門	雅高
係長	冨田	和宏
文化財保護主事	寺田	正剛（※本調査）
文化財調査員	平田	賢明（※本調査）
専門員	高野	晋司（※本調査）

原の辻遺跡調査事務所　※平成21年12月31日まで

所長	安楽	勉
調査課長	宮崎	貴夫
調査係長	川道	寛
総務係長	四辻	義仁
主事	生方	佑典
文化財保護主事	林	隆広（※本調査）

長崎県埋蔵文化財センター　※平成22年１月１日より

所長	川久保	芳洋
調査課長	宮崎	貴夫
調査係長	川道	寛
総務課長	四辻	義仁
主事	生方	佑典
文化財保護主事	林	隆広（※本調査　整理報告）
文化財調査員	河合	恭典（※整理報告）

5．本書に収録した遺物の実測および製図は長崎県埋蔵文化財センターが行った。
6．金属製品の透過エックス線撮影および、墨書の赤外線観察は、長崎県埋蔵文化財センターにて行った。
7．本書収録の遺物、図面、写真類は長崎県埋蔵文化財センターで保管している。
8．平面直角座標は世界測地系を使用している。
9．本書の北は方眼北（G.N）と磁北（M.N）を使用している。
10．本書では挿図図版を Fig.、表組図版を Tab.、写真図版を Pla.で表記している。
11．本書の執筆はⅠ～Ⅳ章を林が、Ⅴ章を河合が、Ⅵ章を林、河合が行った。
12．本書の編集は林と河合が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地する地理的歴史的環境……1
Ⅱ　調査に至る経緯……3
　1．試掘調査の経緯
　2．本調査の経緯
Ⅲ　層序……9
Ⅳ　遺構……13
　1．溝跡
　　(1)　石組側溝
　　(2)　1号溝
　　(3)　2号溝
　　(4)　3号溝……14
　　(5)　5号溝
　　(6)　6号溝
　　(7)　7号溝
　　(8)　8号溝……15
　　(9)　9号溝
　　(10)　10号溝
　　(11)　11号溝
　　(12)　12号溝
　　(13)　13号溝……16
　2．井戸跡
　　(1)　1号井戸
　　(2)　2号井戸
　3．その他
　　(1)　1号土坑
　　(2)　1号礎石
　　(3)　1号不明遺構
　　(4)　2号不明遺構
　　(5)　3号不明遺構……17
　　(6)　胞衣壺
　　(7)　ピット
　　①第1期面
　　②第2期面
Ⅴ　遺物
　1．出土遺物の概要……30
　2．土器類
　　(1)　Ⅲ層（造成土）出土遺物
　　～幕末以降の遺物～
　　(2)　第1期面検出遺構出土土器……36
　　①石組側溝出土土器
　　②2号溝出土土器……38
　　③9号溝出土土器
　　④8号溝出土土器
　　⑤3号溝出土土器
　　⑥6号溝出土土器
　　⑦ピット138出土土器 ……39
　　⑧胞衣壺遺構
　　(3)　第2期面遺構出土土器
　　①3号不明遺構
　　②Ⅴ層……40
　　③5号溝……41
　　④5号溝土師器溜まり
　　(4)　その他の土器……44
　3．その他の遺物
　　(1)　瓦
　　①Ⅲ層出土瓦
　　②石組側溝出土瓦
　　③ピット138出土瓦 ……47
　　④第1期面包含層出土瓦
　　(2)　諫早家関連遺物
　　(3)　金属製品……49
　　(4)　銭……50
　　(5)　石製品
Ⅵ　まとめ……57

挿図(Fig.)目次

Fig. 1　遺跡位置図 …… 2
Fig. 2　試掘調査区位置図 …… 4
Fig. 3　試掘調査平面図・土層断面図① …… 5
Fig. 4　試掘調査平面図・土層断面図② …… 6
Fig. 5　遺構配置図（第１期面） …… 7
Fig. 6　遺構配置図（第２期面） …… 8
Fig. 7　北壁土層断面図 ……10
Fig. 8　西壁土層断面図① ……11
Fig. 9　西壁土層断面図② ……12
Fig.10　層序模式図 ……12
Fig.11　石組側溝①平面図・立面図 ……18
Fig.12　石組側溝②平面図・立面図 ……19
Fig.13　石組側溝③・⑤平面図・立面図 ……20
Fig.14　石組側溝④平面図・立面図 ……21
Fig.15　３号溝・５号溝遺構図 ……22
／５号溝土層断面図
／土師器溜まり実測図
Fig.16　その他の遺構実測図 ……23
Fig.17　ピット第１期面平面図① ……24
Fig.18　ピット第１期面平面図② ……25
Fig.19　ピット第２期面平面図② ……25
Fig.20　ピット第２期面平面図① ……26
Fig.21　Ⅲ層（造成土）出土土器類① ……32
Fig.22　Ⅲ層（造成土）出土土器類② ……33
Fig.23　Ⅲ層（造成土）出土土器類③ ……34
Fig.24　第１期面検出遺構出土土器類 ……37
（江戸時代中期～後期）
Fig.25　ピット138出土　肥前系色絵付 ……39
Fig.26　胞衣壺遺構・唐津系施釉陶器土瓶 …39
Fig.27　３号不明遺構および ……40
Ｖ層出土土器類
（中世末～江戸時代初頭）
Fig.28　５号溝・５号溝土師器溜まり ……42
出土土器
Fig.29　越州窯系青磁 ……44
Fig.30　Ⅲ層・石組側溝 ……45
・４号溝出土瓦
Fig.31　ピット138 ……46
・第１期面包含層出土瓦
Fig.32　諫早家関連遺物 ……48
Fig.33　金属製品 ……49
Fig.34　銭 ……50
Fig.35　石製品 ……51

表組(Tab.)目次

Tab. 1　試掘調査　TP 1 土層観察表……5
Tab. 2　試掘調査　TP 2 土層観察表……5
Tab. 3　試掘調査　TP 3 土層観察表……6
Tab. 4　試掘調査　TP 4 土層観察表……6
Tab. 5　西壁土層観察表……12
Tab. 6　北壁土層観察表……12
Tab. 7　第 1 期面検出ピット　標高一覧表…27
Tab. 8　第 2 期面検出ピット　標高一覧表…28
Tab. 9　5 号溝土師器溜まり出土土師器
　　法量一覧表……43
Tab.10　出土土器観察表……53
Tab.11　瓦観察表……55
Tab.12　諫早家御屋敷跡関連遺物観察表……56
Tab.13　金属製品観察表……56
Tab.14　銭観察表……56
Tab.15　石製品観察表……56
Tab.16　諫早家御屋敷跡　関連年表……58

写真(Pla.)目次

Pla. 1　遺跡遠景（後方に高城を望む）
Pla. 2　発掘現場写真 1 ……59
　　（調査区全景／第 1 期面検出ピット
　　検出／ 1 号礎石検出）
Pla. 3　発掘現場写真 2 （ 2 号不明 ……60
　　遺構検出／ 3 号不明遺構完掘／
　　胞衣壺遺構）
Pla. 4　発掘現場写真 3 （西壁土層 ……61
　　／北壁土層／土師器溜まり検出）
Pla. 5　発掘現場写真 4 （ 5 号溝完掘 ……62
　　／造成土内の瓦集中／第 2 期面完掘）
Pla. 6　Ⅲ層（土師器・土師質土器） ……63
　　／Ⅲ層（国産陶器）
Pla. 7　Ⅲ層（国産白磁　染付・色絵付 ……64
　　碗・皿・その他器形）
Pla. 8　Ⅲ層（国産染付皿類） ……65
　　／Ⅲ層（輸入磁器）
Pla. 9　石組側溝／ 9 号溝／ 6 号溝 ……66
　　／ 2 号溝／胞衣壺
Pla.10　3 号不明遺構 ……67
Pla.11　5 号溝／ 5 号溝土師器溜 ……68
Pla.12　5 号溝　5 号溝土師器溜まり ……69
Pla.13　石組側溝・10号溝　近世瓦 ……70
Pla.14　諫早家関連遺物 ……71
Pla.15　諫早家関連遺物 ……72
Pla.16　金属製品／銭 ……73
Pla.17　石製品 ……74

Ⅰ　遺跡の立地する地理的歴史的環境

諫早市は長崎県の中央部に位置し、北に大村市および佐賀県藤津郡太良町、西に長崎市と西彼杵郡長与町、東に雲仙市と接する。市域の北側には多良山系の山地が聳え、西側は長崎半島、南側は島原半島の付け根となっている。市域の北西側に大村湾、東側に有明海（諫早湾）、南側に橘湾の特徴ある３つの海に囲まれる。

諫早湾における干拓地など長崎県下最大の穀倉地帯を有する一方、近年は県内の交通結節点として整備が進み、電子技術や航空宇宙関連など先端技術企業による多様な産業が集積している。

諫早の地名は『八幡宇佐宮御神領大鏡』に登場する「伊佐早村」が初見であるが、これには藤井宮時という伊佐早村の本領主が宇佐弥勒寺の検校僧である円昭に伊佐早村の田畑を譲り、さらに円昭は宇佐大宮司の公通に譲ったという内容が記されている。この寄進行為の時期は記されていないが、『八幡宇佐宮御神領大鏡』が建久８（1197）年の宇佐大宮司公房による編纂であることから、さほど遡る時期でない12世紀後半頃を想像できるが、ともかくも平安時代末には、伊佐早の地は宇佐神宮への寄進地系荘園として存在したことが窺える。

その後、正応５（1292）年の『河上神社文書』には「伊佐早庄」が登場するが、これは仁和寺仏母院御領となっており、宇佐神宮領から所有権が移っていることが窺える。また高来郡深江の地頭職であった安富氏の『深江文書』における土地売買証文に船越村の記述が見られるなど、土地を巡る争いが鎌倉幕府に上訴された様子が見られ、まだ有力な領主の存在はなかったと思われる。

鎌倉幕府の崩壊後、建武の新政後に南北朝時代を迎えるが、この頃の伊佐早では北朝方として伊佐早氏が船越城にいて北半分を支配し、南朝方として西郷氏が宇木城（現在の有喜）にいて南半分を支配して両朝対立の抗争が見られた。『九州治乱記』には探題の今川貞世（入道了俊）らが伊佐早方面へ侵攻し、伊佐早氏や西郷氏の諸城と戦った様子が記されている。

南北朝の講和の後、室町幕府の開府によりしばしの安寧が訪れるが、応仁元(1467)年からはじまった大乱により以後、百年にも及ぶ戦国時代へ突入する。応仁の大乱の後、文明年間（1469～87）に伊佐早を支配したのは西郷尚善で、島原半島の日野江城主である有馬貴純の傘下として大村へ侵攻するなど活躍している。南北朝期に西郷氏と争った伊佐早氏は、この頃になると史料からその姿を消し、消息不明となる。西郷氏のその後を記せば、尚善の次代は有馬晴純の弟の純久が養子となって継承し、享禄・天文（1528～1555）年間に晴純の副将格として活動したとされる。天正（1573～1592）年間の当主である次代の純尭は、有馬氏当主の有馬義貞や、西郷家と同様に有馬より養子に入って同盟関係にあった大村純忠などキリシタン大名とにわかに離反し、嬉野の後藤貴明や松浦氏と同盟して大村、長崎に度々侵攻し、龍造寺隆信に降った。次代を継いだ子の信尚は豊臣秀吉の九州の役に参陣せず不興を買ったため、秀吉の許しを得た龍造寺家晴（諫早氏の祖）に居城の高城を攻められ、敗れて島原に逃れた。その後、平戸に移住して子孫は松浦の家臣となったとされる。

天正15（1587）年に西郷氏を追った龍造寺家晴は、豊臣秀吉より２万２千５百石の朱印状を受けて戦国大名として伊佐早を支配した。その領域は現在の諫早市と彼杵郡、藤津郡、小城郡の一部におよぶ。しかし、佐賀では龍造寺氏から鍋島氏に実権が移り、家晴の次代である直孝は鍋島氏に遠慮して

姓と本拠地を「諫早」に改め、国家老として佐賀城内に居住するようになった。このように、龍造寺改め諫早氏は大名から佐賀藩の家老職に、いわば「降格」したかたちだが、さらには慶長16（1611）年に藤津郡七浦以東、小城郡まで１万石、元和７（1622）年に高来郡内の３千石を召し上げられ、知行地は１万石程度となっている。この背景には、藩領35万余石のうち重臣（諫早・多久・須古・武雄など）たちの知行地が多く、鍋島家の領地は約３分の１程度であったという佐賀藩が抱える財政問題があったといわれる。

７代の茂晴の頃、元禄12（1699）年に本明川の大洪水があり、死者487人を数えた。この後、城下町が現在の中央市街地に移されている。文化元（1804）年、11代の茂図の頃にも本明川の大洪水があり、下町、田代町、岡町などに被害があったほか、本明川にかかる橋すべてが流されている。このように本明川の洪水が度々起こっており、川に隣接する館も、かなりの被害を受けたのではないかと推測される。

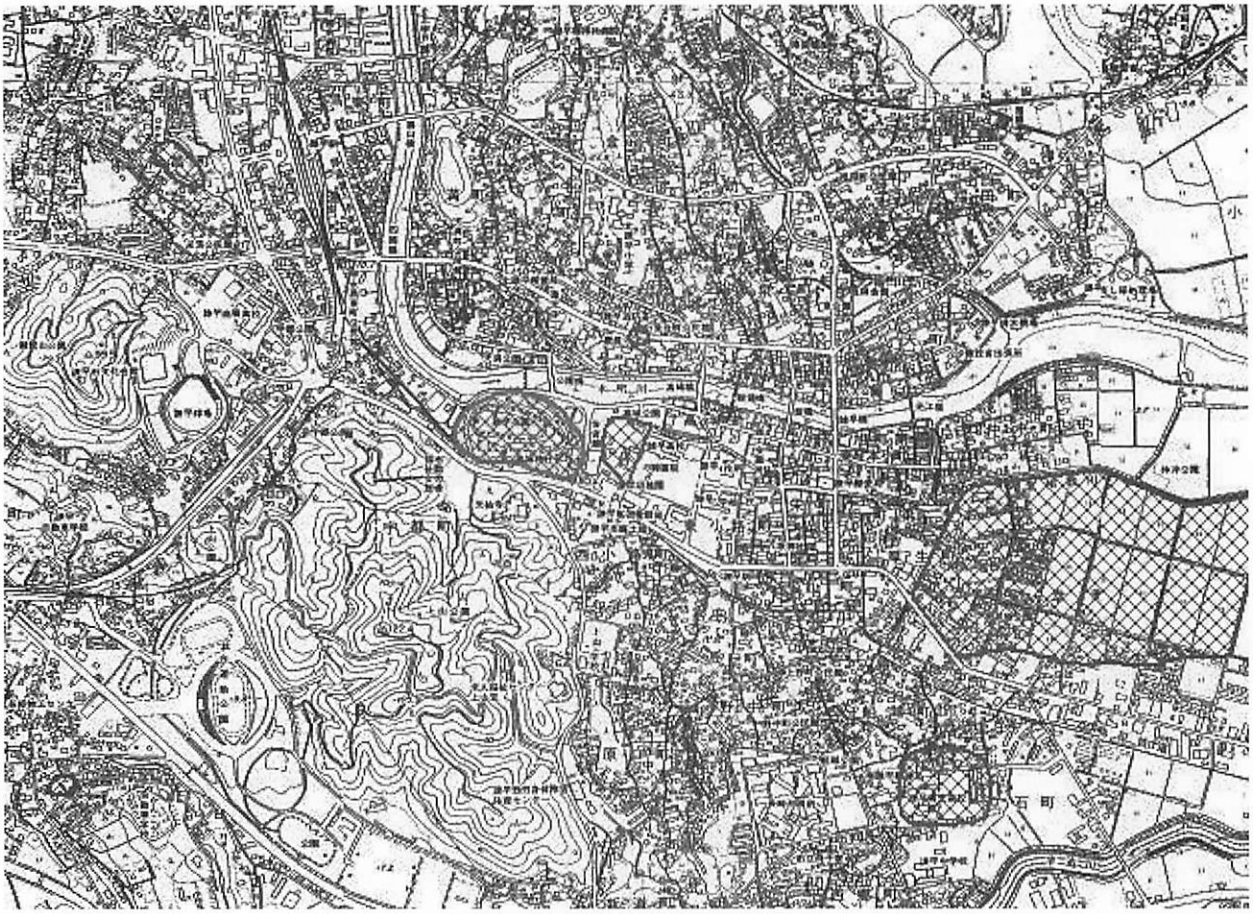


Fig. 1　遺跡位置図（1/20000）

Ⅱ　調査に至る経緯

1．試掘調査の経緯

平成23年４月に開設を予定している併設型中高一貫教育校「長崎県立諫早高等学校附属中学校」の校舎建設事業計画が平成21年４月に策定された。建設予定地は長崎県立諫早高等学校内のテニスコートで、高城跡の東側低地部にあたる。周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、1864（文久４）年に作成された「諫早城下図」では、御屋敷として描かれており、諫早家領主の屋敷跡とされている。このような歴史的背景に基づき、長崎県教育庁教育環境整備課と協議した結果、工事に先立ち試掘調査を実施することで合意した。

試掘調査は平成21年８月22日から９月８日にかけて、調査面積16㎡（２ｍ×２ｍ試掘坑を４ヶ所）を対象に実施した。その結果、すべての調査区から室町時代から江戸時代にかけての遺構や遺物包含層が確認されたため、新たに「諫早家御屋敷跡」として周知されるに至った。

以下は各試掘坑の調査成果概要である。

TP１（第１試掘坑）…地表下約１ｍで柱穴９基確認。柱穴の埋土から土師器皿小片が出土、室町時代から江戸時代にかけての遺構と推測される。また埋土が異なる柱穴があり、いくつかの時期にまたがる建物の跡があることが推測される。

TP２（第２試掘坑）…地表下約1.5ｍで幅約1.3ｍの南北方向に流れる溝跡を確認。遺構内はわずかに湧水があり、本明川と池（御書院）を結ぶ溝の可能性がある。「諫早領主家間取り図」で描かれる屋敷内に導水する溝の一部である可能性もある。

TP３（第３試掘坑）…地表下約1.8ｍで最下層の砂礫層から横木と杭列を確認。砂礫層には幕末以降の瓦・陶磁器などの遺物が多数含まれており、江戸時代から続く濠跡の可能性が強い。

TP４（第４試掘坑）…地表下約１ｍで江戸時代中期の遺物包含層が確認され、地表下約1.6ｍの砂礫層まで続く。また調査区の東側半分は約1.6ｍまで攪乱層が堆積し、下層には角礫が多く含まれる。

このような調査成果を得て、長崎県教育庁教育環境整備課と再度協議し、工事着手前に記録保存を目的とする本調査を実施することで合意した。

2．本調査の経緯

本調査は平成21年11月30日から平成22年２月４日にかけて、調査面積754㎡を対象に実施した。まずはテニスコートの人工芝除去作業を行い、その後重機による表土掘削を行った。表土掘削ではテニスコートに伴うアスファルト面や、ガラス片などが混じる現代の造成土を平均0.8ｍほど掘り下げた。下層に行くにつれ、現代のガラス片などの混じりが少なくなり、江戸時代後期～明治時代に焼かれた陶磁器類が徐々に出土し始めため、掘り下げを重機から人力に変更した。

人力による掘り下げ作業を進めると、調査区を東西、南北の２つの方向に走る石組の側溝（SDH01）が検出された。溝を覆う埋土からは明治時代の陶磁器が出土し、当該期に廃絶したものと考えられる。また近世以降に造成されたと思われる堆積層には溝（SD02・SD04、SD06、SD07、SD08、SD10）や礎石（SJ01）、井戸（SE01）や不明遺構（SX01、SX02）、および第１期面検出ピット群（SP001～200）が検出された。

これら近世から近代の堆積層をさらに掘り下げると、調査区南側で粘土質の、東側では砂礫層の安定した堆積が確認され、その上面には中世末から近世初頭の遺構である溝（SD03、SD05、SD08、SD09、SD11、SD12、SD13）や井戸（SE02）、不明遺構（SX03）や第２期面検出ピット群（SP501～684）が確認された。また北東側では、安定した粘土質の堆積は見られず、遺物を含まない青灰色の粘土層が検出された。

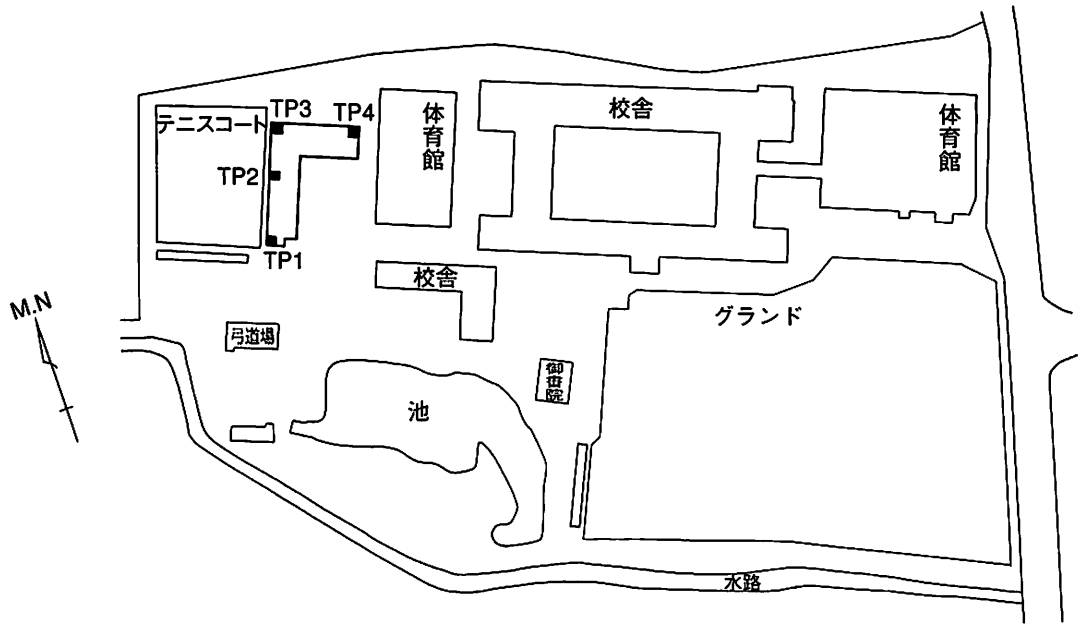
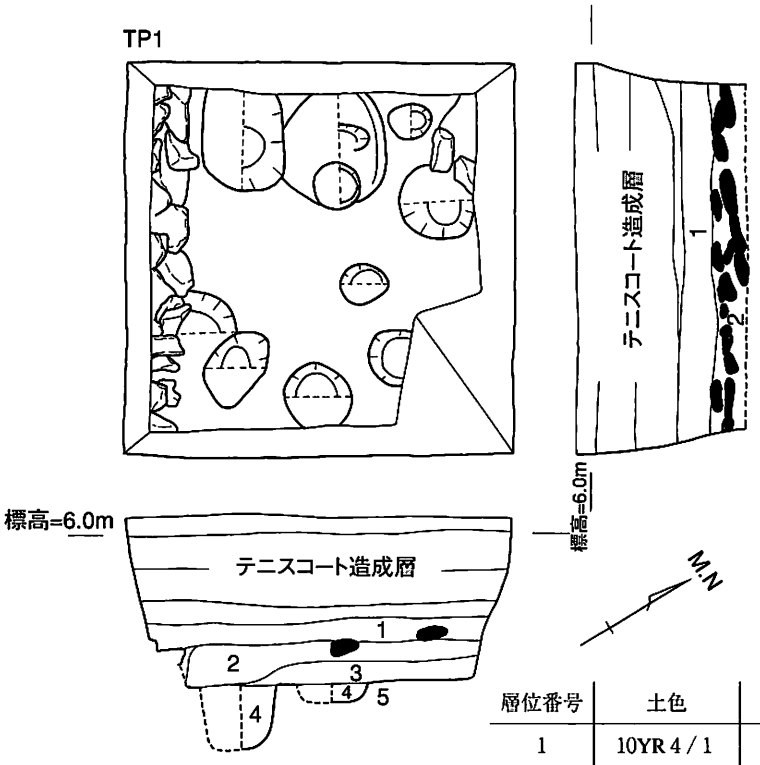


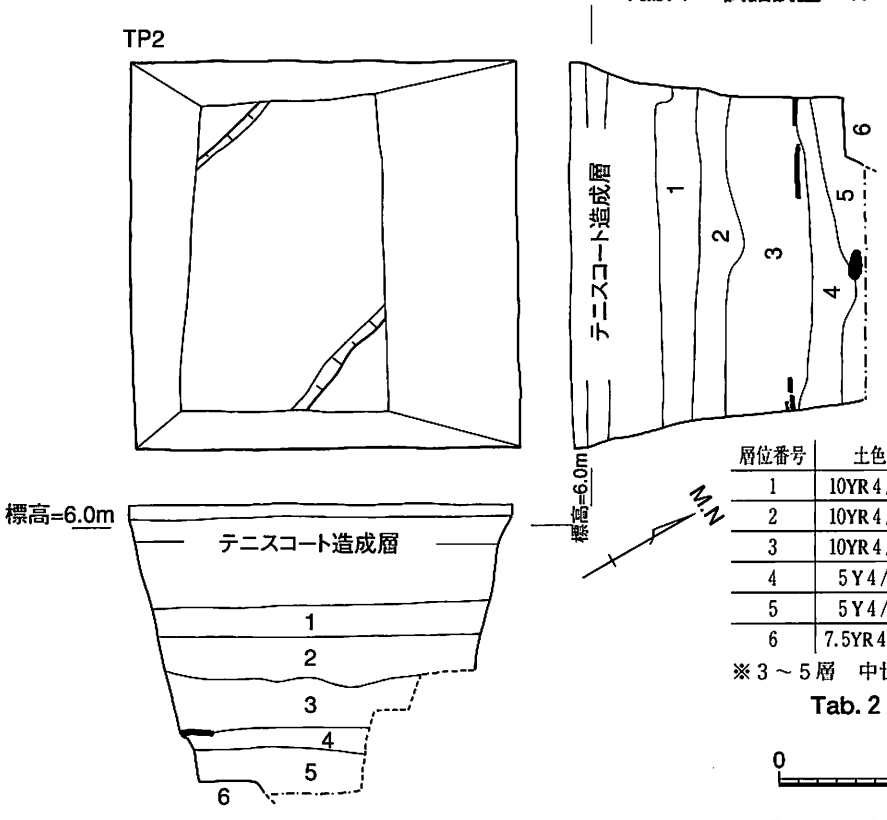
Fig. 2　試掘調査区位置図



層位番号	土色	土質・注記
1	10YR 4 / 1	褐灰色撹乱層
2	10YR 4 / 1	褐灰色鉄分沈着土
3	10YR 4 / 1	やや暗い褐灰色炭化物混在土
4	5 YR 2 / 1	黒褐色炭化物混在土
5	7.5YR 4 / 1	褐灰色硬質土、炭化物・赤色土粒混在

※3～5層　中世～近世遺物包含層

Tab. 1　試掘調査　TP 1 土層観察表



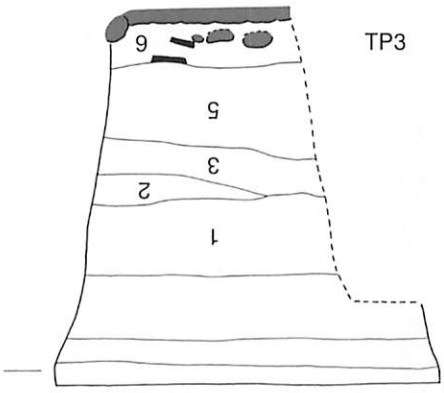
層位番号	土色	土質・注記
1	10YR 4 / 4	褐色砂層　水害時堆積物か
2	10YR 4 / 1	褐灰色鉄分沈着土
3	10YR 4 / 1	やや暗い褐灰色炭化物混在土
4	5 Y 4 / 1	灰色土　鉄分沈着がわずかにあり炭化物少ない
5	5 Y 4 / 1	灰色粘質土　砂礫混在
6	7.5YR 4 / 3	褐色粘質土　鉄分沈着　地山

※3～5層　中世～近世遺物包含層

Tab. 2　試掘調査　TP 2 土層観察表

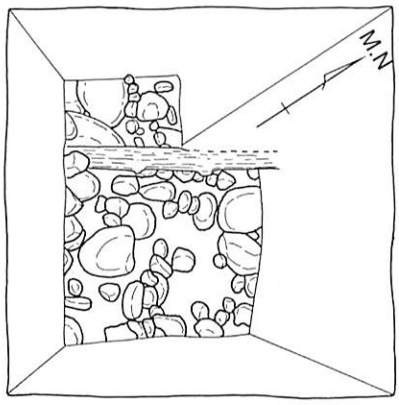
0　2m

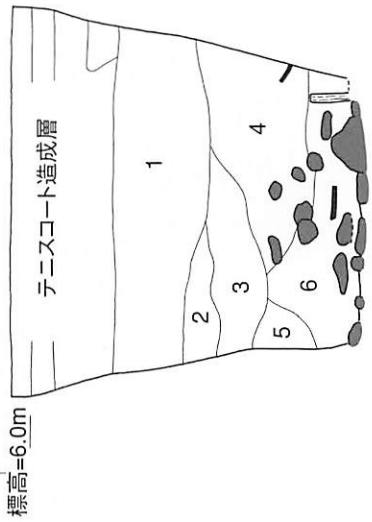
Fig. 3　試掘調査　平面図・土層断面図①（1 /40）

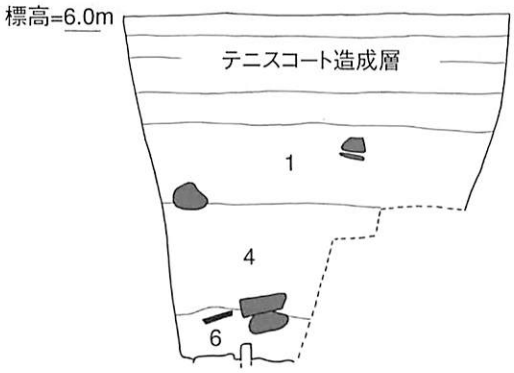


層位番号	土色	土質・注記
1	10YR 4 / 4	褐色撹乱層
2	10YR 4 / 4	褐色砂質土　間に粘土層をはさむ
3	－	にぶい黄褐色粘土質　鉄分混在
4	10YR 4 / 1	褐灰色粘質土　瓦を含む
5	10YR 4 / 1	褐色砂混じり粘質土　鉄分沈着　炭化物を含む
6	10YR 5 / 1	褐灰色粘質土　下層に円礫・桟瓦・板材・杭など多数含む

Tab. 3　試掘調査　TP 3 土層観察表







層位番号	土色	土質・注記
1	10YR 4 / 2	灰黄褐色撹乱層
2	10YR 4 / 4	褐色砂層
3	10YR 4 / 4	褐灰色炭化物等混在土
4	10YR 4 / 4	褐灰色炭化物等混在土　焼土など見られる
5	10YR 3 / 1	黒褐色砂混じり炭化物混在硬質土
6	10YR 3 / 1	黒褐色砂混じり硬質土　炭化物少ない
7	10YR 3 / 1	黒褐色砂礫土層
8	－	砂礫層　川床か

※4～7層　近世遺物包含層

Tab. 4　試掘調査　TP 4 土層観察表

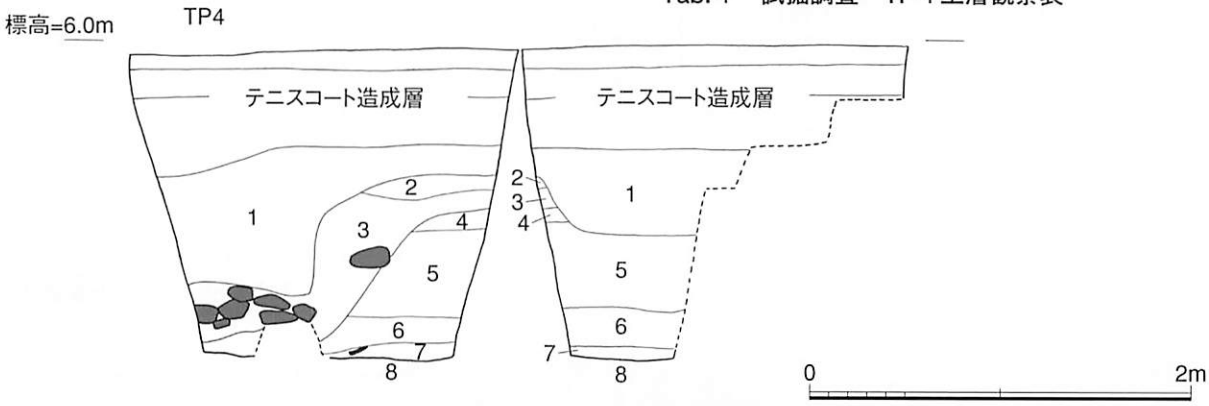


Fig. 4　試掘調査　平面図・土層断面図②（1 /40）

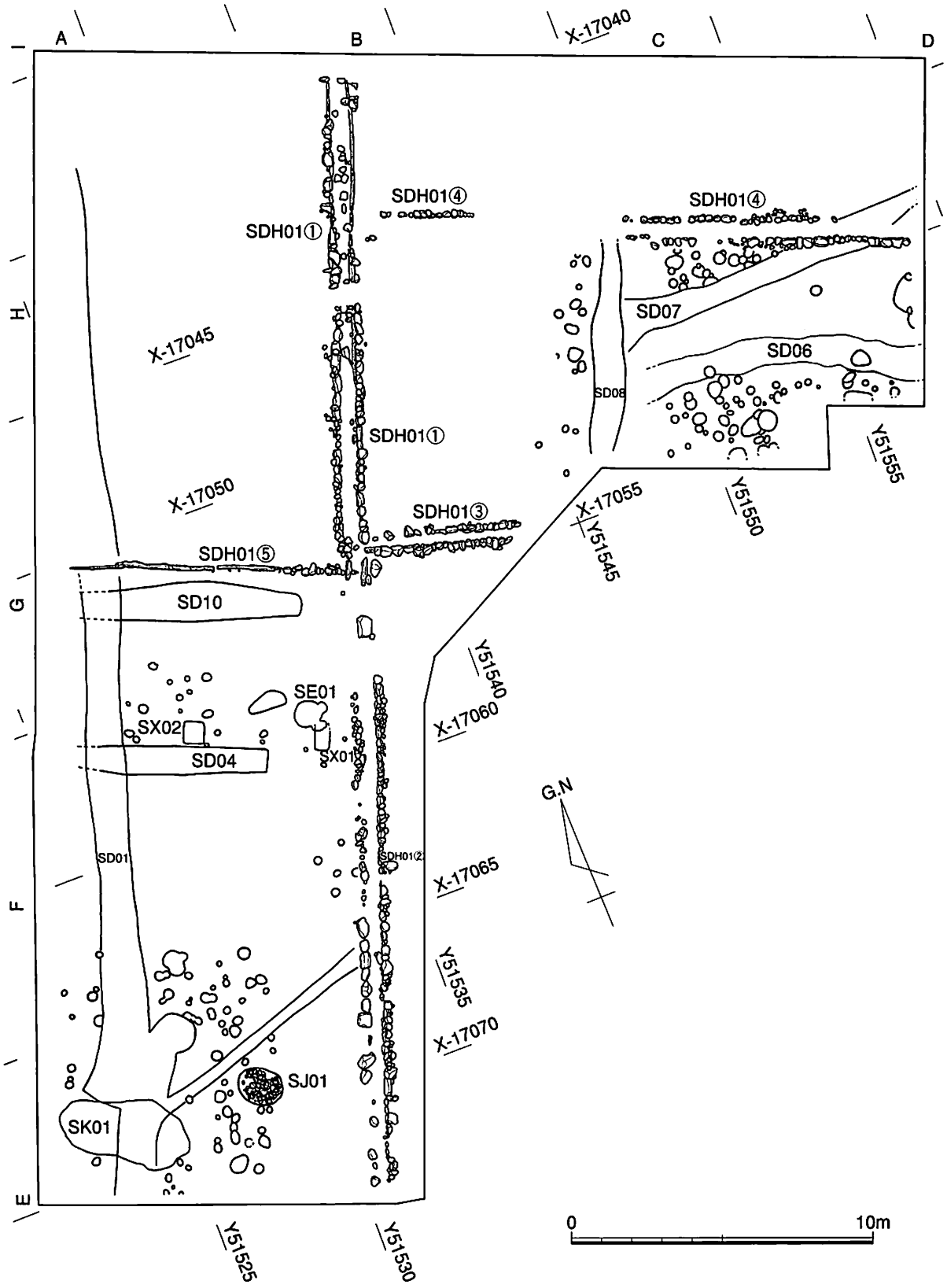


Fig. 5　遺構配置図（第１期面）（１/200）

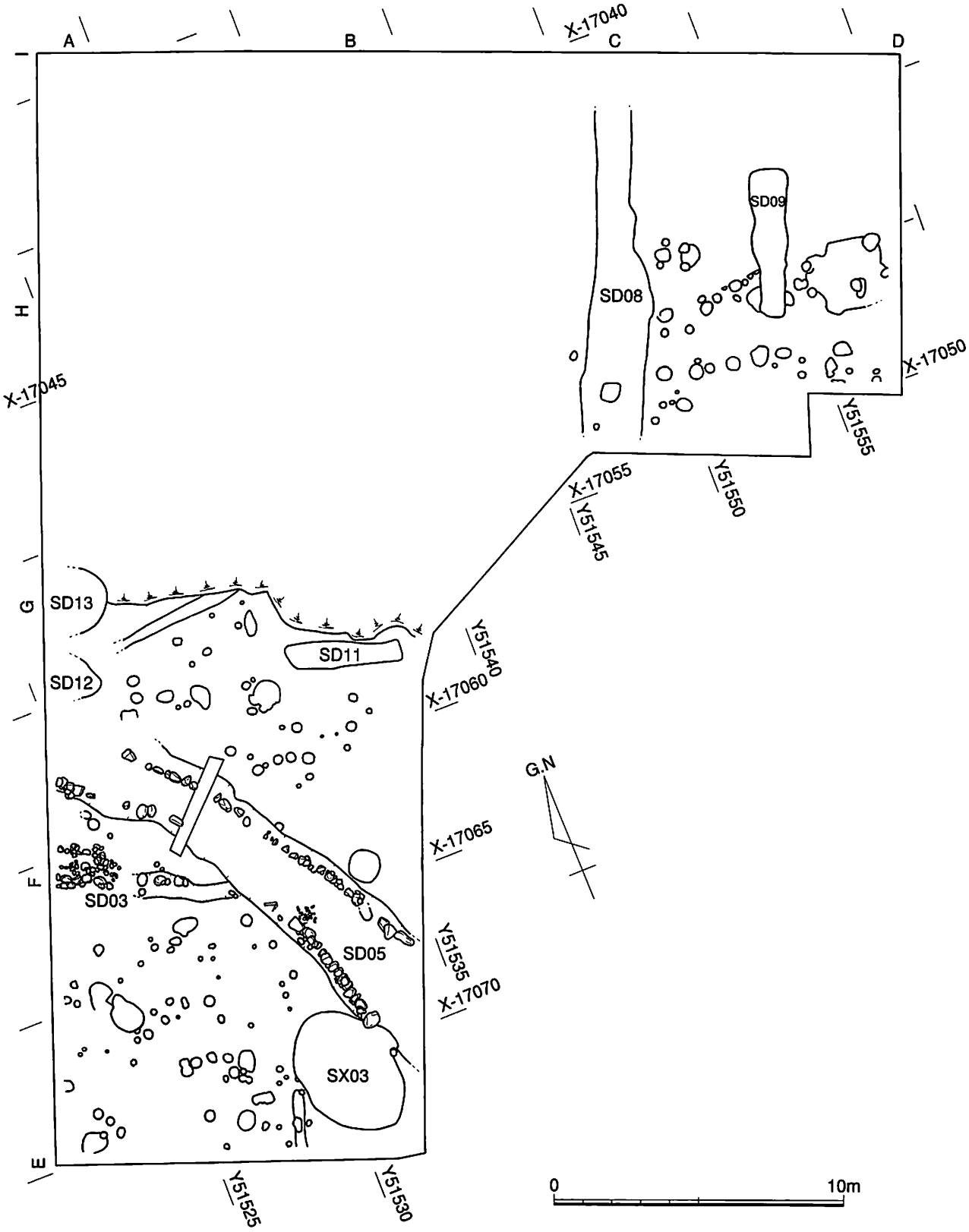


Fig. 6　遺構配置図（第２期面）（１/200）

Ⅲ　層序

本調査区において確認された土層を７つに分層し、以下に説明する。なお、細分化された各層位の土層注記については、Tab. 1 ～ 4 で表示している。

・Ⅰ層…テニスコートや、それ以前のバレーコート造営時の造成土である。アスファルトやコンクリート、ガラス片など現代のものが混入する。重機で掘削した。

・Ⅱ層…テニスコートやバレーコート造営時の基礎と思われるバラス層である。１～２センチ程の砕石が敷かれている。重機で掘削した。

・Ⅲ層…近代の遺物包含層で造成土と思われる。石組側溝（SDH01）はⅢb 層に掘り込まれるため、層位内で堆積に時期差があると考えられるが、含まれる遺物の年代観からは明瞭な違いが見いだせなかった。一部、重機で掘削している。

・Ⅳ層…近世中期から後期の堆積土である。調査区南側で検出された溝状遺構の堆積土を中心にⅣ層と分類したが、調査区東側では不明瞭であった。

・Ⅴ層…調査区南側および東側で確認され、２号溝（SD02およびSD04）、６号溝（SD06）、７号溝（SD07）、８号溝（SD08）、10号溝（SD10）、１号礎石（SJ01）、１号井戸（SE01）、１号不明遺構（SX01）、２号不明遺構（SX02）、第１期面検出ピット群（SP001～200）の遺構が掘り込まれる面となる。この層位から出土した遺物の下限年代観から、近世初頭に造成されたものと思われる。

・Ⅵ層…調査区北東側に堆積する。Ⅲ層に含まれる桟瓦などの瓦礫が食い込むが、基本的には無遺物層と判断した。強い粘性で水分の多い堆積層であり、色調は青灰色である。砂を含む土層や、黒褐色の有機質が腐敗したような土層もあるため、水性堆積である可能性が高い。調査区の北を流れる本明川が蛇行した痕跡ではないかと推測される。

・Ⅶ層…自然堆積の無遺物層である。３号溝（SD03）、５号溝（SD05）、８号溝（SD08）、９号溝（SD09）、11号溝（SD11）、12号溝（SD12）、13号溝（SD13）、２号井戸（SE02）、３号不明遺構（SX03）、第２期面検出ピット群（SP501～684）が掘り込まれる。調査区南側は玄武岩の風化した粘質土、調査区東側は小礫層で土質が異なる。調査区東側の小礫層は、本明川の河川堆積によるものと思われる。

この調査区において推測される土層堆積の経緯としては、まず調査区南側の玄武岩が風化したⅦ層が基盤層として太古から存在し、その北側に本明川から供給された小礫が堆積して調査区東側のⅦ層を形成する。調査区北東側が地形的に落ち込み、湿地のような状況だったことがⅥ層の様相から推測されるが、これは本明川が時代によって流れを変え、調査区北東側を抉るように蛇行した結果ではないかと思われる。Ⅲ層は、この落ち込みに瓦礫（瓦片や木片など）を投棄して基礎固めを行い、その上に客土を入れて造成した堆積土であると判断した。

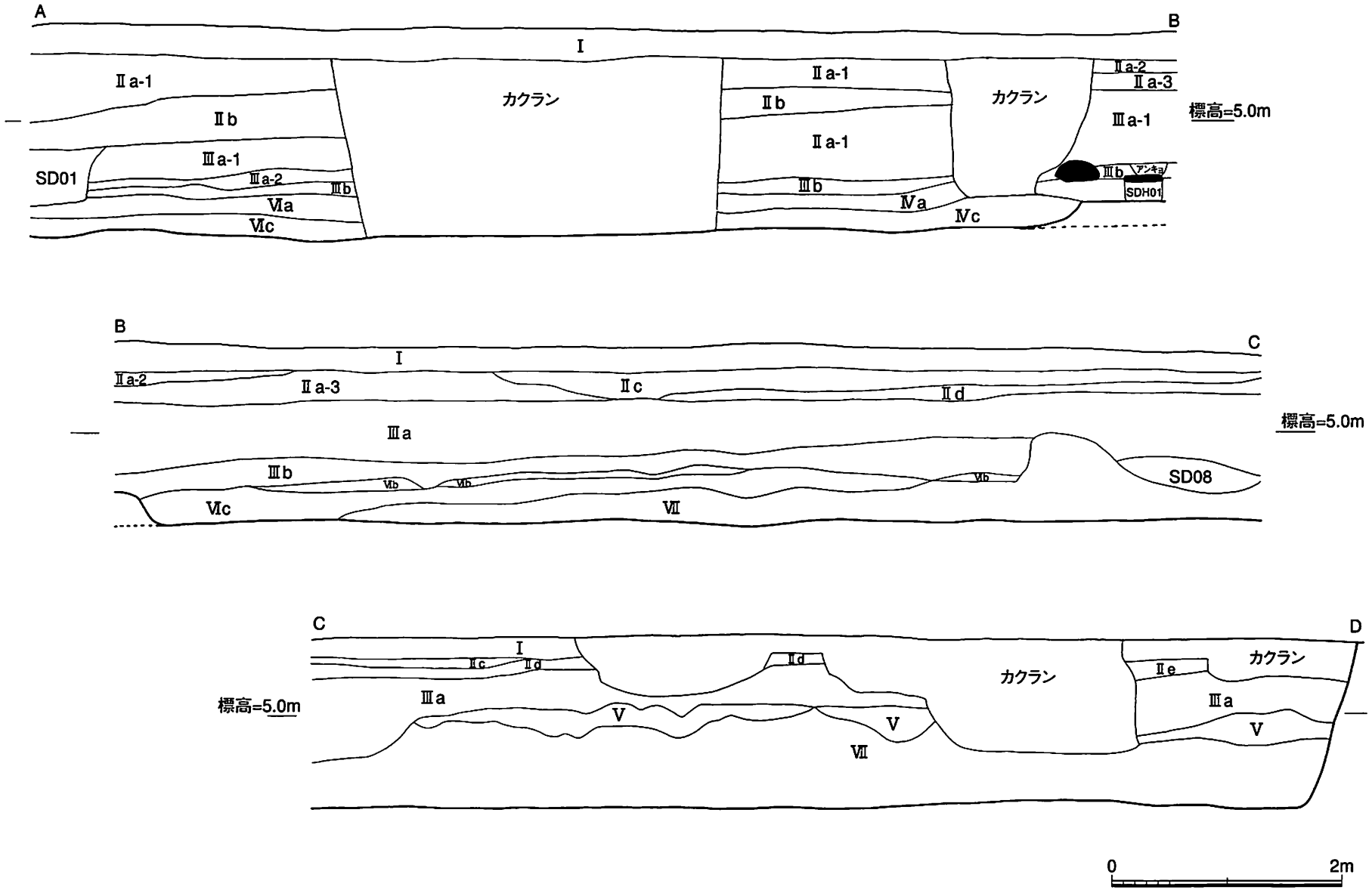


Fig. 7　北壁土層断面図（1/50）

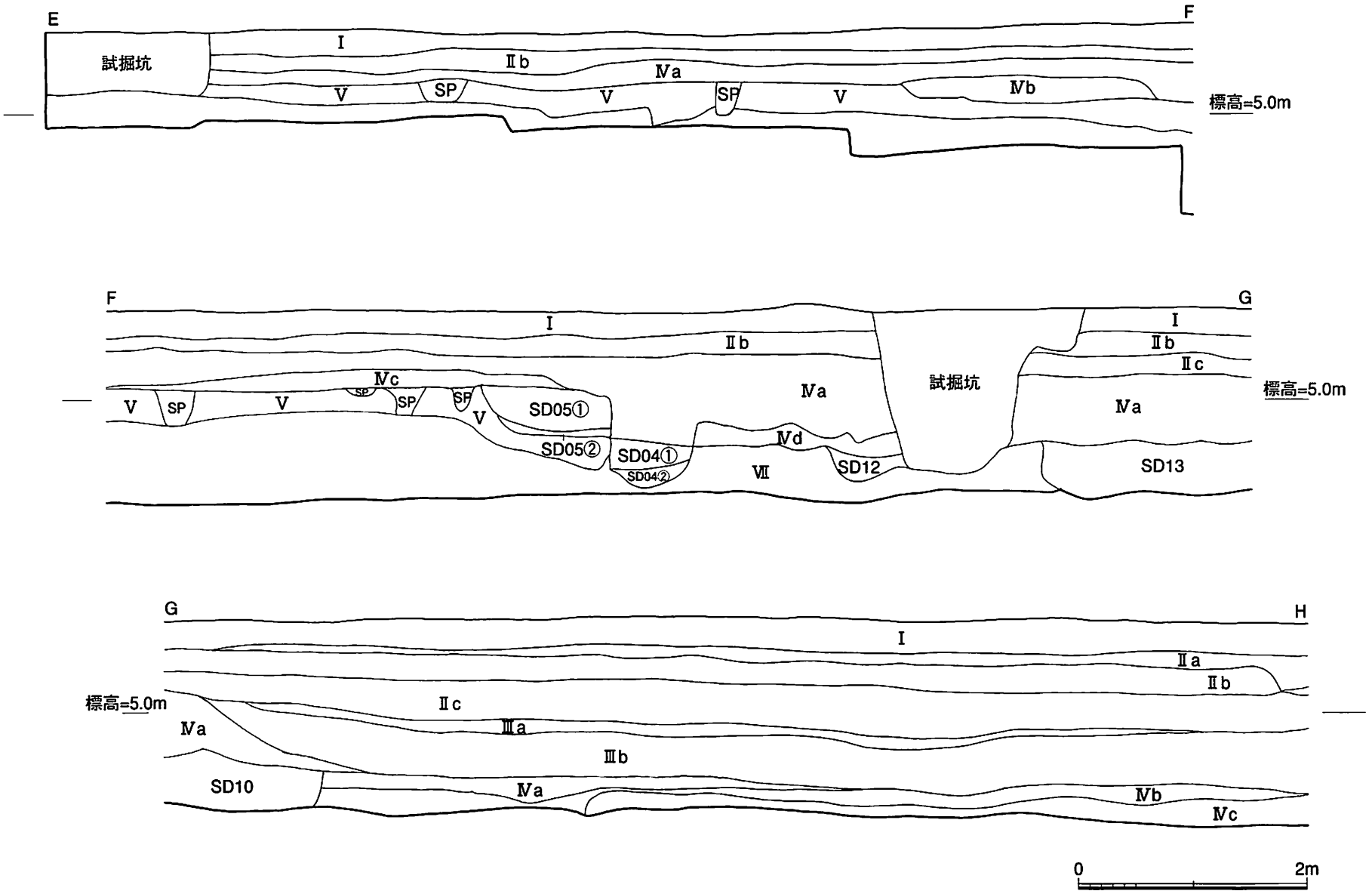
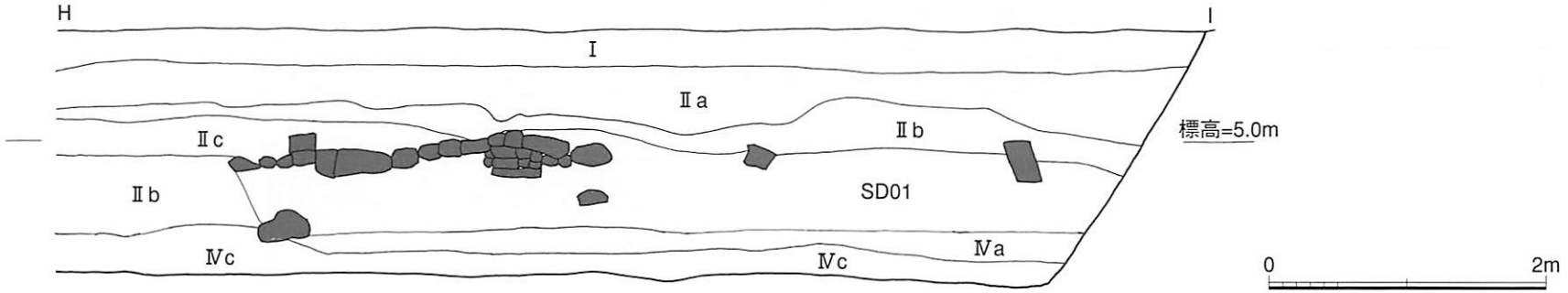


Fig. 8　西壁土層断面図①（1/50）



層位番号	土色	土質・注記
Ⅰa	褐灰(Hue7.5YR 5/1)	テニスコートの土
Ⅱa	明黄褐(Hue10YR 6/6)	北側の部分に橙(Hue10YR 6/6)を含む
Ⅱb	にぶい褐(Hue7.5YR 6/3)	一部明黄褐(Hue10YR 6/6)を含む
Ⅱc	灰褐(Hue7.5YR 5/2)	
Ⅲa	灰褐(Hue7.5YR 5/2)	橙(Hue7.5YR 6/6)が全体に見える
Ⅲb	褐(Hue7.5YR 4/3)	
Ⅳa	灰褐(Hue7.5YR 5/2)	
Ⅳc	にぶい黄褐(Hue10YR 5/4)	小さい石を含む
Ⅳb	灰褐(Hue7.5YR 4/2)	一部に橙(Hue7.5YR 6/8)を含む
Ⅴ	黒褐(Hue10YR 3/2)	
Ⅵa	灰褐(Hue10YR 4/1)	粘土質
Ⅵb	褐灰(Hue7.5YR 4/1)	石を含む
Ⅵc	暗青灰(Hue 5 PB 3/1)	粘土質　酸化により表面が変色
Ⅶ	明褐(Hue7.5YR 5/6)	第Ⅱ期面

Tab. 5　調査区西壁　土層観察表

層位番号	土色	土質・注記
Ⅰ	褐灰(Hue 5 YR 5/1)	テニスコートの土
Ⅱa－1	明黄褐(Hue10YR 6/6)	
Ⅱa－2	褐(Hue10YR 4/4)	造成土・砂
Ⅱa－3	褐(Hue7.5YR 4/4)	造成土・砂(微粒)
Ⅱb	にぶい褐(Hue7.5YR 6/3)	造成土・一部粘土質
Ⅱc	黄褐(Hue10YR 5/6)	造成土・東の方は炭が混じり土が黒くなっている
Ⅱd	黄褐(Hue10YR 5/6)	造成土・粘土質(弱粘)
Ⅱe	褐(Hue10YR 4/6)	造成土・大きい角石が混ざる
Ⅲa－1	にぶい褐(Hue7.5YR 5/4)	灰褐(Hue7.5YR 5/2)が全体に混ざる
Ⅲa－2	褐(Hue7.5YR 4/3)	橙(Hue7.5YR 6/8)が全体に混ざる　炭が点々とわずかに見える　瓦を含む
Ⅲb	褐灰(Hue7.5YR 4/1)	瓦を含む粘土質(弱粘)
Ⅴ	黒褐(Hue7.5YR 3/1)	丸石(小)がわずかにある
Ⅵa	黒褐(Hue7.5YR 3/1)	
Ⅵb	褐灰(Hue7.5YR 4/1)	橙(Hue7.5YR 6/8)を含む　下部に炭の線あり
Ⅵc	暗青灰(Hue 5 PB 3/1)	粘土質(強粘)
Ⅶ	黒褐(Hue7.5YR 3/1)	礫土　上部は大きな丸石が多く見られ下部に小さな丸石が多く含まれる
SD01	灰褐(Hue7.5YR 5/2)	酸化により赤褐(Hue2.5YR 4/6)が混ざる

Tab. 6　調査区北壁　土層観察表

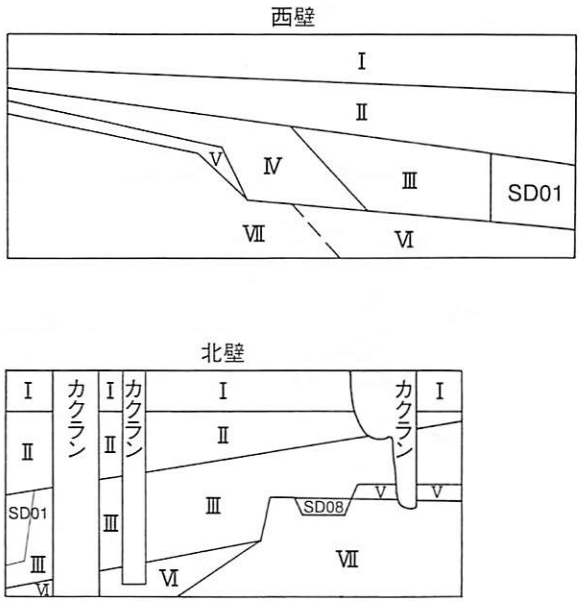


Fig.10　層序　模式図

Fig. 9　西壁土層断面図②（1/50）

Ⅳ　遺構

1．溝跡

(1)　石組側溝（SDH01）

調査区全体に広がる石組みの区画溝である。広範囲に渡るため、便宜上、①～⑤に分けている。①は長さが約15m、②は長さが17mあり、ともに南北方向に直線的に延びる。③は長さが５m、④は長さが９m、⑤は長さが10mあり、いずれも南北方向に直線的に延びる。調査区北側で①と④が、調査区中央部で①と③および⑤が直角に接続する。①と②、③と⑤の接続は食い違い状となり、直線的には接続しない。石組みに用いられる石は、大きいもので幅50センチ強あるが、小さな石も多く見られ、規則性は見受けられない。①と③および⑤は石組みが自重で沈下しないように胴木を敷いており、また①のみに石組みの裏には砕石を裏込石として入れている。米石の一部を掘削したところ板ガラスが検出された。①と③および⑤は水はけの悪い湿地を埋め立てて造成した空間に位置するため、沈下を防ぐ必要があったと思われる。②と④には胴木が見られないが、これは比較的安定した土壌に位置するためである。④の一部は石組みが見られないが、これは後世に削平を受けている可能性がある。遺構の充填土から出土した遺物は近世の陶磁器が中心であるが、裏込石から板ガラスが出土しているため、この遺構の構築時期は比較的新しい時期と思われ、幕末から近代初頭を想定している。諫早家御屋敷跡の最終期における遺構と思われる。

(2)　1号溝（SD01）

調査区の西側に位置し、北北東から南南西方向に延びる溝である。南側および北側は調査区外へ続く。重機による表土剥ぎの段階から人頭大以上の石列が検出された。現代の暗渠と思われたため、石列は重機によって部分的に飛ばされている。調査区西側にトレンチ（以下、西側トレンチ）を設定して掘削を行った際、に北側と南側で溝が分断されるかと思われたが、埋土を掘削した結果、一連の溝であることが改めて確認できた。

調査区南側においては、遺構の断面は方形または逆台形を呈する。調査区北側では１号溝埋土と下層であるⅥ層とがよく似ているため、床面の形状は判然としなかった。

埋土は灰青色、または灰色でやや粘質が強い。調査区北側の西壁では２～３段の石積みが一部に残っており、本来は石積みの溝であった可能性がある。埋土から教科書カバーや万年筆が出土するため、調査区内で最も新しい遺構であると思われる。

(3)　2号溝（SD02・SD04）

調査区の中央部に位置し、東西方向に延びる溝である。西側は調査区外へ延びると思われる。西側トレンチを掘削していた際に２列の石列が確認された（SD02）。また、調査区中央部に広がる灰色の礫層を掘削した後の第１期面において確認された（SD04）。

壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、断面は方形または逆台形を呈する。床面は平坦で、東側から溝の中央付近までは緩やかに、溝中央付近から西側ではやや急角度で西に傾斜する。

埋土は溝東側から中央付近までは１層で灰色～灰黒色を呈する。溝中央付近から西側では２層に分

かれ、上層は灰色～灰黒色、下層は灰青色に近く、粘性が非常に強い。

1号溝（SD01）に切られる。5号溝（SD05）とも切り合い関係にあるが、新旧関係は判然としない。

(4) 3号溝（SD03）

調査区南側に位置し、西側トレンチを掘削していた際に2列の石列が確認された。東西方向に延び、西側は調査区外へ続くと思われる。

石列は北側と南側で様相が異なる。北側の石列は南側に比べて礫が小さく、並びも規則性がない。礫は北側で拳大～人頭大、南側で人頭大のものを使用し、2段積んでいる所も見られる。石列の南側では、石列の掘り方と思われる遺構線も見られる。

埋土は黒褐色～灰褐色で粘質がやや強い。1号溝（SD01）に切られる。5号溝（SD05）とも切り合い関係があるが、新旧関係はよく分からなかった。

(5) 5号溝（SD05）

調査区南側をやや湾曲しつつ北西から南西へ延びる溝である。第1期面の遺構精査時に、調査区南側中央付近の包含層（灰色の礫混じり層）を除去した際に、2号溝（SD02）へ続くと想定された北西～南東方向へ延びる2列の石列が確認された。その後、下層確認および切り合い関係を把握するためにサブトレンチを設定して埋土観察を行ったところ、5号溝（SD05）が埋没した後にこの石列が構築されていることが分かり、2号溝（SD02）とは別の遺構と判断した。

床面は南東から北東にかけて浅くなる。また南東側は幅が広く平坦で、北西に向かうにつれて幅が狭くなり、床面も「U」字状を呈するようになる。溝の立ち上がりは緩やかである。

埋土は3層確認された。溝の下層には灰色粘質中に拳大～人頭大の礫が混じる土の堆積が見られる。中層には鉄分が酸化して沈着したような硬く薄い土が堆積し、上層には灰色～灰黒色粘質土に拳大～人頭大の礫が混じる土が堆積していた。そしてこの上層の上に石列が構築されているようである。

土師皿が集中して出土している。それら土師皿は欠損が少なく、重なる状況も見られる。饗宴や祭祀の痕跡と思われる。埋没時期は遺構充填土に含まれる遺物の年代観から中世末～近世初頭と判断している。

(6) 6号溝（SD06）

調査区の東側に位置し、やや湾曲しながら東西方向に延びる溝である。第1期面の遺構検出において確認されたが、遺構の平面形が不明瞭であったため、やや確認面よりも掘り下げて検出している。床面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色の砂質土に拳大の円礫が多く詰まる土である。8号溝（SD08）に切られる。

(7) 7号溝（SD07）

調査区東側に位置し、ほぼ東西方向に走る溝である。東側は調査区外へと続くと思われる。重機による表土剥ぎ後の遺構精査時に拳大～人頭大ほどの礫の詰まった溝を確認したが、当初は暗渠と判断

していた。第１期面の遺構精査時に礫層を除去した際、溝の遺構線を確認した。

断面は方形を呈し、床面は平坦で東西の標高差はほとんど見られない。埋土は上層で拳大～人頭大の礫が見られ、下層では黒褐色～暗灰黄色を呈する。石組側溝④（SDH01）、８号溝（SD08）に切られる。９号溝（SD09）を切る。

⑻　８号溝（SD08）

調査区東側に位置し、南北方向に延びる溝である。南北方向とも調査区外へ延びると思われる。重機による表土剥ぎ後の遺構精査時に、拳大程の礫が調査区南壁から石組側溝④（SDH01）まで延びる状況が確認された。第１期面の遺構検出時に礫を除去した際に溝の遺構線が確認された。実測後に第２期面で遺構検出を行ったところ、第１期面検出のほぼ真下に幅広で同軸方向の溝が検出された。調査区南側壁面での土層観察により、第１期面検出の溝と、第２期面検出の溝は時期差のある同じ溝であると判断した。

第１期面検出の溝は断面が緩やかな「U」字状を呈する。第２期面検出の溝の床面はほぼ平坦で、壁面は南側で緩やかに立ち上がるものの、北側ではやや急角度で立ち上がる。埋土は１層で、黒褐色粘質土である。６号溝（SD06）と７号溝（SD07）を切る。第２期面の溝の床面からほぞ穴のある材木が出土しているが、これには丸釘が見られたため新しい遺構といえる。

⑼　９号溝（SD09）

調査区の東側に位置し、南北に延びる溝である。南側は６号溝手前で、北側は調査区北側のトレンチ手前で終端する。第２期面での検出で、７号溝掘削後の床面に溝の遺構線が確認された。断面は方形から逆台形状を呈する。床面はほぼ平坦で、壁面はやや急角度に立ち上がる。埋土は黒褐色～暗灰黄色粘質土で、７号溝（SD07）に切られる。

⑽　10号溝（SD10）

調査区の中央部に位置し、東西に延びる溝である。東側は途中で終端する。埋土は拳大～人頭大程の礫層である。石組側溝⑤（SDH01）に接することから、これに付随する溝である可能性もある。

⑾　11号溝（SD11）

調査区の中央部に位置し、東西に延びる溝である。第２期面の遺構検出時に確認された。石組側溝②（SDH01）を掘削した際、床面に溝の遺構線が確認された。平面形はほぼ長方形、床面は平坦で断面は逆台形状を呈し、壁面は急である。埋土は灰色～灰黒色の１層である。遺構の規模や断面形など、２号溝（SD04）によく似ている。

⑿　12号溝（SD12）

西側トレンチの中央付近に位置し、北西～南東方向に走る。溝の南側は２号溝の北側で終端し、溝の北側は調査区外へ延びると思われる。試掘調査におけるTP（試掘坑）２で確認された溝と同一遺構と思われる。床面は平坦で、壁面は急である。埋土は１層で、灰色～灰黒色を呈する。

⒀ **13号溝**（SD13）

西側トレンチの中央付近に位置し、遺構の東端と思われる部分のみ検出した。ほぼ半円に近い形状である。埋土には拳大～人頭大の礫が混入する。

2．井戸跡

⑴ **1号井戸**（SE01）

調査区の中央部に位置し、1号不明遺構（SX01）と近接する。両者の切り合いの有無は判然としない。第1期面の精査時に検出したが、当初は拳大の角石や丸石が多く敷き詰められていたため、礎石と判断していた。しかし記録しながら石を取り除くと、垂直な掘り込みが確認されたため井戸跡と判断した。

⑵ **2号井戸**（SE02）

調査区の中央部に位置し、1号井戸（SE01）に隣接する。第2期面の精査時に検出した。1号井戸は掘り込みを埋めるように礫が入れられていたが、この2号井戸には礫は入れられていない。

3．その他

⑴ **1号土坑**（SK01）

調査区の南西側に位置し、1号溝（SD01）に切られると思われる。遺構は不定形で、重機による表土剥ぎ後の精査で検出した。本瓦などが出土したが、一方でビニールが出土し、また油が染み出すなどしたため、現代の撹乱である可能性が高いと思われる。

⑵ **1号礎石**（SJ0）

調査区の南側、1号土坑（SK01）の東側に位置する。重機による表土剥ぎ後の掘削で検出した。遺構は楕円形で長軸1.5m、短軸1.2mを測る。0.3mほどの掘り込みがあり、床面はほぼ平坦である。拳大から人頭大の礫が敷き詰められている。

⑶ **1号不明遺構**（SX01）

調査区中央部、1号井戸（SE01）の南側で位置し、第1期面の遺構精査時に検出した。遺構の平面形は隅丸長方形で、断面は方形を呈する。北東～南西方向に木材が1本出土している。埋土からコンクリート片が出土していることから、構築時期は新しく、近現代の遺構と思われる。

⑷ **2号不明遺構**（SX02）

調査区中央部、2号溝（SD04）の北側に位置し、第1期面の遺構精査時に検出した。遺構の平面形は隅丸長方形で、断面は方形を呈する。北東～南西方向に木材が1本出土している。1号不明遺構（SX01）と同じ構造のため、同時期の構築と推定される。

(5) 3号不明遺構（SX03）

調査区西側の南東隅に位置し、第2期面の遺構精査時に検出した。平面形は歪な楕円形を呈し、床面は平坦である。埋土は1層で灰褐色～灰黒色粘質土で、北西側から拳大～人頭大の礫がまとまって出土した。5号溝（SD05）と切り合い関係にあるが、新旧関係は判然としない。5号溝と関係のある遺構である可能性も高い。

(6) 胞衣壺

調査区東側、14号溝（SD14）の西側に位置し、第1期面の遺構精査時に検出した。直径0.3m程の円形の掘り込みで深さは0.1m。褐釉の唐津系土瓶を唐津系二彩陶器片で封じるように据えられている。

(7) ピット

個別の遺構平面図および断面図は紙面の都合で割愛する。以下、検出面ごとに説明する。

①第1期面

204基を確認した。分布する範囲はⅦ層の堆積が認められる調査区東側および調査区中央部から南西側にかけてで、調査区北西側のⅢ層が堆積する範囲には存在しない。遺構に充填する土は黒褐色系と茶褐色系の2種類があるが、その差違は判然としない。明確に掘立柱建物となる配置の柱穴は確認できない。ただし充填土の中に人頭大の礫があるものや、また2段掘りとなるものも存在することから、構造物（建築物）の基礎であったピットも存在すると思われる。比較的小径（30センチ以下）のピットがある区域に密集するような様相を見せる。

遺構から出土した遺物はTab.7～8にまとめている。同じ検出面であるが、各ピットから出土した遺物にまとまった年代観は見られない。弥生土器や古代（平城京時代か？）の須恵器、中世の貿易陶磁器に肥前陶磁器、時期不明の土師片など各種見られることから、遺構が埋没する段階での混入と思われる。遺構全体としては江戸時代における掘り込みと判断している。

②第2期面

175基を確認した。分布する範囲は第1期面と同様で、Ⅶ層の堆積が認められる調査区東側および中央部から南西部にかけてである。遺構に充填する土はほぼ茶褐色である。調査区東側と南西部ではやや様相が異なる。調査区南西部は全体的にまばらな分布を見せ、特に調査区南西部では小径（30センチ以下）のピットが多い。一方、東部は比較的大きな径のピットの比率が高く、また510a～509～506～503～504と同じような径のピットが1m程度の間隔で並ぶような配置を見せる。遺構充填土に含まれる遺物は土師器片が多く、中国白磁や施釉陶器などが散見される程度で、遺構構築の時期判断が非常に難しい。第2期面を覆う埋土であるⅤ層が近世初頭における造成層であると判断されることから、5号溝（SD5）と同じく中世末から近世初頭を下限とする年代観が与えられるものの、上限については判然としない。

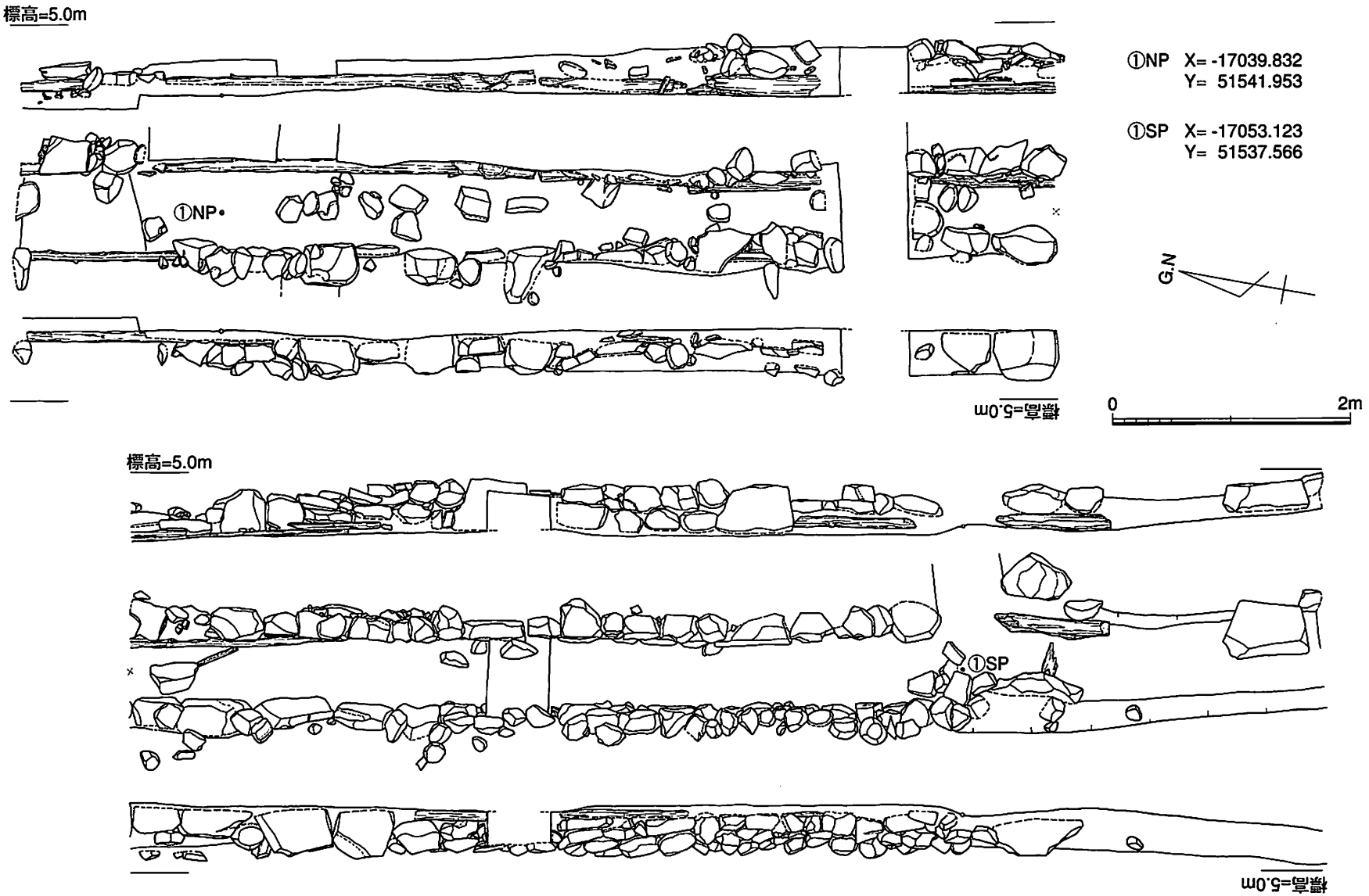


Fig.11　石組側溝（SDH01）①　平面図・立面図（1/50）

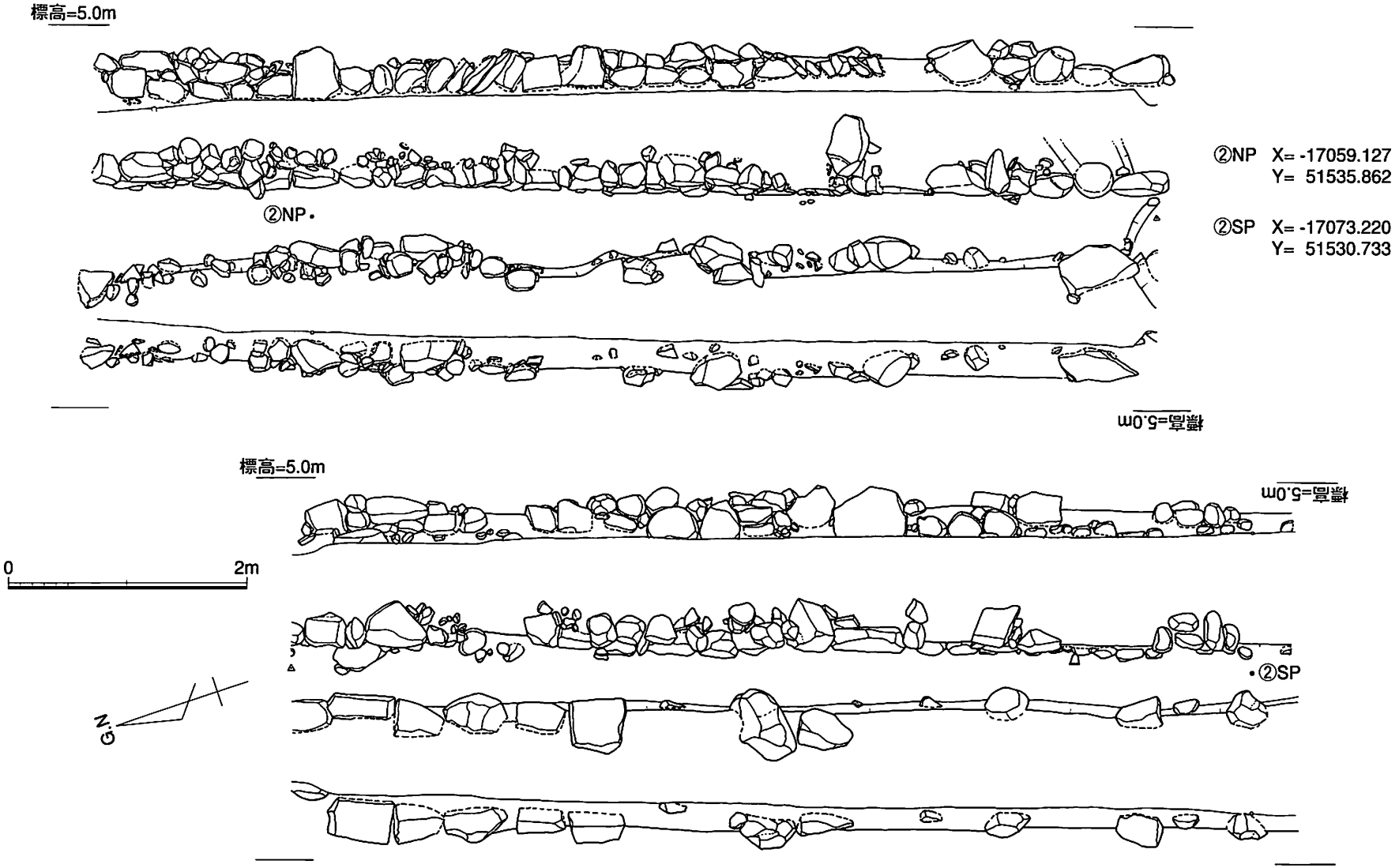


Fig.12 石組側溝（SDH01）② 平面図・立面図（1/50）

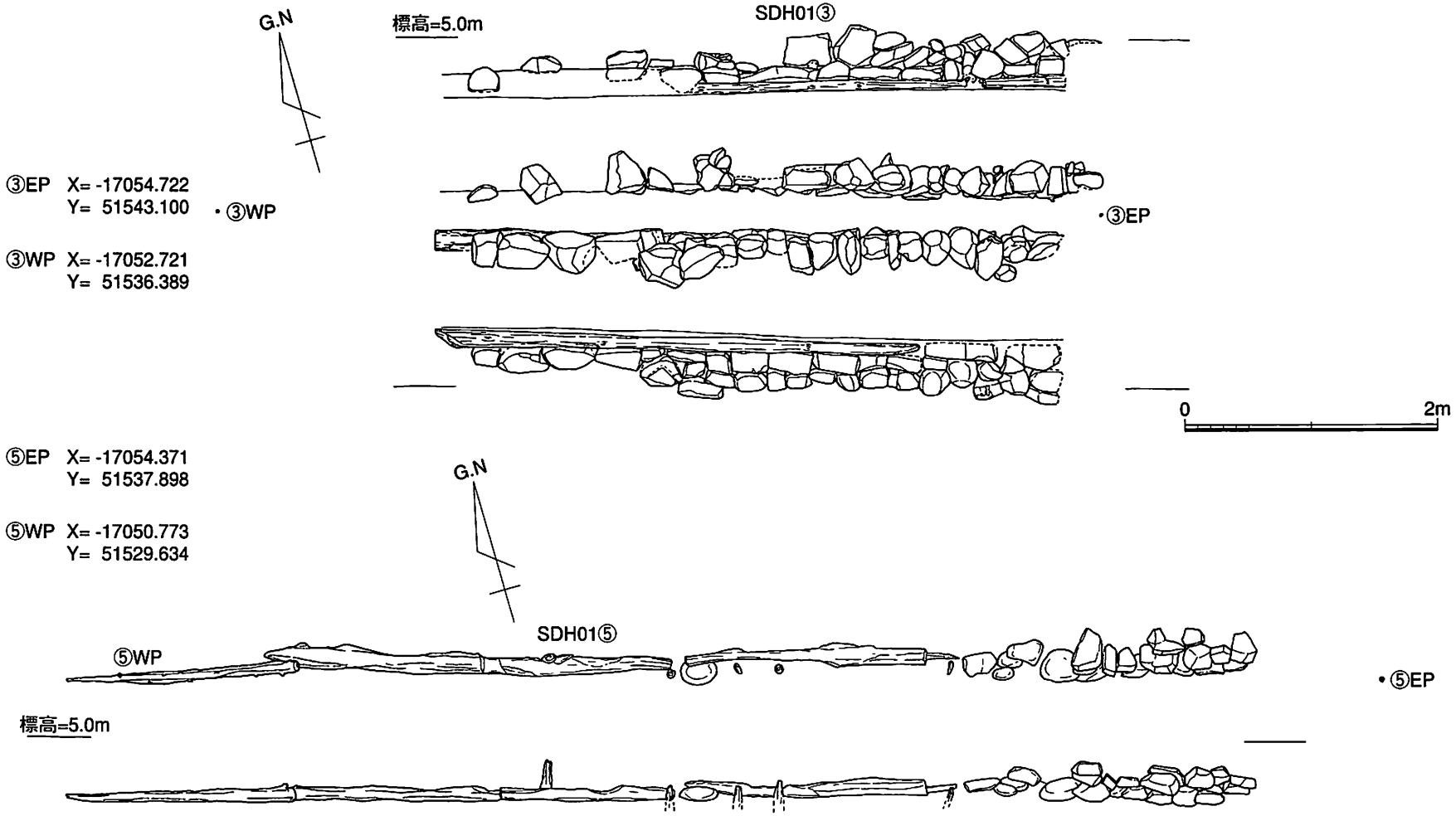


Fig.13　石組側溝（SDH01）③・⑤　平面図・立面図（1/50）

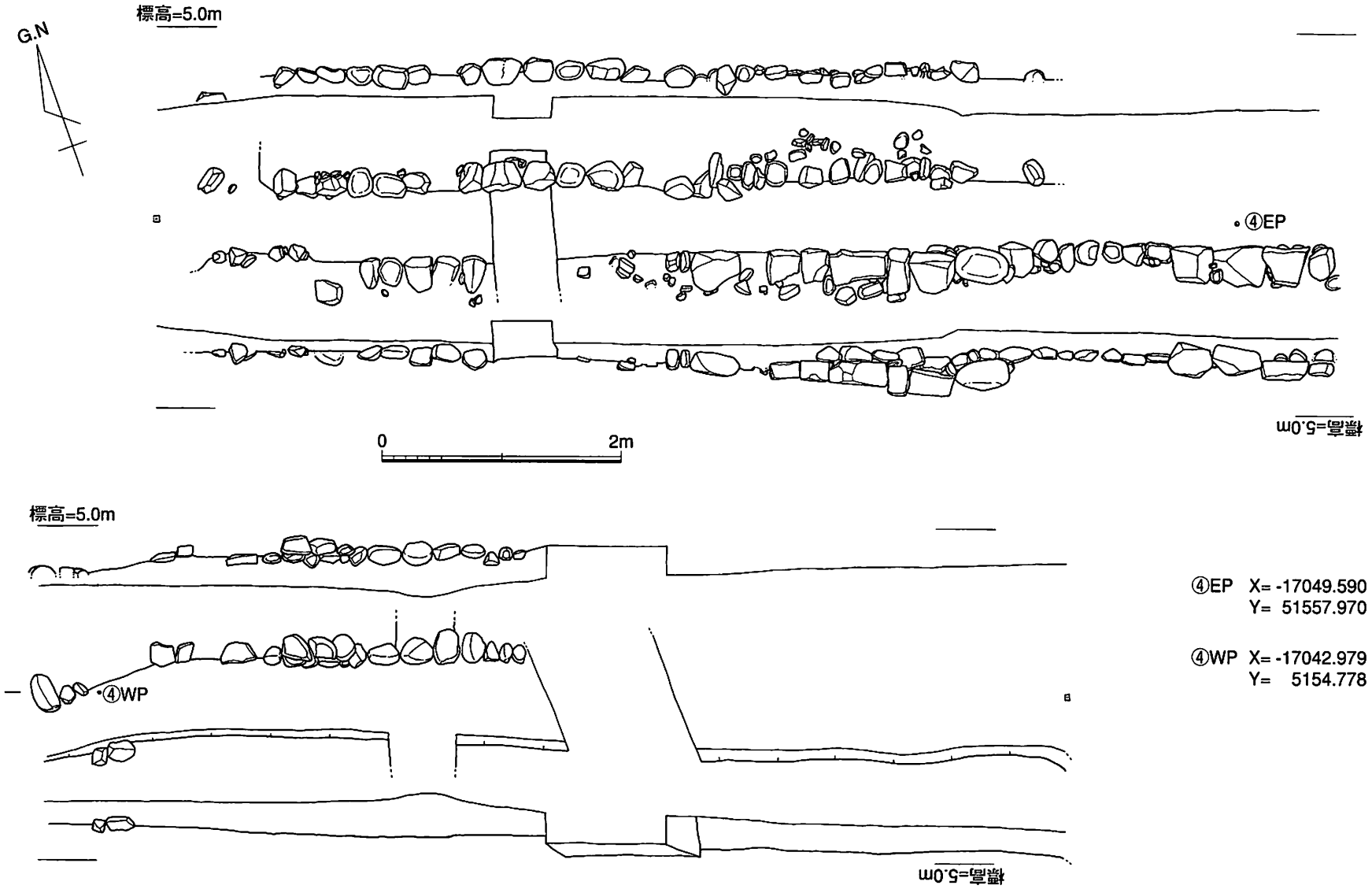


Fig.14 石組側溝（SDH01）④ 平面図・立面図（1/50）

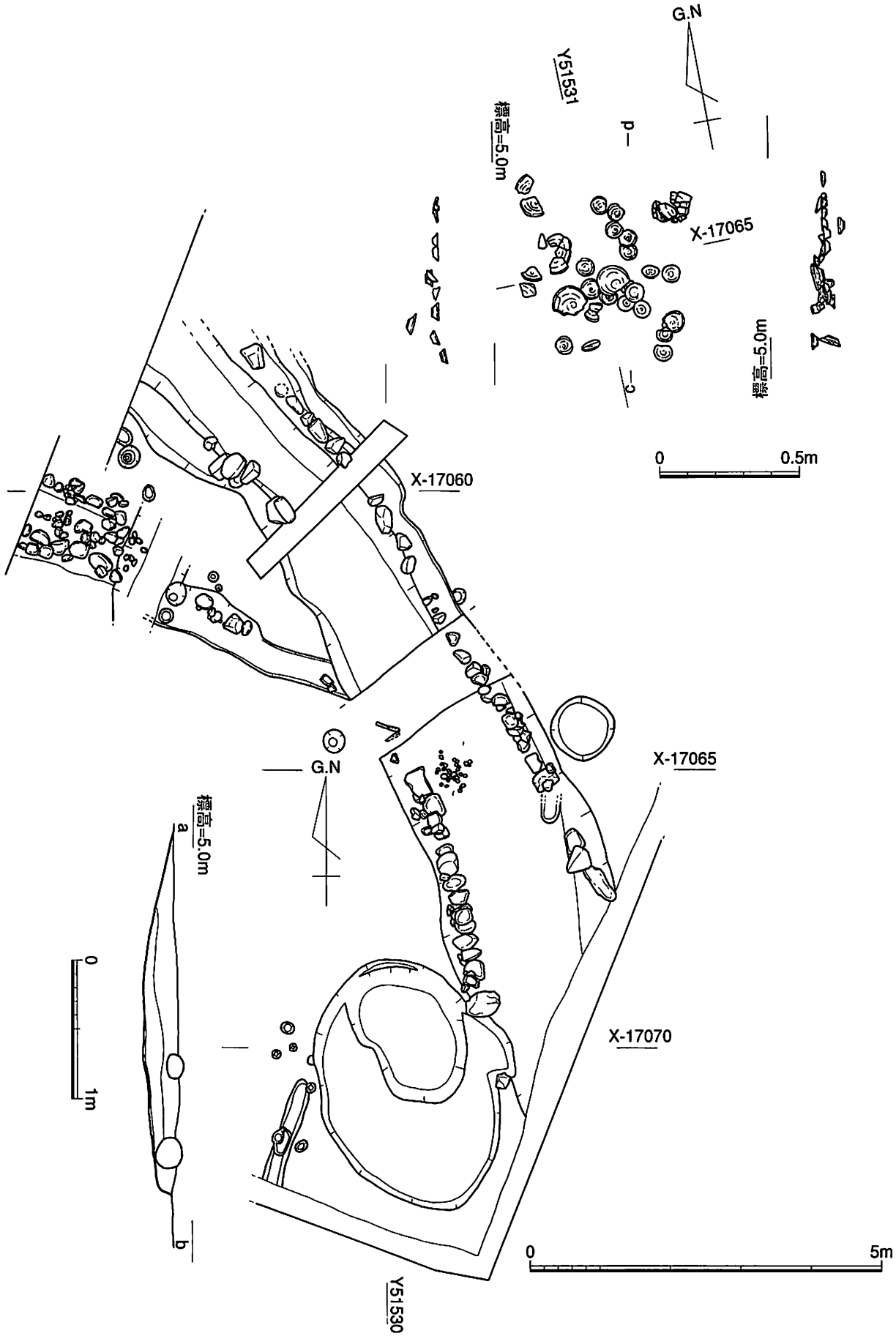


Fig.15　3号溝（SD03）　5号溝（SD05）遺構図（1/100）　5号溝土層断面図（1/40）・土師器溜まり実測図（1/20）

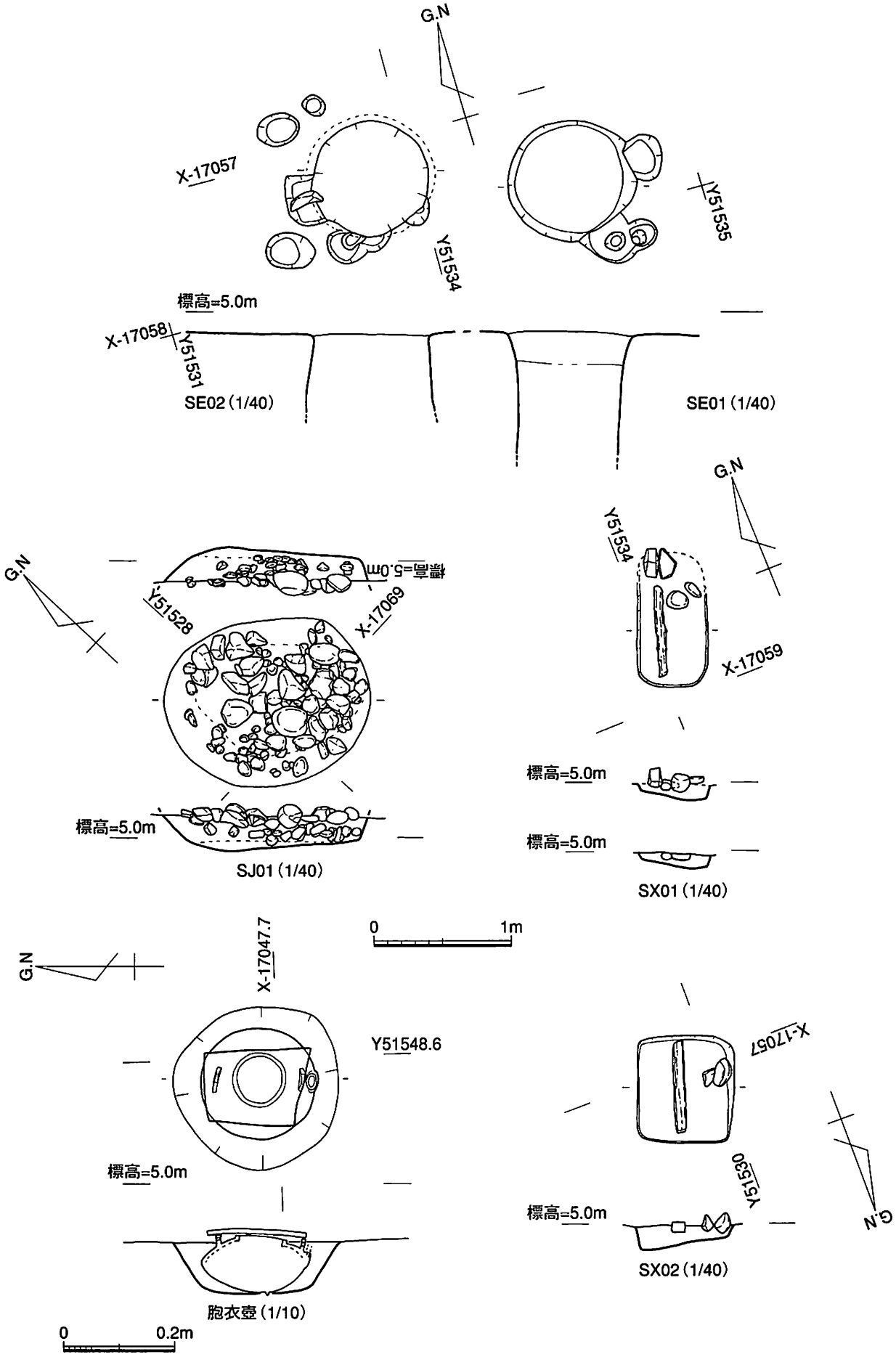


Fig.16　その他の遺構〈SE01～02　SJ01　SX01～02（1/40）　胞衣壺（1/10）〉

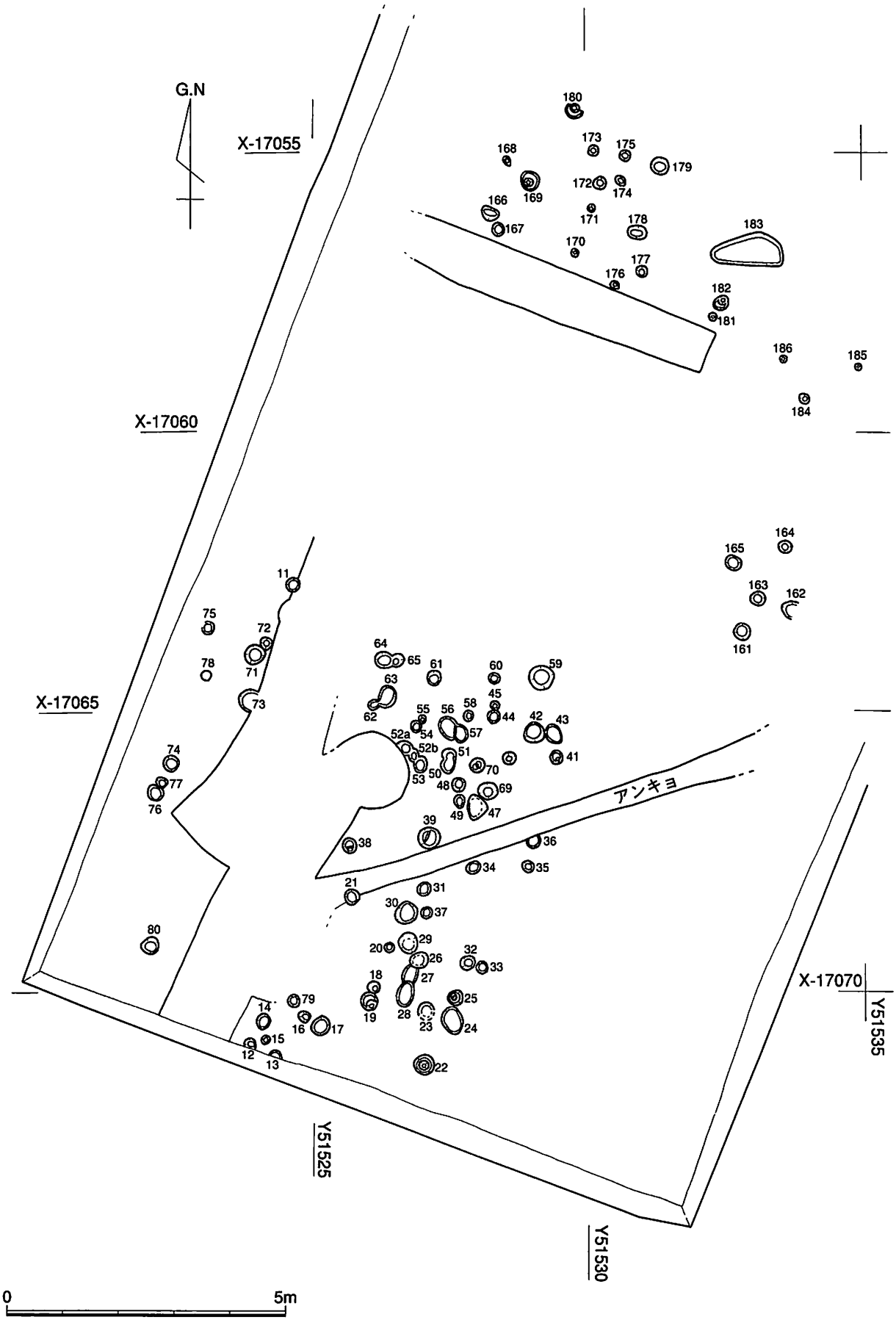


Fig.17　ピット（SP）第１期面　平面図①（1/100）

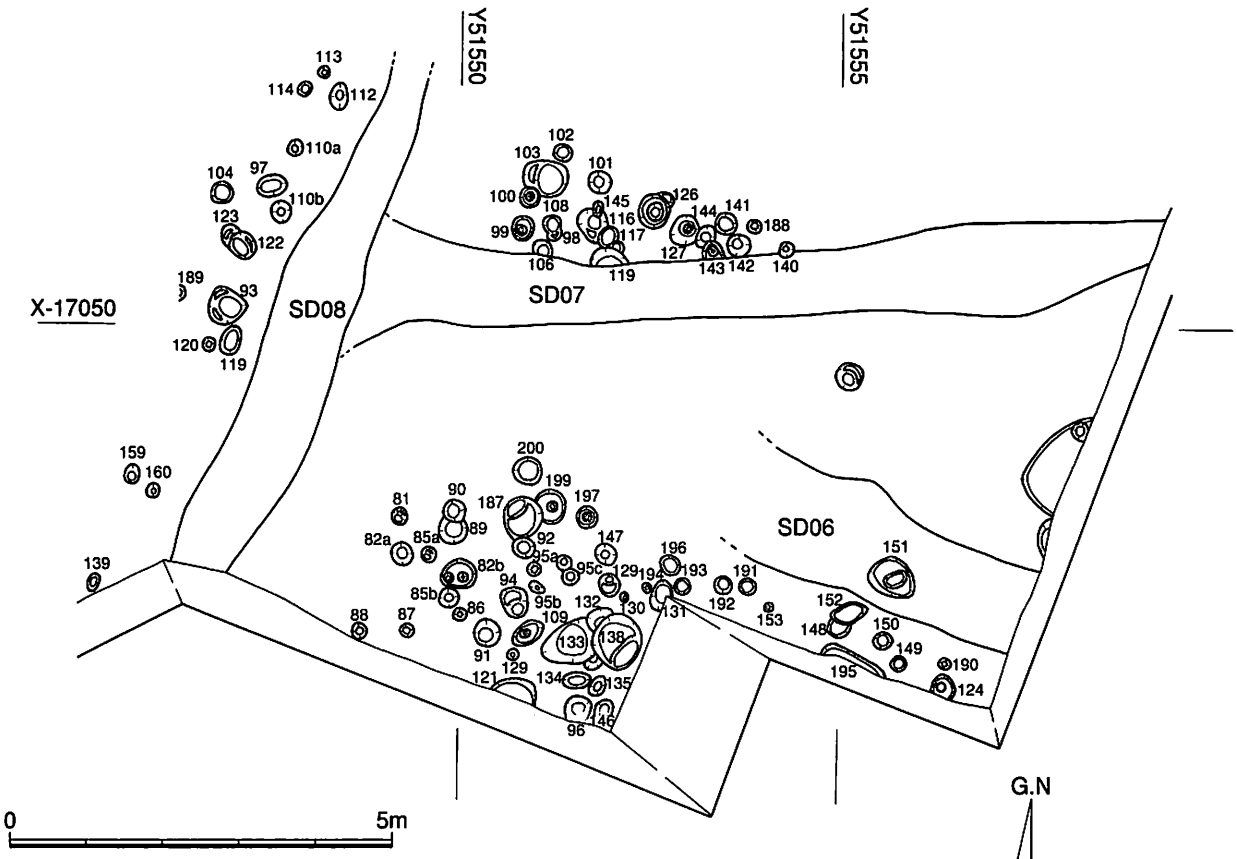


Fig.18　ピット（SP）第１期面　平面図②（１/100）

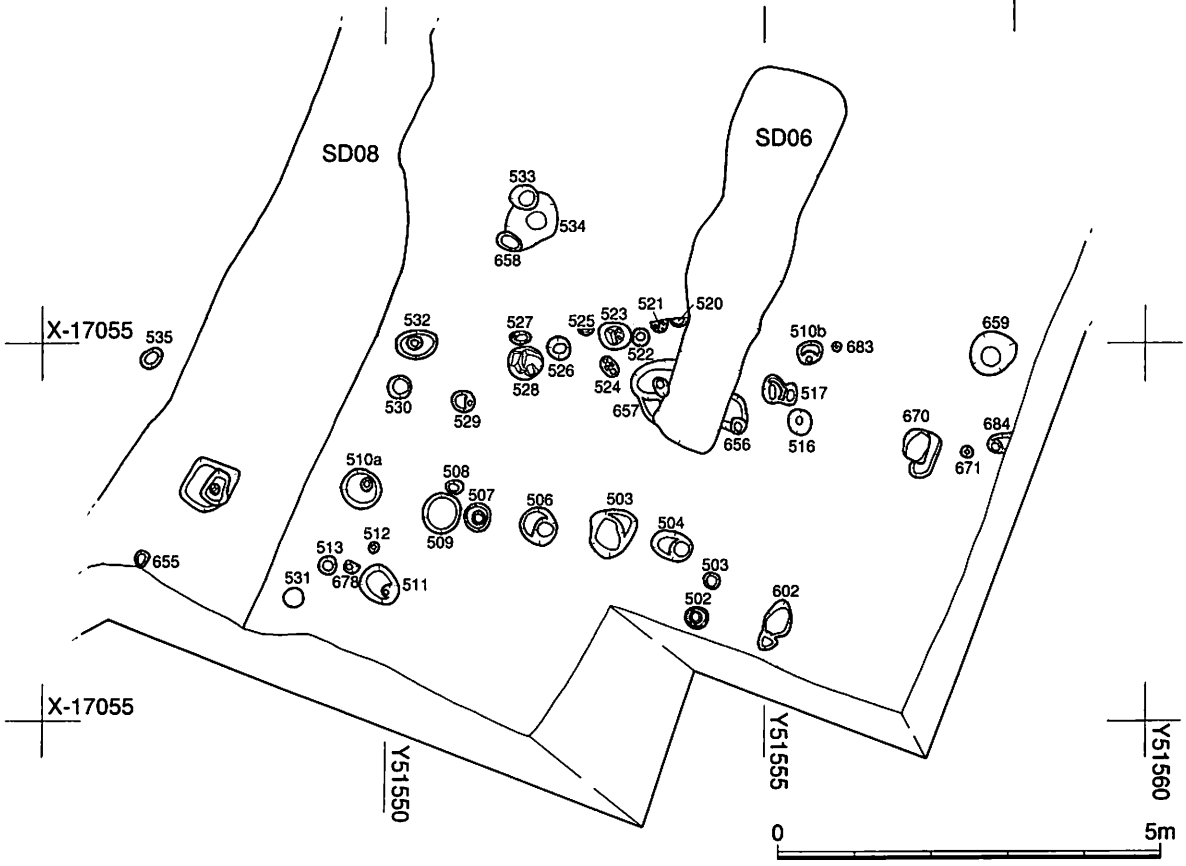


Fig.19　ピット（SP）第２期面　平面図②（１/100）

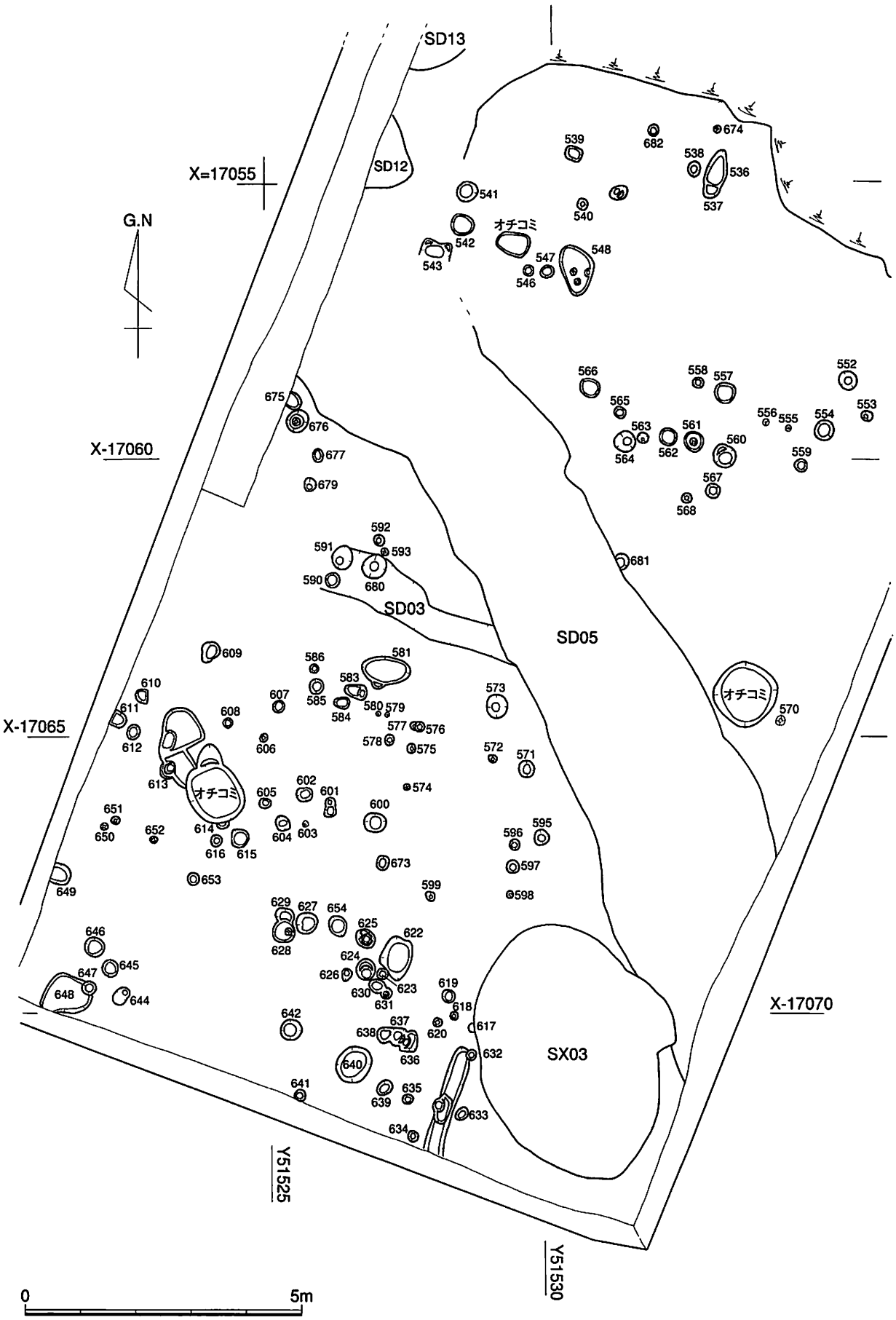


Fig.20　ピット（SP）第２期面　平面図①（１/100）

SP番号	上場標高	中段標高	下場標高	出土遺物等	SP番号	上場標高	中段標高	下場標高	出土遺物等
SP001	記録なし			土師	SP073	5.140	5.012	4.944	土師
SP002	記録なし			土師　中白	SP074	5.113	/	4.766	土師
SP003	記録なし			土師杯	SP075	5.142	/	4.935	土師
SP004	記録なし				SP076	5.109	4.964	4.910	
SP005	記録なし			土師	SP077	5.133	/	5.007	土師
SP006	記録なし			染付？	SP078	5.142	/	4.995	
SP007	記録なし			土師　中白	SP079	5.126	4.977	4.961	
SP008	記録なし			土師	SP080	5.183	/	4.929	
SP009	記録なし			土師杯　中白	SP081	5.011	4.938	4.808	
SP010	記録なし			土師	SP082a	5.036	4.903	4.890	
SP011	5.153	/	4.970	土師	SP082b	5.039	4.730	4.464	
SP012	5.150	/	4.969		SP083	記録なし			
SP013	5.180	/	5.083		SP084	記録なし			土師杯
SP014	5.155	5.082	5.031		SP085a	5.034	4.804	4.684	土師
SP015	5.158	/	5.082		SP085b	5.043	/	4.675	
SP016	5.186	/	4.958		SP086	5.045	/	4.633	
SP017	5.171	/	4.880		SP087	5.056	/	4.825	
SP018	5.157	/	4.856	土師	SP088	5.105	/	4.925	
SP019	5.157	4.950	4.773	土師	SP089	5.037	/	4.760	土師
SP020	5.116	/	4.940		SP090	4.935	/	4.728	土師
SP021	5.111	/	4.781	土師　中青	SP091	5.017	/	4.795	
SP022	5.115	4.794	4.745	土師	SP092	5.058	/	4.761	土師杯
SP023	5.165	/	4.869	土師杯	SP093	4.915	4.578	4.403	土師　須恵
SP024	5.128	/	5.043	土師	SP094	5.039	4.985	4.813	
SP025	5.160	5.001	4.929	土師　中白碗	SP095a	5.034	/	4.873	土師　須恵甕（東播）　中白
SP026	5.160	/	4.904	土師杯	SP095b	5.047	/	4.810	
SP027	/	/	5.135		SP095c	4.985	/	4.806	
SP028	5.169	/	5.123		SP095d	4.890	/	4.645	
SP029	5.157	/	4.908	土師　中白　中青碗（龍泉）	SP096	5.009	/	4.893	
SP030	5.159	/	4.821		SP097	4.915	/	4.725	
SP031	5.174	/	5.022		SP098	4.984	/	4.863	
SP032	5.175	/	4.881		SP099	4.979	4.823	4.752	土師
SP033	5.165	/	5.006		SP100	4.983	4.550	4.482	
SP034	5.167	/	4.924		SP101	4.993	/	4.510	
SP035	5.156	/	4.913		SP102	4.983	/	4.719	土師　中白
SP036	5.138	/	5.054	土師	SP103	4.986	4.784	4.528	
SP037	5.164	/	5.039	土師	SP104	4.904	/	4.721	
SP038	5.090	4.901	4.730		SP105	5.009	/	4.699	須恵甕（東播）
SP039	5.176	4.923	4.734	土師	SP106	4.975	/	4.858	土師
SP040	5.157	/	4.987		SP107	記録なし			
SP041	5.116	5.021	4.963		SP108	4.980	/	4.912	
SP042	5.124	/	4.857	土師杯　染付(東南亜？)　弥生	SP109	5.028	4.627	4.414	土師甕
SP043	5.108	/	5.014	土師　中白	SP110a	4.916	/	4.532	土師　中白皿
SP044	5.152	/	5.024		SP110b	4.928	/	4.503	
SP045	5.146	/	5.094	土師	SP111	記録なし			
SP046	5.170	/	4.883	土師杯	SP112	4.927	/	4.621	
SP047	記録なし			土師杯	SP113	4.917	/	4.793	
SP048	5.166	/	4.946	土師杯	SP114	4.921	/	4.715	
SP049	5.166	/	5.108	土師	SP115	4.986	4.767	4.602	肥前染付小杯
SP050	5.169	/	4.917	土師　施陶（朝鮮？）	SP116	4.986	/	4.946	土師
SP051	5.164	/	4.934		SP117	4.977	/	4.887	土師
SP052a	5.174	/	4.970	土師　須恵	SP119	4.879	/	4.647	
SP052b	/	/	4.997		SP120	4.879	/	4.715	土師杯
SP053	5.175	/	5.006	曽畑（縄文）	SP121	5.021	/	4.769	
SP054	5.174	/	5.074		SP122	4.930	4.764	4.525	土師杯　中
SP055	5.186	/	5.126		SP123	4.910	4.730	4.573	
SP056	5.175	/	4.959	土師	SP124	4.882	4.523	4.329	
SP057	5.164	/	5.077	中白	SP125	4.983	4.892	4.325	
SP058	5.161	/	4.981	土師	SP126	4.973	/	4.913	土師杯
SP059	5.150	/	4.941	土師	SP127	4.977	4.716	4.615	土師
SP060	5.154	/	5.112		SP129a	5.008	4.887	4.826	
SP061	5.168	/	5.014	土師　中白　瓦質擂鉢	SP129b	5.015	/	4.905	
SP062	5.216	/	5.077		SP130	5.015	/	4.785	土師
SP063	5.189	/	5.071		SP131	4.970	/	4.732	土師杯
SP064	5.200	/	4.955	土師	SP132	5.013	/	4.387	土師杯
SP065	5.181	/	4.933		SP133	5.014	/	4.395	土師　青花　中白輪花皿　施陶
SP066	記録なし			土師　施陶（唐津）　青花	SP134	5.023	/	4.738	土師
SP067	記録なし				SP135	5.000	/	4.871	
SP068	記録なし			土師　須恵　瓦質捏鉢（東播）	SP136	5.005	/	4.570	
SP069	5.162	/	4.845	土師	SP137	記録なし			
SP070	5.174	5.060	4.997	須恵杯（平城？）	SP138	4.983	4.607	4.364	
SP071	5.147	/	4.881	須恵杯（平城？）	SP139	4.986	/	4.898	
SP072	5.165	4.924	4.790	土師杯	SP140	4.969	/	4.741	

Tab. 7　第1期面検出ピット　標高一覧表　※中白は中国白磁、中青は中国青磁の略

SP番号	上場標高	中段標高	下場標高	出土遺物等
SP141	4.977	/	4.621	
SP142	4.967	/	4.610	
SP143	4.967	4.826	4.698	土師杯
SP144	4.967	/	4.795	
SP145	／	/	4.827	
SP146	5.010	/	4.904	
SP147	4.910	/	4.740	
SP148	4.847	/	4.560	中白碗（口禿）
SP149	4.873	/	4.821	
SP150	4.864	/	4.498	土師杯
SP151	4.776	4.550	4.364	土師杯
SP152	4.878	/	4.663	
SP153	4.844	/	4.592	
SP154	記録なし			
SP155	4.875	/	4.832	
SP156	4.841	/	4.507	土師杯
SP157	4.955	/	4.744	土師　中白
SP158	4.867	4.755	4.532	
SP159	4.875	4.667	4.356	中白
SP160	4.995	/	4.832	土師
SP161	5.112	/	4.988	土師
SP162	5.130	/	4.957	
SP163	5.102	/	4.964	
SP164	5.119	/	4.987	
SP165	5.049	/	4.945	土師
SP166	4.988	/	4.851	
SP167	4.992	/	4.845	
SP168	4.994	/	4.965	
SP169	5.000	4.943	4.877	
SP170	5.007	/	4.863	
SP171	5.007	/	4.924	
SP172	5.104	/	4.944	
SP173	5.007	/	4.863	
SP173	4.876	/	4.796	
SP174	5.000	/	4.912	
SP175	4.995	/	4.953	
SP176	4.999	/	4.913	
SP177	5.018	/	4.915	
SP178	5.012	/	4.867	土師杯
SP179	4.976	/	4.712	
SP180	4.902	4.768	4.629	土師杯
SP181	5.000	/	4.870	土師
SP182	5.000	4.851	4.659	土師杯
SP183	4.996	/	4.816	土師　瓦質　施陶
SP184	5.013	/	4.870	
SP185	4.964	/	4.790	
SP186	5.015	/	4.967	
SP187	4.952	4.770	4.615	肥前染付　施釉(唐津)　中青碗(龍泉)
SP188	4.971	/	4.913	
SP189	4.902	/	4.744	
SP190	4.874	/	4.472	
SP191	4.857	/	4.748	
SP192	4.872	/	4.698	
SP193	記録なし			中青碗（龍泉）　焼締陶？
SP194	4.927	/	4.746	
SP195	4.850	/	4.594	
SP196	4.905	/	4.805	土師　中青碗（龍泉）
SP197	4.900	4.713	4.637	
SP198	記録なし			
SP199	4.883	4.726	4.438	土師杯
SP200	4.926	/	4.694	土師杯

Tab. 7　第１期面検出ピット　標高一覧表
※中白は中国白磁、中青は中国青磁の略

SP番号	上場標高	中段標高	下場標高	出土遺物等
SP501	記録なし			
SP502	4.756	4.725	4.151	土師
SP503	4.754	/	4.102	
SP504	4.736	4.581	3.978	須恵甕　中白皿
SP505	4.712	4.490	4.303	施陶　土師　中白　肥前青磁
SP506	4.704	4.593	4.311	
SP507	4.716	4.660	4.279	
SP508	4.710	/	4.653	
SP509	4.723	/	4.756	
SP510a	4.785	4.620	4.411	
SP510b	4.788	/	4.511	
SP511	4.775	4.570	4.431	
SP512	4.763	/	4.713	
SP513	4.790	/	4.474	土師皿
SP514	記録なし			
SP515	記録なし			
SP516	4.775	/	4.840	
SP517	4.642	/	4.250	土師
SP518	記録なし			
SP519	記録なし			
SP520	4.808	/	4.703	
SP521	/	4.820	4.661	
SP522	4.845	/	/	土師杯
SP523	4.725	/	4.611	
SP524	4.822	4.739	4.613	
SP525	4.880	/	4.725	
SP526	4.833	/	4.527	
SP527	4.842	4.628	4.440	
SP528	4.806	/	4.637	中白碗
SP529	4.765	4.579	4.482	
SP530	記録なし			
SP531	4.786	/	4.571	
SP532	4.840	4.606	4.508	土師
SP533	4.883	/	4.540	
SP534	4.864	/	4.506	
SP535	4.810	/	4.463	
SP536	4.630	/	3.820	土師
SP537	4.680	/	3.720	
SP538	4.800	/	4.600	
SP539	4.870	/	4.790	
SP540	4.840	/	4.820	
SP541	4.790	/	4.500	
SP542	4.790	/	4.630	
SP543	4.750	4.630	4.260	土師
SP544	4.730	/	4.540	
SP545	記録なし			
SP546	4.820	/	4.770	
SP547	4.820	/	4.810	
SP548	4.850	4.770	4.670	
SP549	記録なし			
SP550	記録なし			
SP551	記録なし			肥前白磁紅皿
SP552	4.750	/	4.530	土師
SP553	4.760	/	4.610	土師杯
SP554	4.820	/	4.710	土師
SP555	4.820	/	4.770	
SP556	4.830	/	4.760	
SP557	4.880	/	4.780	土師杯
SP558	4.880	/	4.770	
SP559	4.830	/	4.800	
SP560	4.880	4.840	4.670	土師　中白
SP561	4.890	4.640	4.550	
SP562	4.890	/	4.830	
SP563	4.890	/	4.790	土師杯
SP564	4.890	/	4.570	
SP565	4.890	/	4.840	
SP566	4.900	/	4.860	
SP567	4.880	/	4.730	
SP568	4.880	/	4.760	
SP569	記録なし			瓦質
SP570	4.840	/	4.760	土師杯
SP571	4.820	/	4.540	
SP572	4.840	/	4.730	

Tab. 8　第２期面検出ピット　標高一覧表
※中白は中国白磁、中青は中国青磁の略

SP番号	上場標高	中段標高	下場標高	出土遺物等
SP573	4.850	/	4.650	
SP574	4.850	/	4.720	
SP575	4.840	/	4.750	
SP576	4.850	/	4.770	
SP577	4.850	/	4.820	
SP578	4.840	/	4.740	
SP579	4.860	/	4.750	
SP580	4.860	/	4.720	
SP581	記録なし			
SP582	記録なし			
SP583	4.870	4.800	4.770	
SP584	4.870	/	4.680	
SP585	4.880	/	4.710	
SP586	4.880	/	4.670	
SP587	記録なし			
SP588	記録なし			
SP589	記録なし			
SP590	4.830	/	4.630	
SP591	4.900	/	4.550	
SP592	/	/	4.770	
SP593	4.880	/	4.590	土師　施陶？
SP594	記録なし			
SP595	4.830	/	4.570	
SP596	/	/	4.790	
SP597	/	/	4.730	
SP598	4.850	/	4.640	
SP599	4.880	/	4.790	
SP600	4.850	/	4.530	
SP601	4.870	4.830	4.780	土師　施陶？
SP602	4.880	/	4.800	
SP603	4.880	/	4.580	
SP604	4.890	/	4.500	
SP605	記録なし			
SP606	4.900	/	4.800	
SP607	4.860	/	4.790	
SP608	4.880	/	4.630	
SP609	記録なし			
SP610	4.930	/	4.770	
SP611	4.930	/	4.740	
SP612	4.930	/	4.760	
SP613	4.980	4.970	4.840	
SP614	4.900	/	4.620	
SP615	4.880	/	4.690	
SP616	4.850	/	4.770	
SP617	4.941	/	/	
SP618	4.930	/	4.917	
SP619	記録なし			
SP620	4.980	/	4.865	
SP621	記録なし			
SP622	4.990	/	4.560	
SP623	4.990	/	4.900	
SP624	4.980	4.720	4.620	
SP625	4.930	/	4.760	
SP626	4.980	/	4.820	
SP627	4.970	/	4.780	
SP628	4.980	/	4.500	土師　施陶（朝鮮？）
SP629	4.900	/	4.750	
SP630	4.960	/	4.730	
SP631	4.960	4.880	4.710	
SP632	4.924	/	4.860	
SP633	4.950	/	4.800	
SP634	4.930	/	4.790	
SP635	4.940	/	4.850	
SP636	4.970	/	/	
SP637	4.980	/	/	
SP638	4.980	/	/	土師杯
SP639	4.940	/	4.740	
SP640	4.992	/	/	
SP641	5.000	/	4.930	
SP642	5.010	/	4.760	
SP643	記録なし			
SP644	4.930	/	4.850	土師杯
SP645	4.940	/	4.710	土師

SP番号	上場標高	中段標高	下場標高	出土遺物等
SP646	4.920	／	4.800	土師杯　中青（龍泉）
SP647	4.940	／	4.710	
SP648	記録なし			
SP649	4.930	／	4.610	中白
SP650	4.970	／	4.880	
SP651	4.980	／	4.900	
SP652	4.900	／	4.650	須恵壺
SP653	4.830	／	4.670	土師杯
SP654	4.990	／	4.600	
SP655	4.531	／	4.449	
SP656	4.785	4.559	4.422	
SP657	4.799	4.415	4.303	
SP658	4.854	／	4.575	
SP659	4.790	／	4.375	
SP670	4.674	4.595	4.219	
SP671	4.710	／	4.607	
SP672	4.777	4.670	4.580	
SP673	4.880	／	4.740	
SP674	4.840	4.760	4.700	
SP675	4.890	／	4.750	
SP676	4.890	4.820	4.660	
SP677	4.900	／	4.510	
SP678	記録なし			
SP679	4.930	／	4.580	
SP680	4.880	／	4.250	
SP681	4.860	／	4.730	
SP682	4.870	4.860	4.610	
SP683	4.693	／	4.635	
SP684	4.710	4.677	4.530	

Tab. 8　第2期面検出ピット　標高一覧表

※中白は中国白磁、中青は中国青磁の略

Ⅴ　遺物

1．出土遺物の概要

遺物は近代以降の瓦廃棄土壙のものを除くと整理コンテナにして59箱出土した。うちわけは土器42箱、瓦類10箱、金属製品３箱、銭貨１箱、石製品２箱、木製品１箱で、多くは幕末以降の造成土および石組遺構（SDH01）からの出土である。遺構に伴う遺物は比較的少量であり、とりわけピットからは遺構の時期を特定し得るほどの量は出土しなかったが、第２面遺構である５号溝（SD05）土師器溜まり出土の一括土師器皿など非常に良好な資料であるといえる。土器類は器種、産地別に、肥前・唐津系の磁器、施釉陶器供膳系が最も多く、次いで土師器供膳系、陶器煮沸系、貯蔵系となる。時期を問わず調査区内のほとんどの遺構には古代から中世にかけての輸入陶磁器が一定量混じる。また特筆すべきものとしては、遺構には伴わないが、当地に縁の深い諫早家に関連する遺物が挙げられる。土器類の時期別出土割合としては桃山時代から江戸時代初頭にかけてと、江戸時代後期以降の２時期に大別できるといえる。

本報告では当調査区の遺構の変遷を考える上で重要な遺物や一括性の高い遺物をはじめ、そのほか遺跡および周辺の性格をあらわすものを中心に挙げる。

なお金属製品、銭、石製品の出土地点および詳細については観察表にゆだねる。

2．土器類

(1)　Ⅲ層（造成土）出土遺物～幕末以降の遺物～

近代の造成土中から大量の遺物が出土した。時期にまとまりはなく中世から近代の多種多様な遺物が混ざり合う。これらは造成時、他所から運ばれた土中に含まれていたものとみられるが、当調査区の遺構には時期を問わず輸入磁器が普遍的に混入することから比較すると、出土遺物量に対して輸入磁器混入の比率は低い。ここでは特徴的なものをはじめ、できるだけ多くの類例を挙げる。供膳系土師器（１～15）の形状は様々で多くは他の遺構出土のものと様相を異にする。皿（１）は灰白色で器壁が薄く非常に丁寧な作りである。ロクロ成形で底部外面は螺旋状に回転ナデを施す。胎土には雲母を多く含み、見込みと底部外面は焼成不良のため黒色化する。皿（２・３）は灰白色で胎土に雲母を多く含む。底部外面は回転糸切り後にオサエを施したとみられるが、成形技法はロクロか手捻り成形か不明瞭である。皿（４）は灰白色で胎土にやや多く雲母を含み、残存部にはヨコナデを施す。手捻り成形か。（５）は手捻り成形で、灰白色の胎土には多くの雲母を含み、椀状を呈す。口縁部にはヨコナデ、底部外面にはオサエ、見込み部にはナデを施す。各部所の成形技法は平安京の土師器と同様であるが形状から関連性は伺えない。（６～15）はいずれもロクロ成形で底部外面に回転糸切り跡が残る。小型皿（６）は精良な胎土で浅黄燈色を呈す。ロクロ成形時に内面から強い力を加えたことにより底部外面は押さえつけられ平坦になる。皿（７）はにぶい橙色で、平坦な底部から短い口縁部が折れ曲がるように直線的に立ち上がりそのままおさめる。坏（８）はにぶい橙色で胎土に赤色粒を多く含み、口縁端部に燈明芯の掛け跡が残る。底部は高台状を呈す。坏（９）は灰白色で小ぶりな底部は高く高台状を呈す。坏（10・11）はにぶい橙色を呈す。坏（12）はにぶい橙色で、荒い回転糸切りにより底部外面に段が生じる。坏（13）は灰白色で、底部外面には直線の窪みが２条確認できるが、

これは成形台の突起によるとみられる。坏（14）は灰白色で非常に器壁が厚い。大型（15）はにぶい橙色で、平坦な底部からやや短い口縁部が緩やかに立ち上がり皿状を呈す。塩壺蓋（16）はにぶい橙色を呈し胎土に1～3㎜程度の長石、石英を多く含む。塩壺蓋（17～19）は浅黄燈色、（20）は橙色を呈し、いずれも内面に布目跡が残る。塩壺（21）は板作り成形でにぶい橙色を呈す。塩壺（22）は板作り成形で、体部と底部を貼り合わせる。にぶい橙色を呈す。内面には布目跡が残り、煤が吸着する。土師質目皿（23）はにぶい橙色を呈し、2か所以上の穿孔が確認できる。表面には使用に伴う灰が厚く堆積し、裏面の所々に直線的な条線がはしる。土師質目皿（24）は浅黄燈色を呈し、4か所以上の穿孔が確認できる。表面には使用に伴う灰が薄く溶着する。また両面全体に断面非三角鋸波形の窪みが弧状にはしり、キラコが付着する。土錘（25）は橙色を呈し、表面にはオサエ跡が残る。土鈴（26）は浅黄燈色を呈し、胎土に長石粒を多く含む。中国産施釉陶器碗（27）は鉄釉を掛け、畳付けに離れ砂が溶着する。胎土は灰色、硬質である。施釉陶器碗（28）は粗雑に鉄釉を掛け、見込みは青色変化する。胎土は精良、浅黄燈色を呈し畳付けには離れ砂が溶着する。輸入品か。瀬戸・美濃系施釉陶器皿（29）は鉄釉を掛け、口縁部内面は花弁をあらわしたとみられる。見込みの釉薬は掻き取り平滑となる。二次転用品としての可能性も考えられる。唐津系施釉陶器皿（30）は灰釉に貫入が目立つ。施釉陶器多角形皿（31）はにぶい赤燈色の精良な胎土に銹釉を掛ける。見込みには六角形の突帯区画内の内側に獅子文様を型押しする。器壁は薄く丁寧な作りである。外形の全様および産地は不明。施釉陶器皿（32）は全体に銹釉を、さらに口縁部外面の下方の一部と高台内側に赤燈色の鉄釉を掛ける。内面の鉄釉は黒褐色で刷毛目となる。灰色の胎土は硬質で、高台周辺と体部上方には飛び鉋をかける。産地は不明。施釉陶器蓋（33）は平面正方形でつまみをもち、一か所に直径約1㎜の孔を穿つ。表面のみ鉄釉を掛け、その上から斑文状に灰釉が掛かる。手捻り成形で、裏面には指オサエの指紋が明瞭に残る。京都産か。施釉陶器（34）は銅緑釉を薄く掛ける。器形および産地は不明。淡路産施釉陶器珉平焼碗（35）は黄釉を掛け、見込みに文様を型押しする。雲文が確認できるが全体のモチーフは不明である。現川産施釉陶器碗（36～39）はいずれも精良な胎土である。碗（36）は器壁が薄く非常に丁寧な作りで、口縁部先端は外反する。オリーブ色の釉薬を掛け、刷毛目は目立たず不明瞭である。碗（37）は褐色の釉薬に外面は白濁の釉薬を掛け分ける。高台には半月状の切れ込みを入れ、畳付けにはわずかに離れ砂が確認できる。碗（38・39）の釉薬はオリーブ褐色である。京都・信楽系施釉陶器碗（40・41）は明オリーブ色の釉薬を掛け、外方にやや張りだす高台とその周辺の一部は無釉である。いずれにも貫入が目立つ。肥前京風碗（42）は浅黄色の釉薬を掛け、高台とその周辺は無釉である。見込みの錆絵は山水文か。唐津系施釉陶器土瓶(43・44)はにぶい橙色の胎土に外面はオリーブ色の釉薬を薄く掛ける。側面に注口、そのつけ根と対面に把手、体部の下方3か所に脚をもつ。施釉陶器小型鍋（45）は鉄釉を掛け、外面底部付近は無釉である。産地は不明。施釉陶器壺（46）は灰赤色で長石を含む胎土に鉄釉を掛ける。産地は不明。施釉陶器壺（47）は胎土に多くの石英・長石粒を含み外面に灰釉を薄く掛ける。信楽系か。施釉陶器（48）は灰色の胎土で、内外面には鉄釉を厚く掛ける。産地は不明、壺か。焼締め陶器小鉢（49）は褐灰色の胎土に銹釉を掛け、口縁部には鉄釉を薄く上掛ける。産地は不明。焼締め陶器擂り鉢（50）はにぶい橙色とにぶい赤褐色の混合土に鉄錆を掛ける。高台をもち、擦り目は使用により磨滅する。瀬戸・美濃系か。肥前系白磁菊花紅皿(51～55)は型打ちで外面の菊花をあらわし、口縁部先端は切り離しのため平坦な面となる。内面と外面の上方

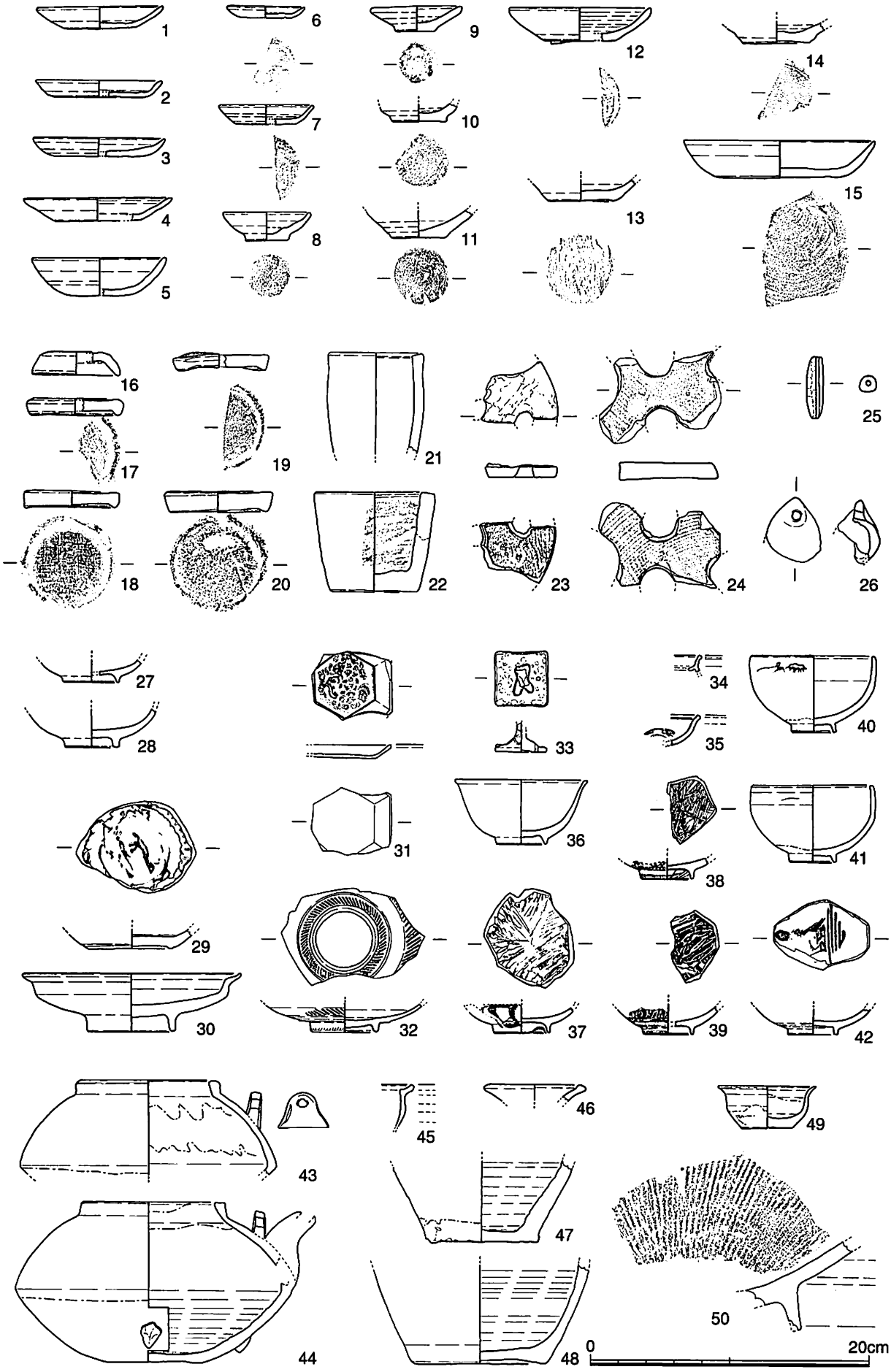


Fig.21　Ⅲ層（造成土）出土土器類①（1/4）

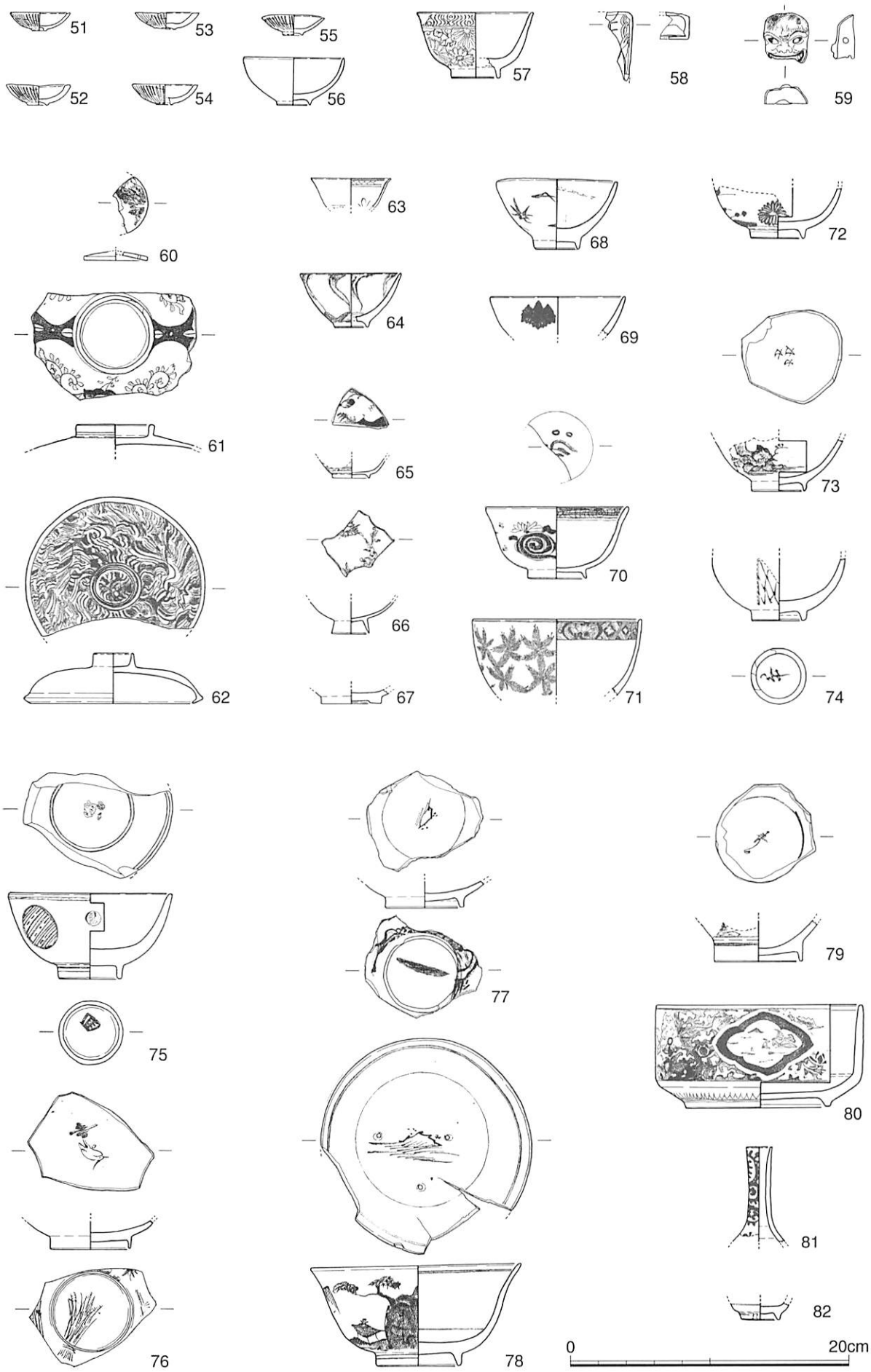


Fig.22　Ⅲ層（造成土）出土土器類②（1/4）

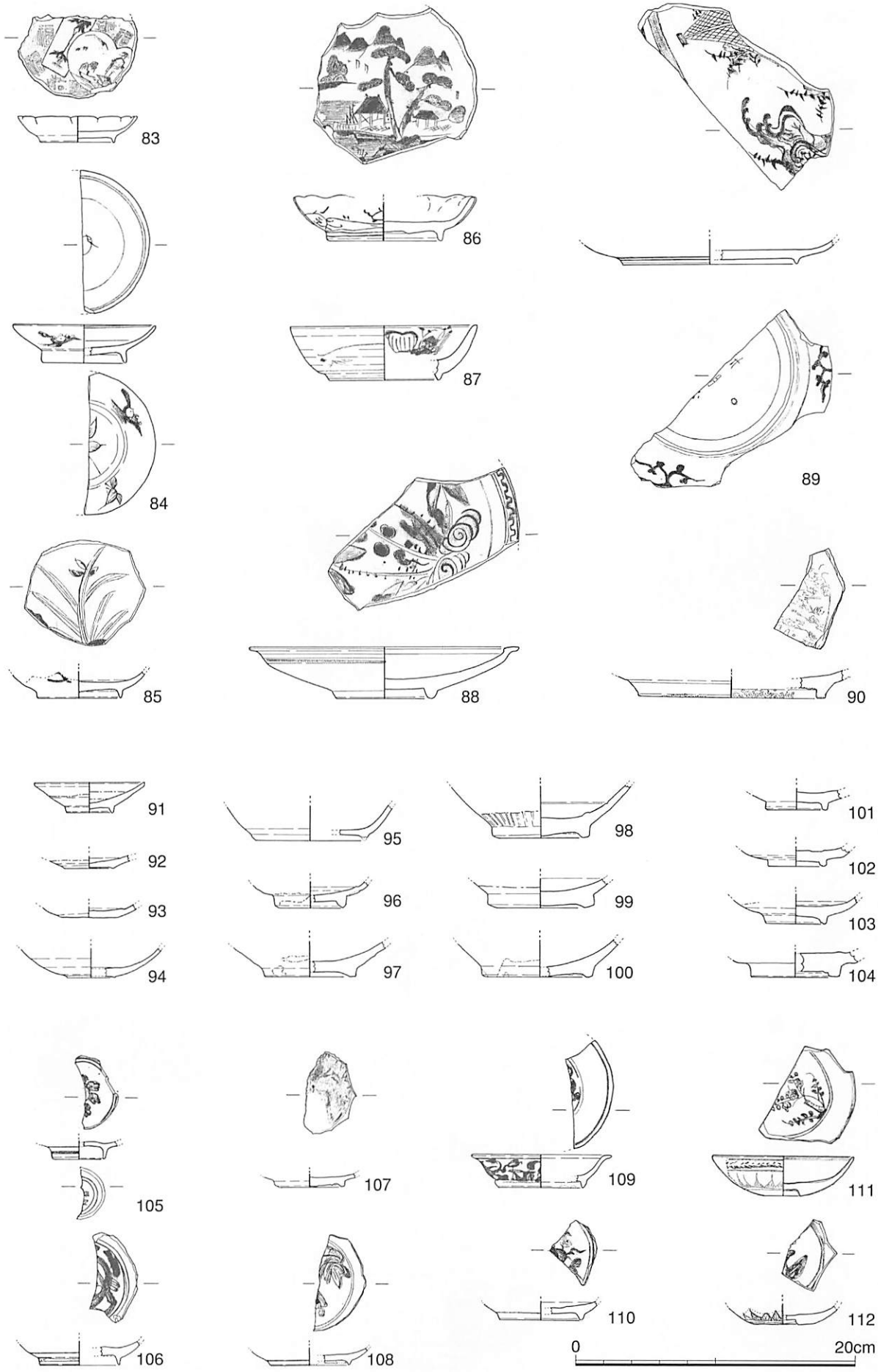


Fig.23　Ⅲ層（造成土）出土土器類③（1/4）

もしくは中程まで施釉する。肥前系白磁碗（56）は器壁が薄く高台は小振りである。磁器碗（57）は型打ちで口縁部外面上方に簡略化した木目文を陰刻、下方には菊花とその葉の陽刻、また唐草文を陰刻する。内面は透明釉のみで白色、外面は瑠璃釉を施し影青状となる。産地は不明。白磁水滴（58）は隅丸直方体で、上面の型打ち文様のモチーフは不明である。上面と残存部の片側面のみ施釉する。また底部にはわずかに布目が確認できる。肥前系か。色絵磁器人形（59）はミニチュアの般若面で、中空の内部にはやや歪な形状の支棒が横断し、口の部分は透かしとなる。髪の毛は黒色釉、角・目・口の縁及び内面は赤絵、裏面の接地縁には銅緑釉で色付けする。肥前系か。肥前系染付蓋（60）は外面に山水文を描く。茶入れの蓋か。肥前系色絵染付蓋（61）は外面を区画文で二分し、それぞれに蛸唐草文、また花卉文を描く。染付蓋（62）は外面に波頭文を密に描く。産地は不明。肥前系染付小杯（63）は口縁部内面上方に編目のような文様帯を描き、下方および外面の文様は特定できない。被熱したとみられる。肥前系染付小杯（64）は外面に蓮弁と捻文、内面に起毛圏線と捻文を描く。肥前系染付小杯（65）は器壁が薄い。内面の文様は山水文か。肥前系色絵磁器小杯（66）は器壁が非常に薄く、いわゆる卵殻手である。高台は高く、内面には不明瞭であるが赤絵、金彩、銅緑釉により折枝と花文を描く。折枝桜文か。肥前系色絵付碗（67）は蛇の目高台でその周辺に赤絵付けを施す。畳付けは無釉である。肥前系染付碗（68）は外面に楓と松葉文を描く。内面上方には重ね焼きによる筋状の胎土溶着がみられる。また見込みには文様を描いたとみられるが自然釉の堆積により不明瞭である。肥前系染付碗（69）はコンニャク印判で口縁部外面に桐文を捺す。肥前系染付碗（70）は口縁部外面に菊水文、口縁部内面上方に渦文帯もしくは木目文帯を、見込みには圏線内に波頭文を描く。肥前系染付碗（71）は口縁部外面に松をモチーフとした連続文を、口縁部内面上方には四方襷に蓮華文を描く。肥前系染付碗（72）は口縁部外面に花卉文を描き、コンニャク印判で菊花文を捺す。肥前系染付碗（73）は口縁部外面に山水文を描く。見込みの文様は簡略化した千鳥文か。肥前系染付くらわんか碗（74）は口縁部外面に網目文を、高台内側には文字もしくは記号を描くが判読不可能である。肥前系染付くらわんか碗（75）は口縁部外面に丸文を、高台内側に落款風記号を描く。見込みのコンニャク印判の模様は特定できない。肥前系染付碗（76）は見込みに水面と鷺文を、また特徴的な例として外面は高台を挟んで一連の稲束文を描く。肥前系染付碗（77）は見込みに圏線と岩文を描く。外面と高台内側は山水文と水文か。肥前系染付大碗（78）は窯割れが生じ口縁部は大きく破断する。口縁部外面には山水文を、3か所の目跡が残る見込みには水面に波頭文を描く。肥前系染付広東碗（79）は見込みに圏線と寿文を描く。破片のため外面の文様は特定できない。肥前系色絵染付鉢（80）は口縁部端部内面が無釉のため蓋物とみられる。体部外面は区画文の内側に銅緑釉などで山水文を、区画外には赤絵、金彩を加え牡丹唐草文を鮮やかで丁寧に上絵付けする。また高台の周囲には鋸歯文を巡らす。肥前系染付瓶（81）は外面に蛸唐草文を描く。肥前系染付瓶（82）は被熱し釉薬は融解する。皿（83～89）はいずれも肥前系染付である。輪花皿（83）は内面に白抜きで福文と寿文、二つの区画を描き、区画間にはそれぞれ竹文、山水文をあらわす。皿（84）は見込みに圏線と鷺文を、外面は高台を挟んで一連の草文を描く。皿(85)は見込みに菖蒲文を描く。外面の模様は唐草文か。輪花皿(86)は蛇の目釉ハギ高台で、高台内側は中心のみ施釉する。見込には山水文を、外面には唐草文を描く。くらわんか皿（87）は口縁部内面に草花文を、外面には唐草文を描く。畳付けには離れ砂が溶着する。皿（88）は口縁部先端をほぼ水平に折り曲げ、そこに櫛歯文を巡らせる。見込には渦に草花文を描く。

皿（89）は見込みに波頭と網干文、口縁部外面には唐草文を描き、目跡の残る高台内側には「大明」の銘款が残る。色絵皿（90）は畳付けと無釉の内側に多くの離れ砂が溶着し、見込みの文様は不明瞭であるが草花文とみられる。金彩と推測できる。産地は不明。輸入磁器（91～104）はいずれも中国産である。白磁小皿（91）は口縁部外面下方無釉で、見込みは蛇の目釉ハギである。白磁皿（92～94）は見込みに段をもち、平底の底部およびその周辺は無釉である。白磁皿（95）は窯割れにより高台先端部が破損する。また釉薬は被熱し融解する。白磁碗（96）は見込みに段をもち、そこから口縁部はやや角度をもって立ち上がる。ケズリ出し高台とその周辺は無釉である。白磁碗（97～100）はいずれも器壁が厚く、ケズリ出し高台とその周辺は無釉である。なかでも（98・99）は見込みに段をもち、また（98）には高台周辺に放射状のケズリ跡が残る。龍泉窯系青磁碗（101～103）はいずれにも淡いオリーブ色の釉薬を掛け、見込みは蛇の目釉ハギ、ケズリ出し高台とその周辺は無釉である。龍泉窯系青磁碗（104）は緑灰色の釉薬を掛け、ケズリ出し高台内側は無釉である。見込に段をもつ。（105・106・108～112）は青花である。饅頭心碗（105）は器壁が薄く見込みに花弁文を描き、高台内側には「福」、「同」の文字が確認できる。景徳鎮窯系。饅頭心碗（106）の見込み文様は不明である。景徳鎮窯系。皿（107）は荒いケズリ出し高台の内側は無釉である。見込みは釉薬を掻き取り平滑となり炭素が吸着する。二次転用品の可能性が考えられる。東南アジア産か。皿（108）は見込みに圏線と草文を描く。畳付けには離れ砂が溶着する。皿（109）は口縁部外面の草花文は不明瞭で花の種類は特定できない。また破片のため見込み文様も不明である。皿（110）は見込みに圏線と草花文を描く。碁笥底皿（111・112）は口縁部中程に芭蕉文を描き、畳み付け周辺は無釉である。漳州窯系か。また（111）は口縁部外面上方に波頭文帯を描く。見込みの文様は折枝梅文か。

(2) 第1期面検出遺構出土土器

第1面検出の遺構出土遺物の多くは石組側溝（SDH01）からの出土である。その他の出土土器は少量であるが、各遺構の下限年代を知る上での指標となるものを挙げる。

①石組側溝（SDH01）出土土器

土師器、肥前系磁器、唐津系、京・信楽系、その他施釉陶器、土師質土器など幅広い時期の多様な土器が多量に出土した。ここではもっとも量、時期的にまとまりが良く、更に遺構の機能した期間および廃絶時期も示すとみられる江戸後期から幕末以降の遺物をあげる。塩壺蓋（113）は胎土に石英・長石を多く含み、全体に薄く煤が吸着する。磨滅により調整不明瞭である。土師器坏（114）はロクロ成形で浅黄燈色を呈す。表面は磨滅により調整不明瞭、底部に回転糸切り跡が残る。底部径約7.7㎝と大きく、大型の坏と推定できる。青磁碗（115）は口径7.2㎝と小型で、厚く釉薬が掛かるが焼成不良のためくすんだ明緑灰色を呈す。産地は不明。肥前系染付碗（116）は外面に「都」の一文字が確認できる。肥前系染付碗（117）は外面に梅文を描く。呉須はコバルトの発色鮮やかである。肥前系筒型碗（118）は外面に草花文を描き、呉須はコバルトの発色鮮やかである。口縁部先端内面は釉ハギのため蓋物と推定できる。肥前系ミニチュア白磁皿（119）は内面施釉、外面無釉である。肥前系白磁紅皿（120）は外面に型打ちで菊花をあらわし、口縁部先端には平坦な面をもつ。肥前系青磁碗（121）は厚くかかった釉薬表面に貫入がみられる。肥前系染付皿（122）は体部外面に「■内三風晩」の五文字が確認できる。肥前系色絵付碗（123）は赤絵で体部外面に亀文、高台内側に「福」を

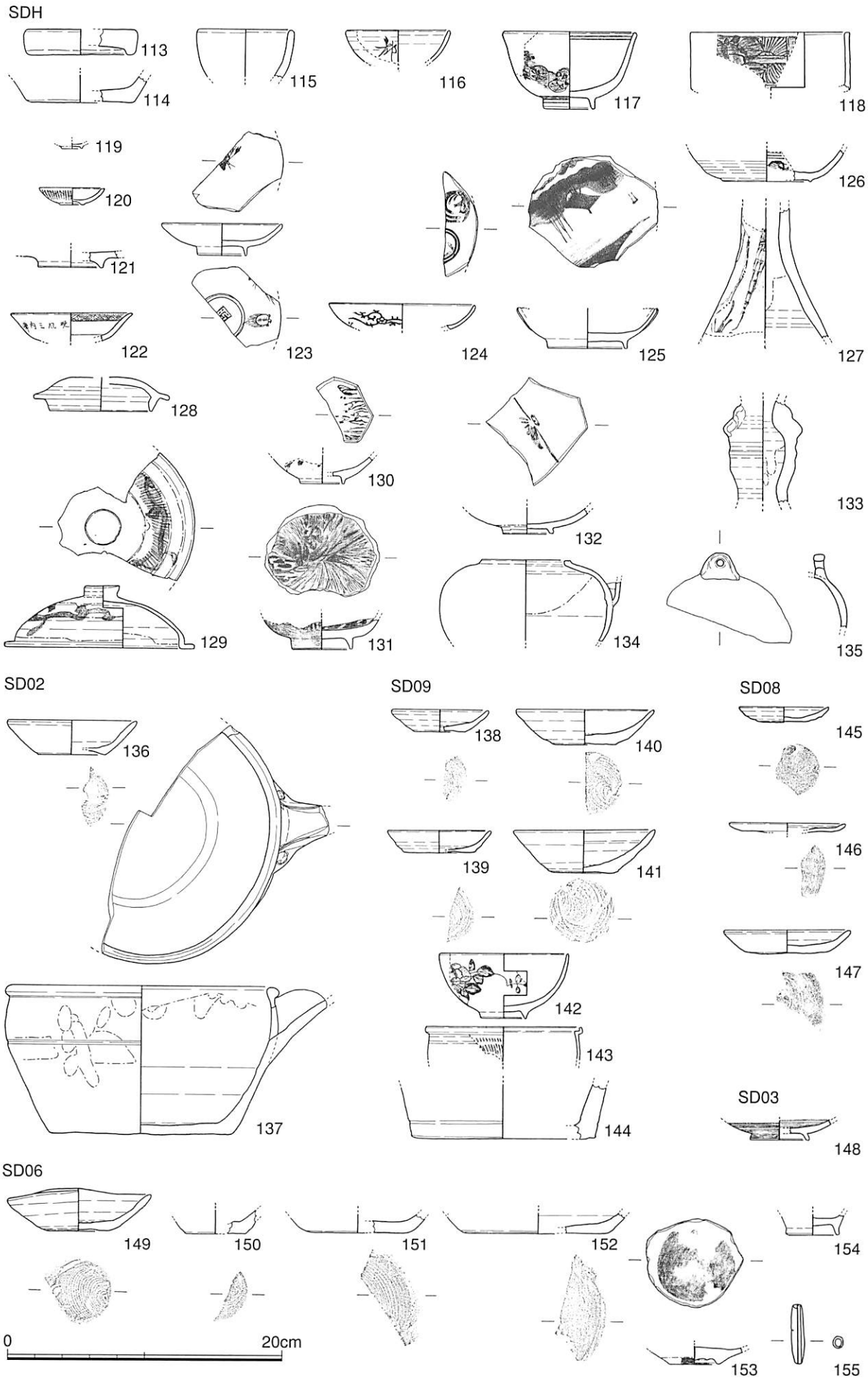


Fig.24　第１期面検出遺構出土土器類（江戸時代中期～後期）（１/４）

描く。一部に金彩も確認できる。肥前系染付皿（124）は外面に花唐草文様を、内面には円形に表した鳳凰を２体以上配す。薄手で丁寧な作りである。肥前系染付輪花皿（125）は花弁の幅が狭く、見込みに山水文を描く。肥前系染付皿（126）は見込みと高台内側が無釉である。小片のため文様は特定できない。肥前系染付瓶（127）の外面のモチーフは柳であろうか。唐津系施釉陶器蓋（128）は外面のみ施釉する。つまみを欠くが、貼り付け跡は残る。施釉陶器鍋蓋（129）は円盤状のつまみをもち、内面は藁灰釉、外面は銹釉と掛け分ける。体部外面の中程には帯状に飛び鉋をかけ、その上から墨書を施す。墨書の表現は不明である。京・信楽系か。現川産施釉陶器（130）の胎土は硬質で灰色を呈し、畳付けに離れ砂が溶着する。現川産施釉陶器（131）の胎土はにぶい橙色を呈し、高台先端部は故意に打ち欠いた可能性が考えられる。京・信楽系施釉陶器碗（132）は見込みに銹絵を施し、高台とその周辺は無釉である。唐津系施釉陶器瓶（133）は鉄釉を掛け、頸部に耳をもつ。京都産施釉陶器急須（134・135）は鉄釉を掛ける。接合は不可能であったが同一個体とみられる。

②２号溝（SD02）出土土器

土師器、色絵磁器、施釉陶器などが少量出土したが、多くは小片のため実測可能なものはわずかである。土師器坏（136）はロクロ成形で底部に回転糸切り跡が残る。中央付近の器壁は約１㎜と非常に薄く、歪む。また胎土は硬質、灰色で一部赤色化するが、これは二次焼成によるものとみられる。唐津系施釉陶器片口鉢（137）の玉縁口縁部は無釉で、施釉時に掴んだ指跡が明瞭に残る。注口の両脇には薄く丸い小さな目のような装飾を施す。

③９号溝（SD09）出土土器

土師器、施釉陶器、肥前系染付などが少量出土した。土師器坏（138～141）はロクロ成形で底部に回転糸切り跡が残る。いずれも浅黄燈色を呈し、表面は起伏なく丁寧に成形する。小型坏(138・139)は、短い口縁部がやや丸みをもって立ち上がり先端はそのままおさめる。器高は浅く皿に近い形状である。坏（140・141）の内面中心から口縁部先端にかけやや丸みをもって緩やかに立ち上がりそのままおさめる。底部と口縁部の一部に煤が吸着する。肥前系染付碗（142）は体部外面に牡丹文を描く。施釉陶器鍋（143）は外面に掛けた鉄釉が、内面にも流れ込む。また外面には飛び鉋をかける。焼締め陶器鉢（144）の胎土は二種類の混合土で、とりわけ内外底部に自然釉が厚く掛かる。産地は不明。これらの土器は器種構成から江戸中期から後期の年代があたえられる。

④８号溝（SD08）出土土器

土師器、肥前系磁器、京焼き、施釉陶器などが少量出土した。土師器坏（145・147）はロクロ成形で底部に回転糸切り跡が残り、いずれも浅黄燈色を呈す。口縁部は短く器高も浅く、形状は皿に近い。土師器皿（146）の胎土にはキラコが混じり、灰白色を呈す。口縁部は非常に短く形状はいわゆるコースター型で底部に糸切り跡が残る。実測できなかったほかの小片土器の器種構成から判断し、これらは江戸時代後期以降のものと推定できる。

⑤３号溝（SD03）出土土器

出土した土器は少量の混入品を除くと１片のみである。現川産施釉陶器碗（148）の胎土は精良硬質で、器壁も薄く丁寧な作りである。この土器には江戸時代後期の年代があたえられる。

⑥６号溝（SD06）出土土器

土師器、肥前系磁器、施釉陶器、土師質土器、土製品などが少量出土した。土師器坏（149～152）

はロクロ成形で底部に回転糸切り跡が残り、いずれも浅黄燈色を呈す。坏（149）は内面中心から口縁部先端にかけやや丸みをもって緩やかに立ち上がりそのままおさめる。表面は起伏なく丁寧に成形する。坏（150）は底部内外面が焼成不良のため黒ずむ。大型の杯（151・152）は底部が広く比較的丁寧に成形する。青花碁笥底皿（153）は、焼成不良のため釉薬の発色はにぶい。見込みは釉薬を掻き取り平滑とし、高台の一部と共に炭素が吸着する。また口縁部は故意に打ち欠き、破断面にも炭素が吸着する。このことから硯のような用途で転用された可能性が考えられる。土器自体は16世紀後半のものであるが、特筆すべきものとして報告する。漳州窯系か。肥前系染付瓶（154）は内面無釉で畳付けには離れ砂が溶着する。土錘（155）の胎土は精良で橙色を呈し、外面中程に一条の窪みが確認できる。磨滅により表面の調整は不明瞭である。実測できなかったほかの小片土器の器種構成も含め、転用品（153）を除いたこれらの土器には江戸時代後期の年代があたえられる。

⑦ピット（SP）138出土土器

土器の出土はわずかで実測可能なものは１点のみである。肥前系赤絵付け碗（156）は器壁が薄く口縁部先端には縁錆を施す。小片のため口縁部外面の文様は特定できない。

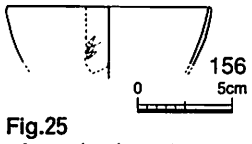


Fig.25
ピット(SP)138出土
肥前系色絵付（1/4）

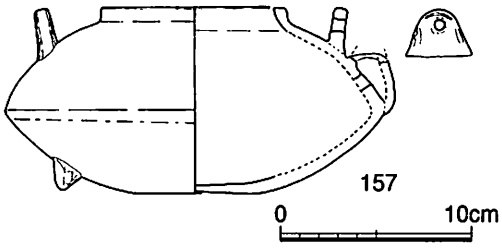


Fig.26　胞衣壺遺構　唐津系施釉陶器土瓶（1/4）

⑧胞衣壺遺構

唐津系施釉陶器土瓶（157）はにぶい橙色の胎土に褐色釉を掛ける。側面に注口、そのつけ根と対面に把手、体部の下方３か所に脚をもつ。また無釉の体部下方には煮沸痕が確認できる。江戸時代後期のものである。

(3) 第２期面遺構出土土器

第２面検出遺構は少なく、したがって出土遺物量も多くない。それぞれ古代から中世の遺物は少量混入するが、とりわけ輸入磁器は普遍的なものとして目立つ。ここでは特に土器がまとまって出土した５号溝（SD05）、５号溝土師器溜まり、３号不明遺構（SX03）、Ⅴ層を挙げる。

①３号不明遺構（SX03）

土師器、瓦質土器、青花、施釉陶器などが少量出土した。土師器坏（158～161）はロクロ成形で底部に回転糸切り跡が残り、いずれも浅黄燈色を呈す。小型坏（158）は器壁が厚く、やや平坦な底部内面から短い口縁部が立ち上がる。小型坏（159）は口縁部先端に一か所の窪みとその直下の底部端部の一か所に面をもつ。これは口縁部に燈明芯を掛ける窪みを設けるためか、または底部の回転糸切りによる粘土はみ出しの整形のためかどちらかは不明であるが、いずれにせよ口縁部と底部端部をつまむように力を加えたことによると推定できる。小型坏（160）は（159）同様に口縁部先端に窪みを、底部端部の一か所に面をもつ。口縁部先端はやや肥厚しその周辺には煤が吸着する。坏（161）は胎土に赤色粒を多く含む。瓦質土器火鉢（162）は、貼り付けの脚部で体部から剥がれたものである。外面には花文スタンプを３か所に捺す。青花皿（163）は胎土が浅黄燈から鈍い橙色を呈す。青花皿（164）は見込みの釉薬を掻き取る。瀬戸・美濃系施釉陶器天目茶碗（165）は内外面の一部に漆が付

着する。軟質施釉陶器碗（166）は白化粧の上から緑釉を掛ける。外面は指オサエにより起伏を表現する。瀬戸・美濃系織部碗か。施釉陶器建水（167）はとりわけ内面に灰釉が厚く掛かり、口縁部先端４か所以上に貝目跡が残る。体部内面の数か所には成形時についたとみられる爪痕が残る。朝鮮半島産か。これらの土器は器種構成から中世末から近世初頭の年代が与えられる。

②Ｖ層

Ｖ層は第１期面検出遺構が掘り込まれた堆積層である。５号溝（SD05）や３号不明遺構（SX03）などの第２期面検出遺構の遺構充填土とは異なる。そのため、これら遺構が埋没した後に造成されたものと判断している。ここでは便宜上、第２期検出遺構とあわせて報告する。

土師器、唐津系施釉陶器、青花、土師質土器、瓦質土器、土製品などが少量出土した。土師器坏（168～173）はロクロ成形で底部に回転糸切り跡が残る。小型坏（168）はにぶい橙色を呈し、底部は高台状に高く体部にはロクロ水挽き跡の起伏が明瞭に残る。小型坏（169）は浅黄燈色を呈し、短い口縁部が丸みをもって立ち上がる。坏（170）は全体が赤色化し硬質に焼き締まる。また、とりわけ内面は施釉状を呈す。坩堝（トリベ）に転用したためと考えたが、破断面を含む所々に焼土が付着することから二次焼成によるものであろう。坏（171）は褐灰色を呈し、胎土に含まれたスサや籾殻の焼け

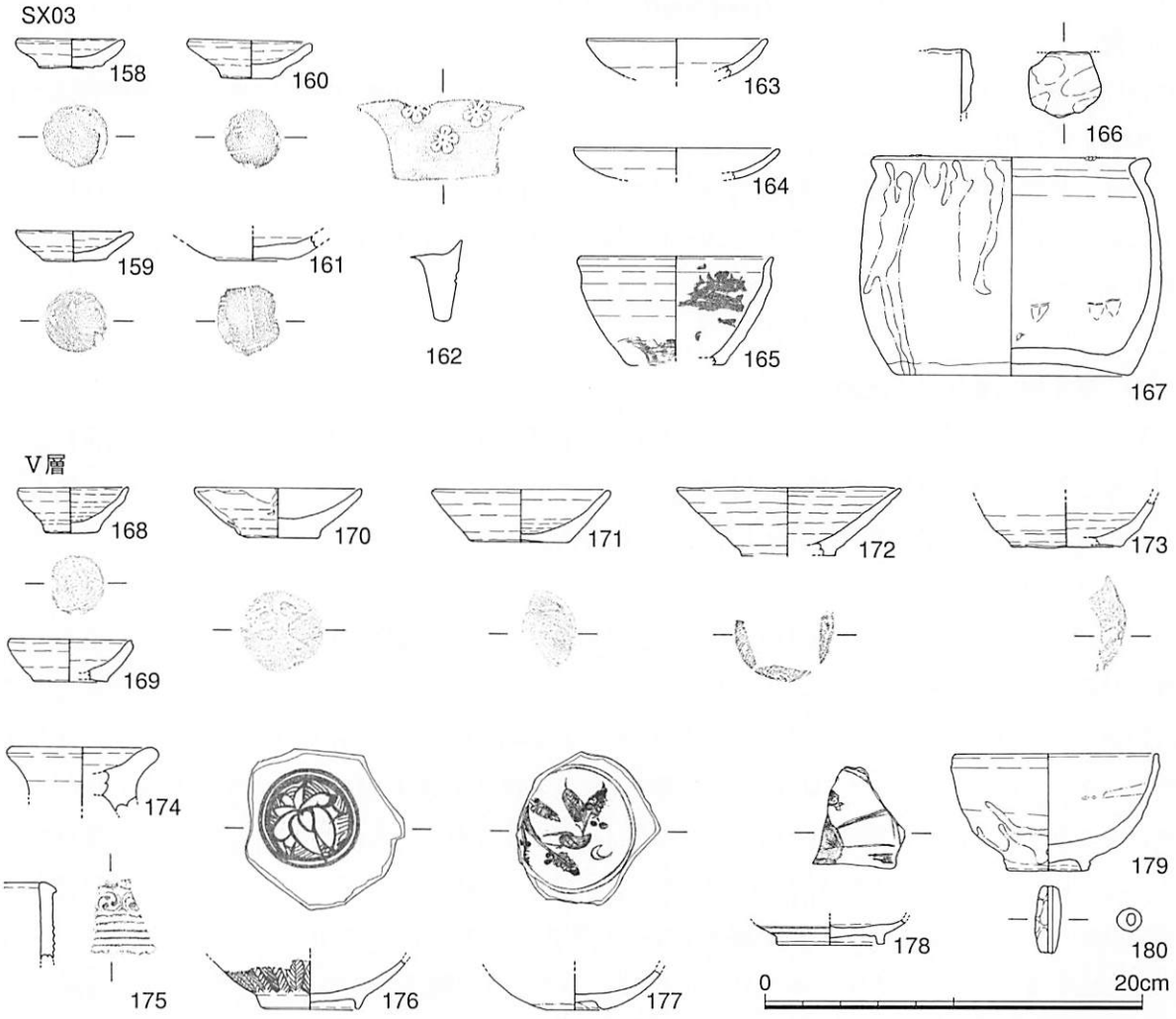


Fig.27　３号不明遺構（SX03）およびＶ層出土土器類（中世末～江戸時代初頭）（１/４）

跡が所々に窪みとして残る。坏（172）はにぶい橙色を呈し、口縁部が直線的に立ち上がり先端はそのままおさめる。坏（173）はにぶい橙色を呈し、口縁部は丸みをもって立ち上がる。土師質土器瓦灯（174）の外表面は丁寧にヨコナデを施し、裏側は未調整である。瓦質土器（175）は丁寧な作りで、外面に連続する三つ巴文と５条の突帯を型押しする。器壁に湾曲がなく平坦なことから方形の器と推定できるが、器形は不明である。青花蓮子碗（176）は体部外面に芭蕉文を巡らし、見込には二重圏線と蓮文を描く。景徳鎮窯系。青花碁笥底皿（177）はわずかに煤が吸着し、底部外面中心部の窪みに釉薬を掛ける。釉薬の発色はにぶく、見込みに二重圏線内に草花文を描く。漳州窯系か。青花皿(178)は小片のため見込みの文様は特定できない。唐津系施釉陶器碗（179）はやや粗雑に灰釉を掛け、外面下半は無釉である。土錘（180）はにぶい橙色を呈し、表面には指オサエ跡が残る。これらの土器は器種構成から中世末から江戸時代初頭の年代が与えられる。

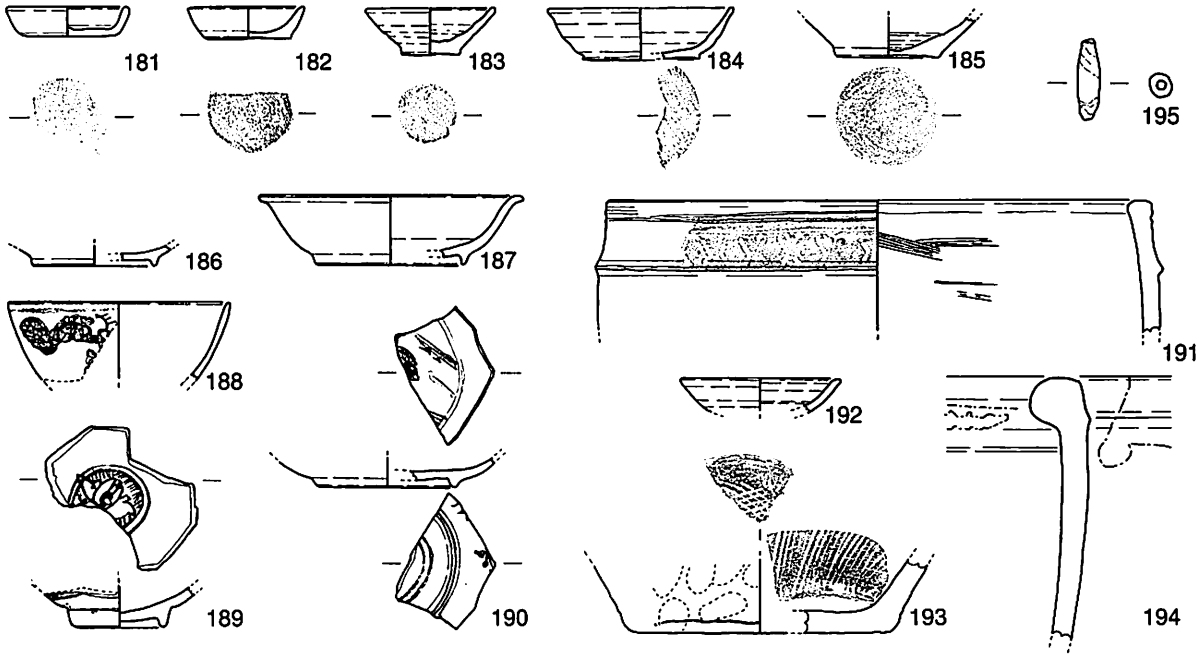
③５号溝（SD05）

土師器、輸入陶磁器、施釉陶器、焼締め陶器、瓦質土器、東播系須恵器などの土器が少量出土した。土師器（181～185）はいずれもロクロ成形である。皿（181）は平坦な底部から短い口縁部が直線的に立ち上がり先端はやや肥厚する。胎土に赤色粒を多く含み浅黄燈色を呈す。磨滅により調整は不明瞭で、底部外面の所々に擦痕が確認できる。今回の調査においては特殊な器形の一つと言える。小型坏（182）は底部に回転糸切り跡が残り、内面はやや平坦な底部から緩やかに短い口縁部が立ち上がりそのままおさめる。焼成良好で橙色を呈す。器高は浅く皿に近い形状である。小型坏（183）は胎土に赤色粒を多く含みにぶい橙色を呈す。底部外面には回転糸切り跡が残る。灯明皿として使用したため一部赤色化し、口縁部先端の一か所に煤が付着する。大型坏（184）は焼成良好で橙色を呈す。口縁部はわずかに外反し先端は肥厚する。また底部外面には静止糸切り跡が明瞭に残るが、今回の調査においては数少ない例である。大型坏（185）の表面は磨滅し、底部には回転糸切り跡が残る。胎土に赤色粒を多く含み、にぶい黄燈色を呈す。中国産白磁皿（186）は釉薬の発色がにぶく、畳付け部を釉ハギする。中国産白磁皿（187）は釉薬の発色がにぶい。口縁部は外反し、畳付けには離れ砂が溶着する。青花碗(188)の文様のモチーフは樹木と推測できるが判然としない。青花蓮子碗(189)は見込みに二重圏線と蓮文を描く。破片のため体部外面の文様は特定できない。景徳鎮窯系。青花皿（190）は小片のため文様は特定できない。瓦質土器火鉢（191）は外面浅黄燈色、内面灰色を呈す。磨滅により不明瞭であるが外面上部に連続する重複襷文を型押しする。内面にはハケ調整を施す。朝鮮半島産施釉陶器小型皿（192）はわずかに青みがかる灰色の胎土に長石釉を掛ける。丹波産焼締め陶器擂り鉢（193）は灰色を呈し、体部外面には指オサエ跡が残る。擦り目は使用により磨滅する。施釉陶器鉢（194）は全体に銹釉を、内折れ口縁とその付近以外は更にオリーブ色の灰釉を厚く掛ける。また口縁部先端には長方形の胎土目跡が残る。産地は不明。土錘（195）は二次焼成により明褐灰色を呈す。薄く伸ばした粘土を芯に巻き付けて葉巻状に成形した過程が良く観察できる。これらの土器は器種構成から中世末から近世初頭の年代が与えられる。

④５号溝（SD05）土師器溜まり

多くの土師器坏が一か所に集中して出土した。これらは小型、大型の２形式に分類でき、そのほかの器種・器形の遺物は混ざらない。いずれもロクロ成形で底部外面には回転糸切り跡が残る。比較的多くの赤色粒を含む胎土はにぶい黄燈色、もしくはにぶい橙色を呈す。これらは出土状況や器種構成、

SD05



SD05　土師器溜まり

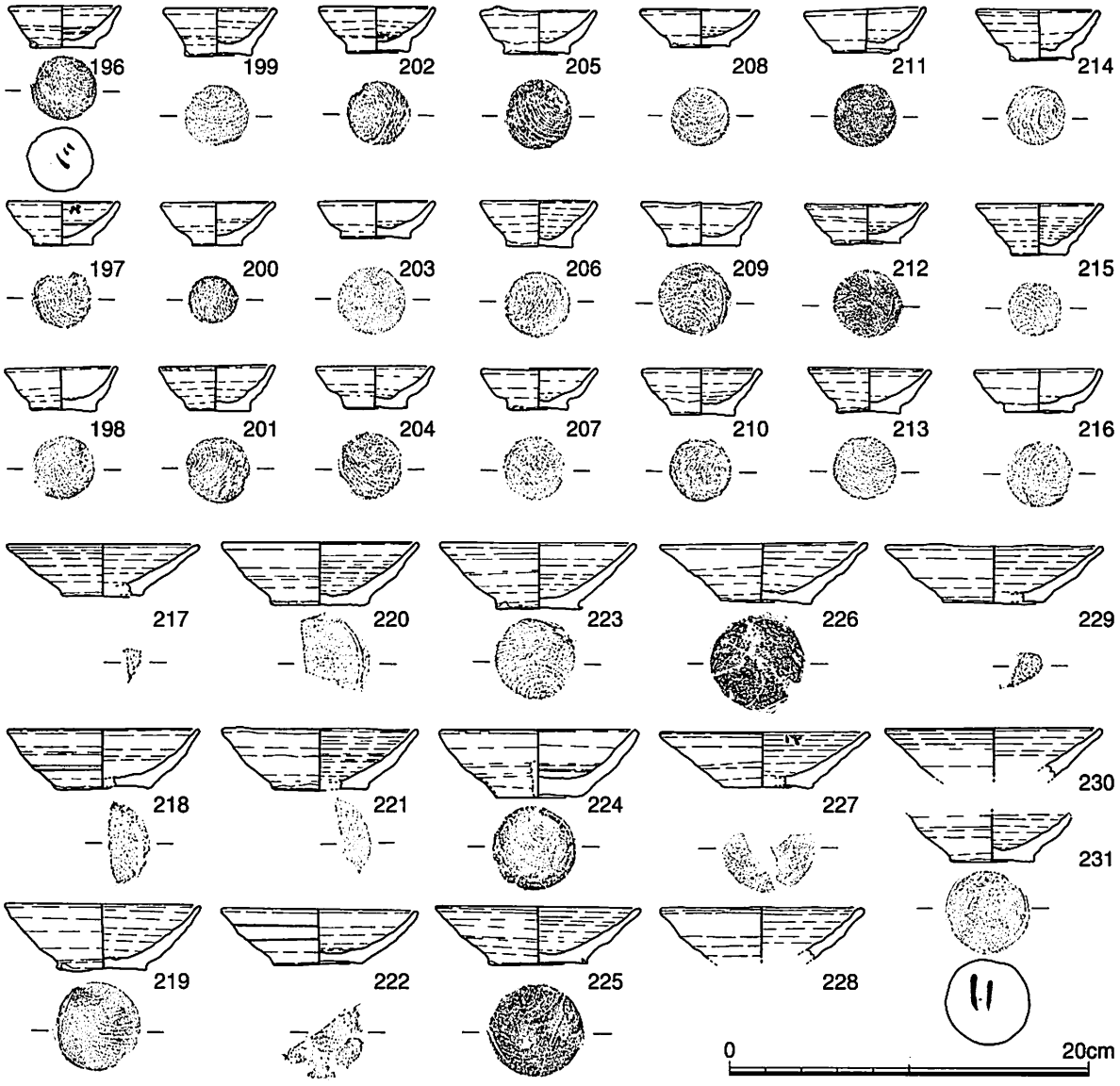


Fig.28　5号溝（SD05）・5号溝（SD05）土師器溜まり出土土器（1/4）

また燈明皿としての使用痕が認められないことなどから一括廃棄されたと推測でき、非常に良好な資料であるといえる。出土総重量は1544.2ｇで、そのうち小型（685ｇ）、大型（781.8ｇ）、不明およびその他（77.4ｇ）で、小型、大型の比率は0.88：１となる。以下、細片を除くほぼすべてを挙げる。なお個別の詳細は観察表にゆだねる。小型(196～216)の法量は口径6.3cm～7.25cm、器高2.1cm～2.95cmで、底部は高台状に高く、体部にはロクロ水挽き跡の起伏が残る。底部内面の中心付近は一段窪み、口縁部はやや内湾して緩やかに立ち上がり先端はわずかに肥厚、丸くおさめる。また底部外面端部角の一か所が指オサエにより面をもつが、これは回転糸切り後の粘土はみ出しの整形によるとみられる。

タイプ	遺物番号		口径(cm)	器高(cm)		重量(ｇ)	備考
小型	196		6.3	2.35		32.4	墨書
	197		6.4	2.45		21.7	墨書
	198		6.4	2.55		33.5	
	199		6.45	2.65		31.3	
	200		6.5	2.45		23.9	
	201		6.5	2.65		32.53	
	202		6.6	2.65		32.1	
	203		6.7	2.1		28.63	
	204		6.7	2.45		29.5	
	205		6.7	2.7		42.7	
	206		6.7	2.6		32	
	207		6.7	2.4		33.2	
	208		6.75	2.1		33.3	
	209		6.75	2.45		33.93	
	210		6.8	2.7		38.6	
	211		6.9	2.8		33.7	
	212		6.95	2.3		34.7	
	213		6.95	2.6		39.21	
	214		6.95	2.9		39.4	
	215		7.15	2.95		24.4	
	216		7.25	2.5		34.3	
		平均	6.8	2.53	重量合計	685	
大型	217		10.9	2.9		16.2	
	218		10.9	3.4		27.8	
	219		11	3.9		87.54	
	220		11.1	3.55		27.2	
	221		11.1	3.4		25.5	
	222		11.1	3.35		49.3	
	223		11.15	3.7		82.2	
	224		11.35	3.8		126.3	
	225		11.7	3.4		84.2	
	226		11.7	3.6		87.82	
	227		11.85	3.1		50.6	墨書
	228		11.5			13.6	
	229		12.2	3.3		18.3	
	230		12.2			14.44	
	231					70.8	墨書
		平均	11.47	3.6	重量合計	781.8	
細片					重量合計	77.4	
					総重量	1544.2	

Tab. 9　5号溝（SD05）土師器溜まり出土土師器法量一覧表

大型（217～231）の法量は口径10.9cm～12.2cm、器高3.4cm～3.9cmで、体部にはロクロ水挽き跡の起伏が明瞭に残る。粗い回転糸切りにより底部外面とその周辺は糸の食い込んだ溝や胎土の乱れが目立つ。また回転糸切り後の粘土はみ出しの整形跡もみられる。口縁部は直線的に立ち上がり、先端はわずかに肥厚する。(231）は口縁部先端を打ち欠いたとみられ、元の口径は不明である。また（196・231）の底部外面と（197・227）の口縁部内面上方には墨書が確認できたため、赤外線カメラを用い観察を試みたが、いずれも磨滅により文字か記号かは判読不可能であった。これらは成形手法、法量などから小型、大型共に一定の規格の基に製作されたといえる。この一群は、出土層位的にSD05出土土器の年代を上下限としてみることができるため、中世末から近世初頭の年代が比定できる。

(4) その他の土器

遺構に伴わないが特筆すべき遺物として越州窯青磁（232・233）が挙げられる。碗（232）は精良で灰色の胎土にオリーブ黄色の釉薬を掛ける。畳み付けは無釉で複数の不定形な目跡がみられる。碗（233）の胎土は精良で灰色、釉薬は被熱し融解、灰白色を呈す。輪状高台及び見込みにはほぼ等間隔に複数の目跡がみられる。どちらも平安時代後期のものである。

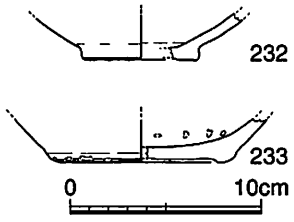


Fig.29
越州窯系青磁（1/4）

3．その他の遺物

(1) 瓦

調査区内からは多くの瓦類が出土したが、大部分は幕末以降の造成土中からである。そのなかでも瓦当文様や刻印が残るもの、特徴的なものを中心に、そして少量であるが遺構から出土したものを挙げる。

①Ⅲ層出土瓦

三つ巴文軒丸瓦（234）は周縁約2cmと幅広で巴は左巻、頭と尾は互いに接しない。珠文は大粒で間隔が広く数は少ない。磨滅で不明瞭であるが裏面にはナデ跡が確認できる。軒桟瓦（235）は小巴（軒丸部）を欠く。垂れ（軒平部）は菊花文の中心飾りに二転する均整唐草文で、瓦当表面にはキラコが付着する。押印瓦（236）は小片のため種類は不明であるが、湾曲はわずかであることから、平瓦もしくは塀瓦の類であると推測できる。長方形の印面は上方3分の1程度で線引きにより区切られ、上部には横書きで「□肥」、下部には縦書きで右から「佐賀郡今（会？）津」「□（水？）□製」と押印する。

②石組側溝（SDH01）出土瓦

軒桟瓦（237）の小巴と垂れは、桟瓦部に対しそれぞれの貼り付け角度は同じである。小巴は左巻きの連珠付き三つ巴文で頭と尾は互いに接せず、周縁の幅は約8mmと狭い。8個の珠文の間隔は広い。垂れは均整唐草文が確認できる。磨滅により調整は不明瞭、灰白色を呈す。軒桟瓦（238）は瓦当径8cm弱に対し周縁約1.5cmと幅広で、桟瓦部に対し垂れの貼り付け角度は垂直であるが、小巴の下顎は前方に張り出し瓦当面は傾斜する。小巴は左巻きの三つ巴文で、短い巴の頭と尾は互いに接しない。垂れには唐草文が確認できる。表面はナデを施す。またそれぞれの瓦当面にはわずかにキラコが付着

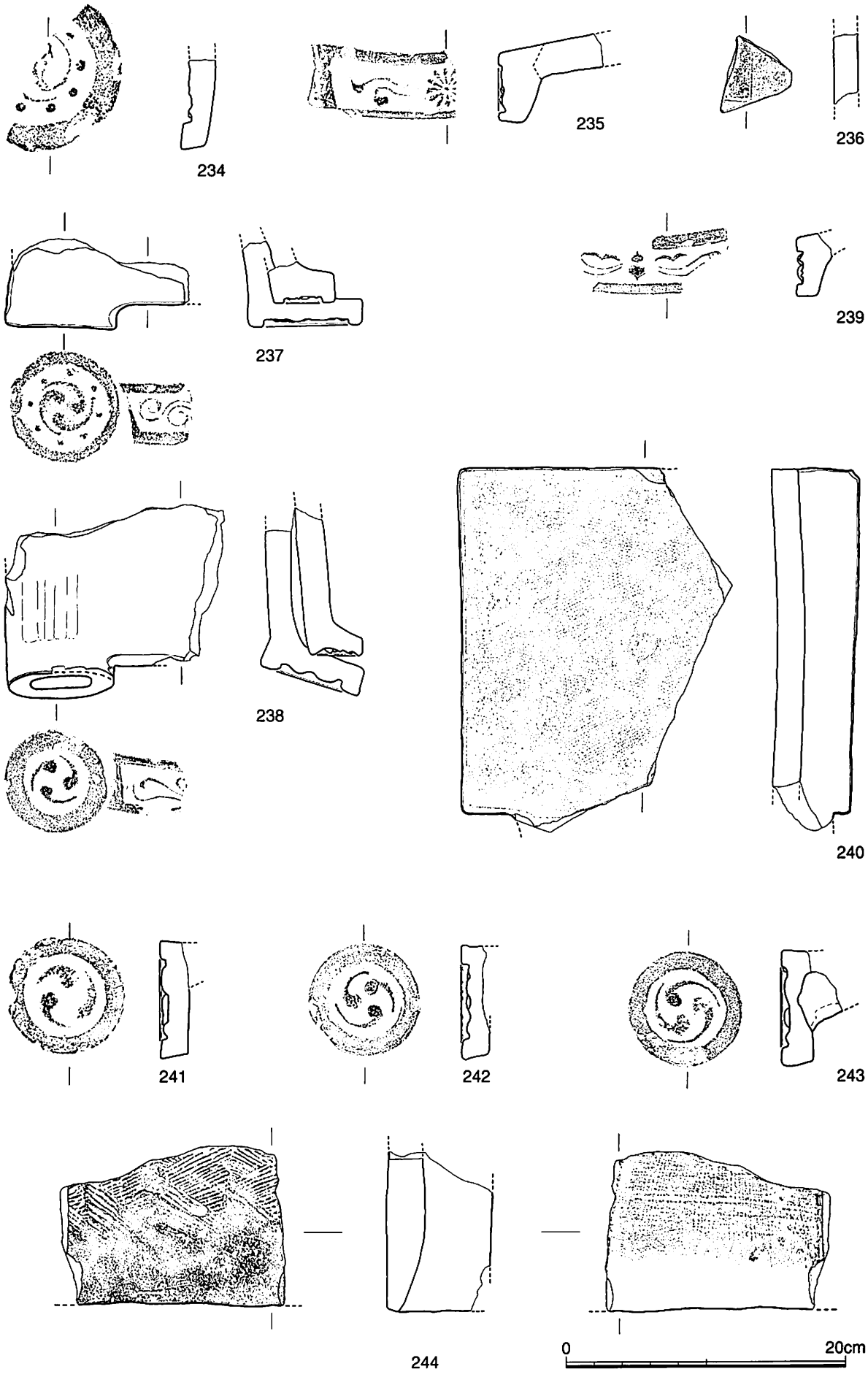


Fig.30　Ⅲ層・SDH01・SD04出土瓦（1/4）

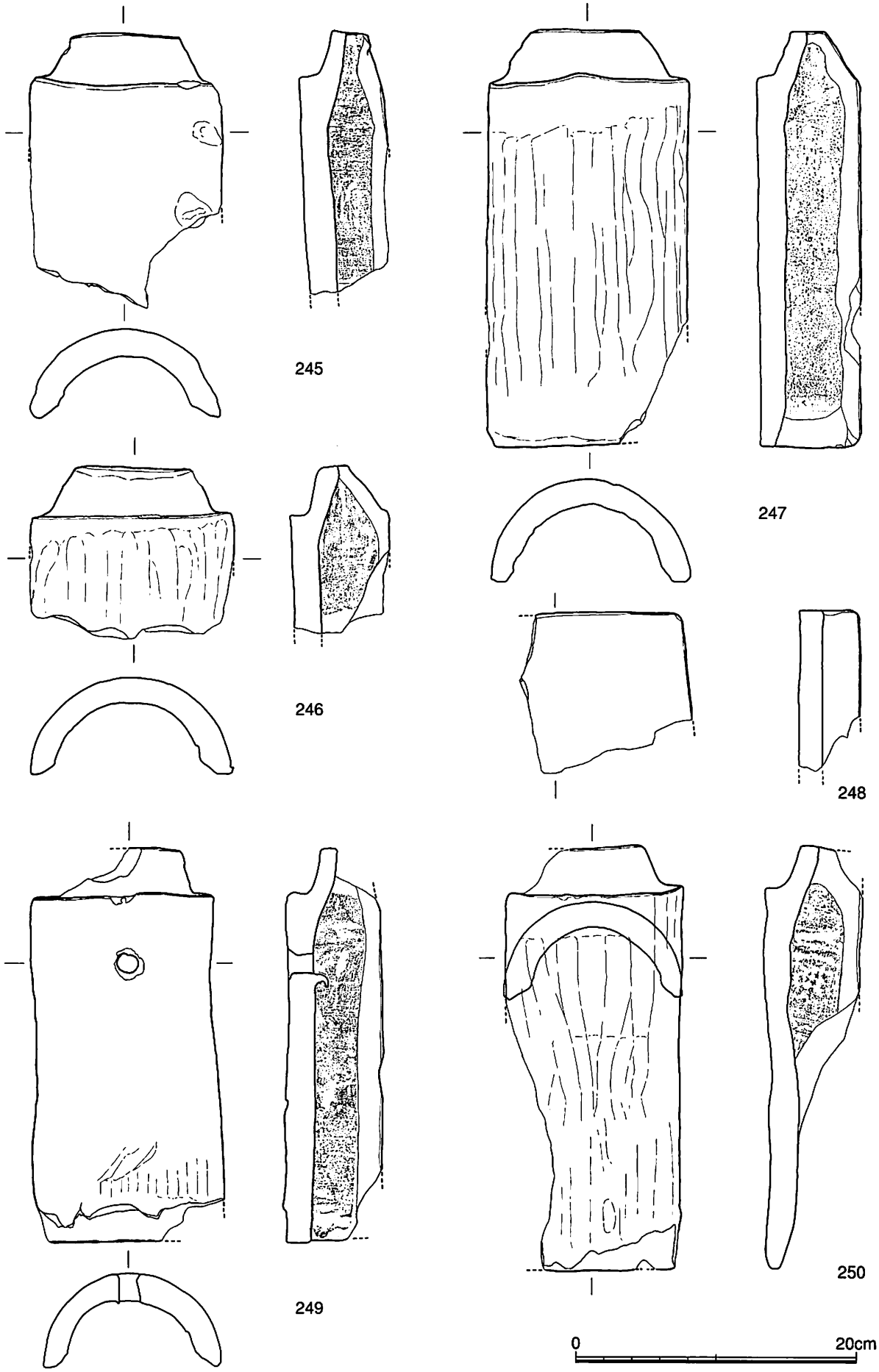


Fig.31　ピット（SP）138・第1期面包含層出土瓦（1/4）

する。軒平瓦（239）は中心飾りに均整唐草文が確認できる。中心飾りのモチーフは不明である。表面の炭素は落ち、白色化する。桟瓦（240）は凸面に20条の「V」字状折返し櫛目を重ねて二度施す。軒桟瓦（241）は小巴のみで、瓦当径約8.5cmに対し周縁約1.5cmと幅広、左巻きの三つ巴文は大きく肉厚で短く頭と尾は接しない。三つ巴のうち一か所の頭部を大きく欠くが、これは笵傷の可能性も考えられる。瓦当面及び裏面にもキラコが少量付着する。軒桟瓦（242・243）は小巴のみで、瓦当径8cmに対し周縁約1.5cmと幅広、右巻きの三つ巴文の頭と尾は接しない。いずれの瓦当面にも多量のキラコが付着する。また（243）は裏面未調整で中心部が強いオサエにより大きく窪む。平瓦（244）は桶巻き作りで、凹面には布目跡が鮮明に残る。凸面には叩き目が残り、狭端面から約5cmはナデで叩き目を消す。側面は分割線により下半から割りとられる。微砂粒を多く含む灰色と灰白色の混合土は硬質に焼締まる。朝鮮半島産の可能性が考えられる。

③ピット（SP）138出土瓦

丸瓦（245）は外面の一部に成形時の指オサエ跡が明瞭に残る。丸瓦（246）は外面にナデを施す。丸瓦（247）は外面に連続するタテナデ跡が明瞭に残る。いずれも直線のコビキ痕の上に布目跡が残る。平瓦（248）は狭端面にキラコが付着する。

④第1期面包含層出土瓦

穿孔丸瓦（249）は釘穴を穿つが、内面に胎土が大きくはみ出たまま未調整である。表面から裏面に向かって指もしくは棒状のものを差し込んだ過程が伺える。筒部端部から約2cm範囲の胎土は剥離する。窯割れによるものか使用に伴うものかは判然としない。丸瓦（250）は表面に成形時の指跡が鮮明に残る。両者とも内面には直線のコビキ痕の上に布目跡が残る。

(2) 諫早家関連遺物

肥前系磁器や瓦、また特殊なものとして陶質施釉瓦[註1)]など、諫早家および龍造寺家の家紋である「上り藤」があらわされるもの、もしくは関連すると推定できる遺物が少数であるが出土した。これらは器種の出現下限年代から竜造寺家ではなく諫早家に関連するものとみられるが、いずれも造成土および幕末以降の遺構からの出土であり詳細な製作年代の特定は難しい。

肥前系磁器（251～254）は器壁が薄く丁寧な作りである。輪花皿（251）は見込みに円形にあらわした藤花を、体部外面には唐草文を描く。皿（252）は見込みに円形にあらわした藤花と不明草花文を2か所以上に描く。体部外面には唐草文がわずかに確認できる。皿（253）は見込みに円形にあらわした藤花を描く。碗（254）はコンニャク印判で体部内面に円形にあらわした逆向きの藤花、いわゆる上り藤を捺す。軒桟瓦（255）は小巴（軒丸部）のみで、瓦当径約9cmに対し周縁約1.8cmと幅広、上り藤文は比較的精巧に表現する。表面にはナデを施し瓦当面には多くのキラコが付着する。なお今回の調査で出土した諫早家関連とみられる瓦の中で瓦質のものは1点のみである。陶質施釉軒桟瓦（256～260）の胎土は赤褐色で硬質に焼き締まる。表面は瓦当面から全体の3分の2程度、裏面は瓦当面から3分の1程度に暗褐色の鉄釉を掛けたとみられる。軒桟瓦（256）は小巴のみで、瓦当径7cm弱と小型、周縁は内区文様面に対し比較的高い。上り藤文はかなり簡略化している。軒桟瓦(257)は垂れ（軒平部）のみで上端部角を面取りする。簡略化した上り藤の中心飾りに均整唐草文を配す。また軒桟瓦（257～260）いずれにも垂れ文様の中心飾の左隣と2つ右隣の唐草文子葉にそれぞれ笵傷

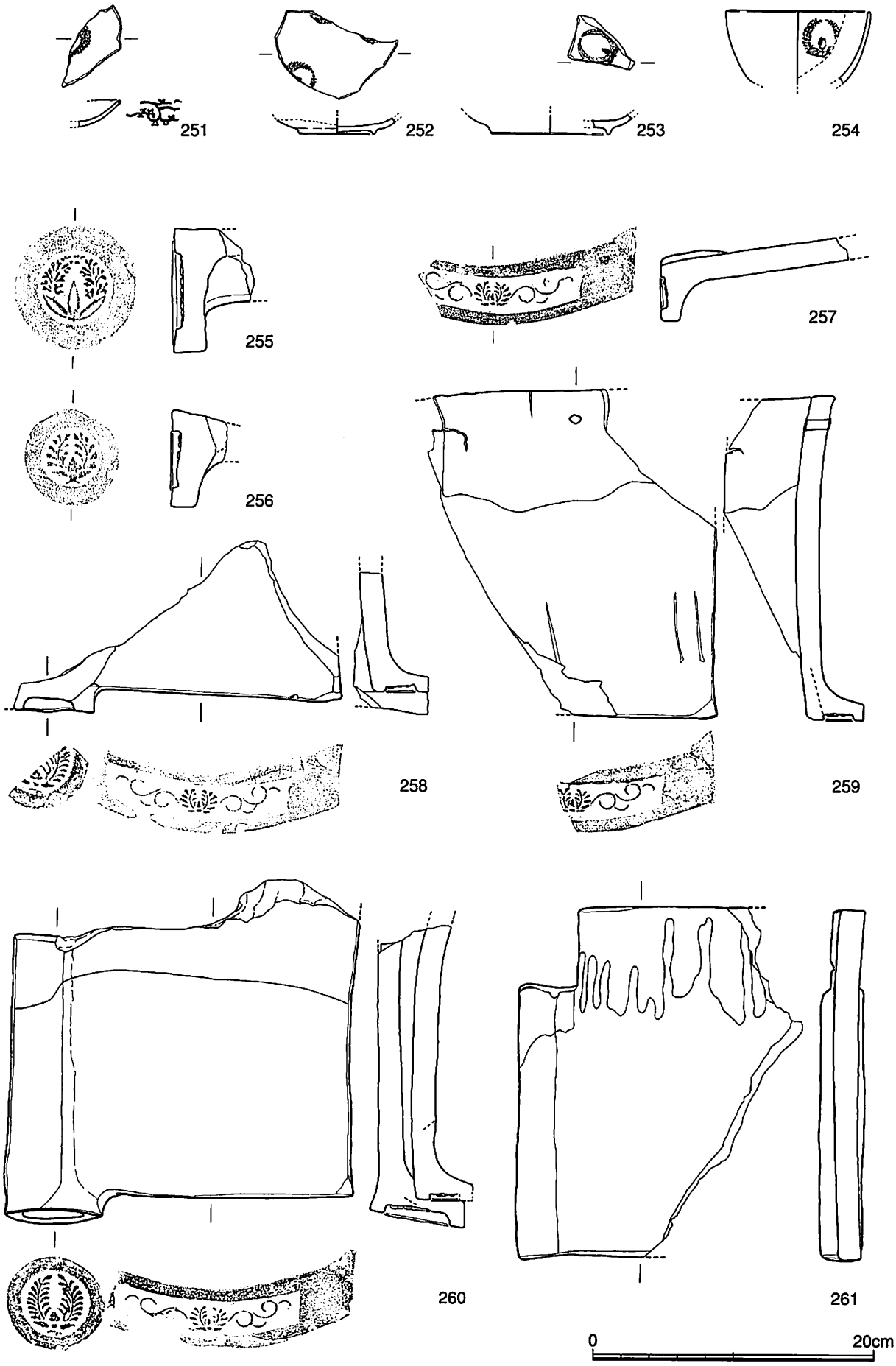


Fig.32　諫早家関連遺物（1/4）

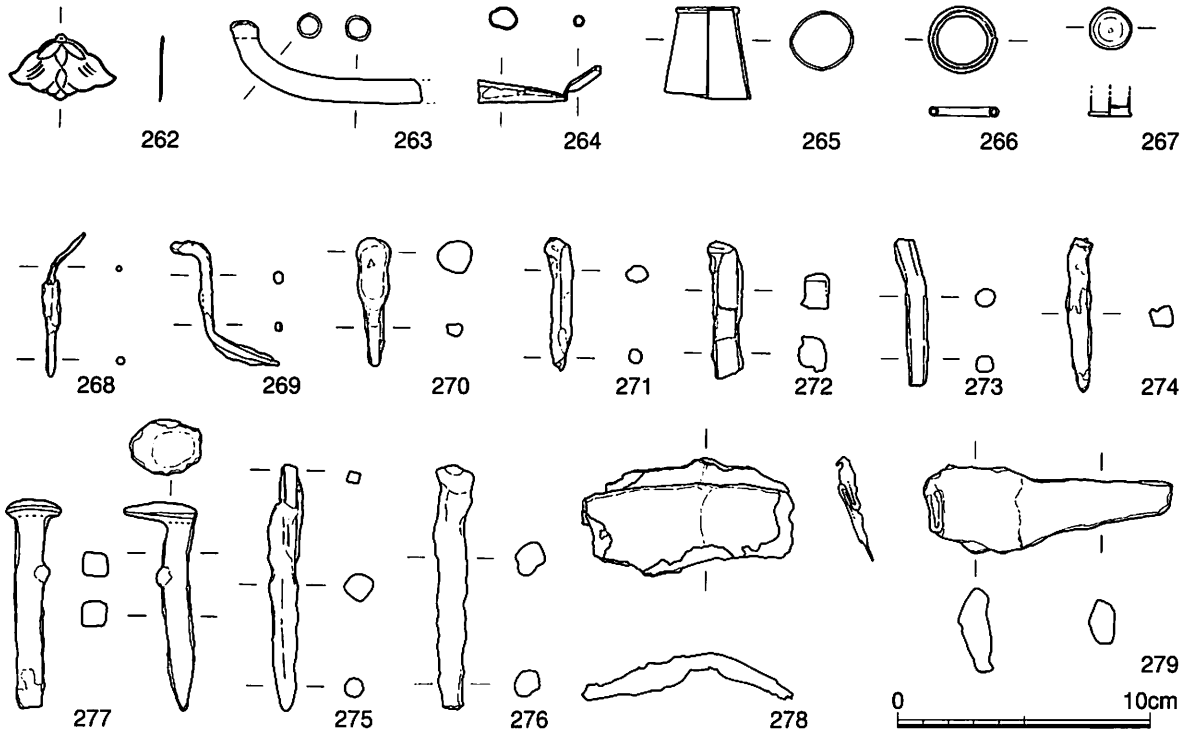


Fig.33　金属製品（1/3）

が確認できることから、すべて同范の可能性が考えられる。なお軒桟瓦（259）には後方の一か所に釘穴が確認できる。陶質施釉桟瓦（261）の胎土はにぶい橙色で焼き締まる。表面の前方から3分の2程度まで施釉する。

(3) 金属製品

調査区全体から出土した金属製品は多くが造成土中からで、遺構に伴うものはほとんどないため年代特定も困難である。また多くが鉄釘などで、青銅製品の数は限られる。なおここで挙げるものは透過X線装置を用い、その画像をもとにある程度錆を除去した状態である。

飾り金具（262）は非常に薄く花弁を模り、全面塗金を施す。文様は断面三角形の小型鏨を用いたとみられる。一か所に穿孔がみられるが、吊るして使用する装飾品と推測できる。煙管雁首（263）は火皿を欠き、接合部に補強体などは確認できない。煙管の吸口（264）は肩をもたない、口付けから直線的に伸びる形状であると推測できるが、折れ曲がり原型は留めない。不明円錐台製品（265）は中空で短辺は玉縁を呈す。紐金具（266）は、中空の円筒を環状に加工したものである。真鍮製薬莢（267）は上方を欠く。刻印などは確認できないが、近代以降のものとみられる。鉄釘（268～276）は錆により不明瞭なものもあるが、いずれも原型は断面四角形を呈すと見られる。鉄製鏨（277）は全長8.2cm、断面方形の棒状で先端に刃を持つ。頭部には打圧痕がみられる。不明鉄製品（278）は錆がひどく不明瞭であるが、S字状にたたんだ板を折り曲げ表面に稜をもたせる。鉄製刀（279）は茎と刀身の一部のみの残存であるが、破断面からは刀身が折れ曲がった様子が伺える。また茎の一部に木質の繊維が確認できる。

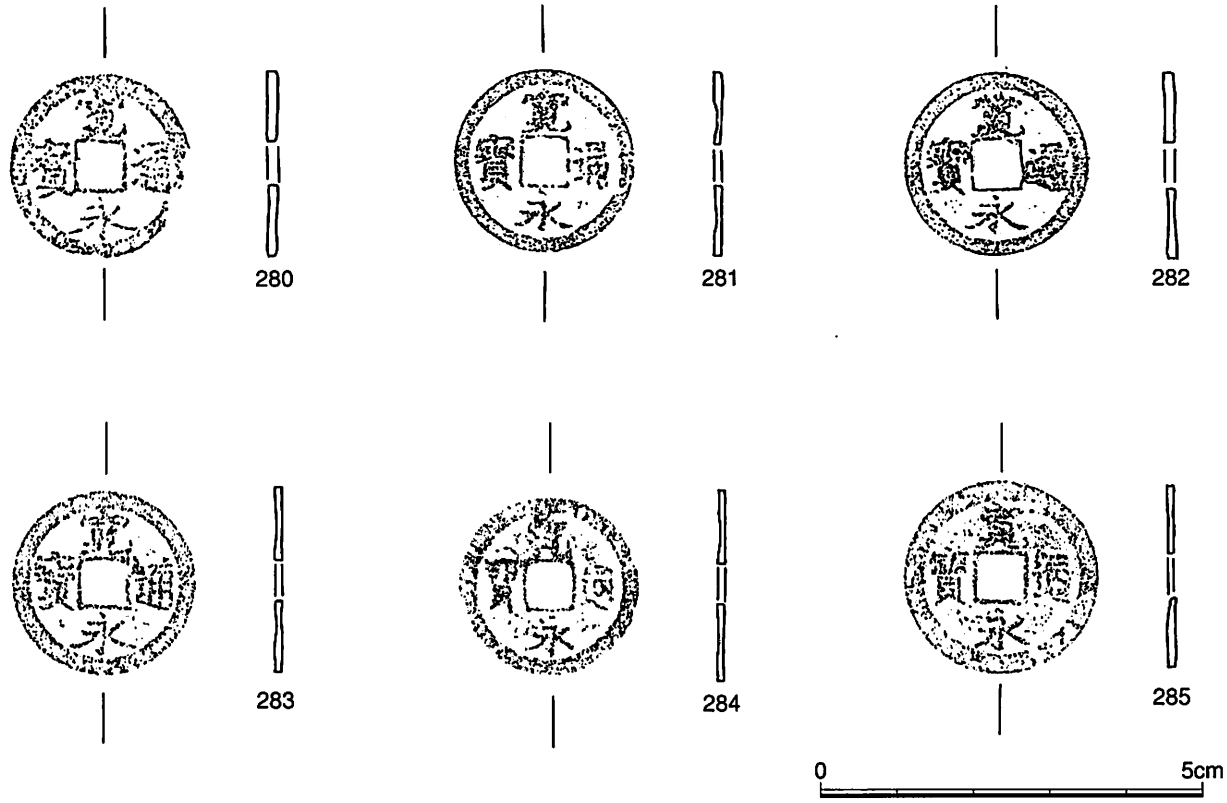


Fig.34 銭（1/3）

(4) 銭

出土した銭貨は計6点、いずれも完形の寛永通宝で遺構からの出土はない。(280～284) は古寛永で (285) は新寛永である。

(5) 石製品

今回の調査で出土した石製品は少量である。また遺構に伴うものもわずかで年代の特定は困難である。

碁石 (286) は円形で断面扁平、表面は平滑で褐灰色を呈す。碁石 (287～289) は円形で断面扁平、もしくはほぼ平坦でいずれも黒色を呈す。ペン型棒状製品 (290) は断面円形で表面は平滑、灰黄褐色を呈し、先端は使用による磨滅痕がみられる。石板筆記用の石筆か。不明四角柱製品 (291～294) である。(291) は断面長方形で黒色、四側面共に平坦に加工し、うち一面は平滑である。片半は欠損するが、残りの傾斜する狭面は使用による磨滅がみられる。(292) の断面はほぼ長方形でにぶい黄橙色を呈し、四側面は平坦に加工する。三側面をまたいで円状に黒く変色するため、赤外線カメラで観察した結果、炭素の吸着によるものとみられたが原因は不明である。なお両端とも欠損し、擦痕および使用痕は確認できない。文鎮か。(293) は断面長方形で黄灰色を呈し四側面は平坦に加工する。図下方の狭面も平坦に加工するが、図上方狭面は使用により磨滅し傾斜する。また上方側面の角の一部もわずかに使用による磨滅が確認できる。砥石か。(294) は断面長方形でにぶい黄橙色を呈す。片半は欠損し、残り五面は平坦に加工する。石球 (295) はやや扁平な球体で所々赤色化する（図破線内)。

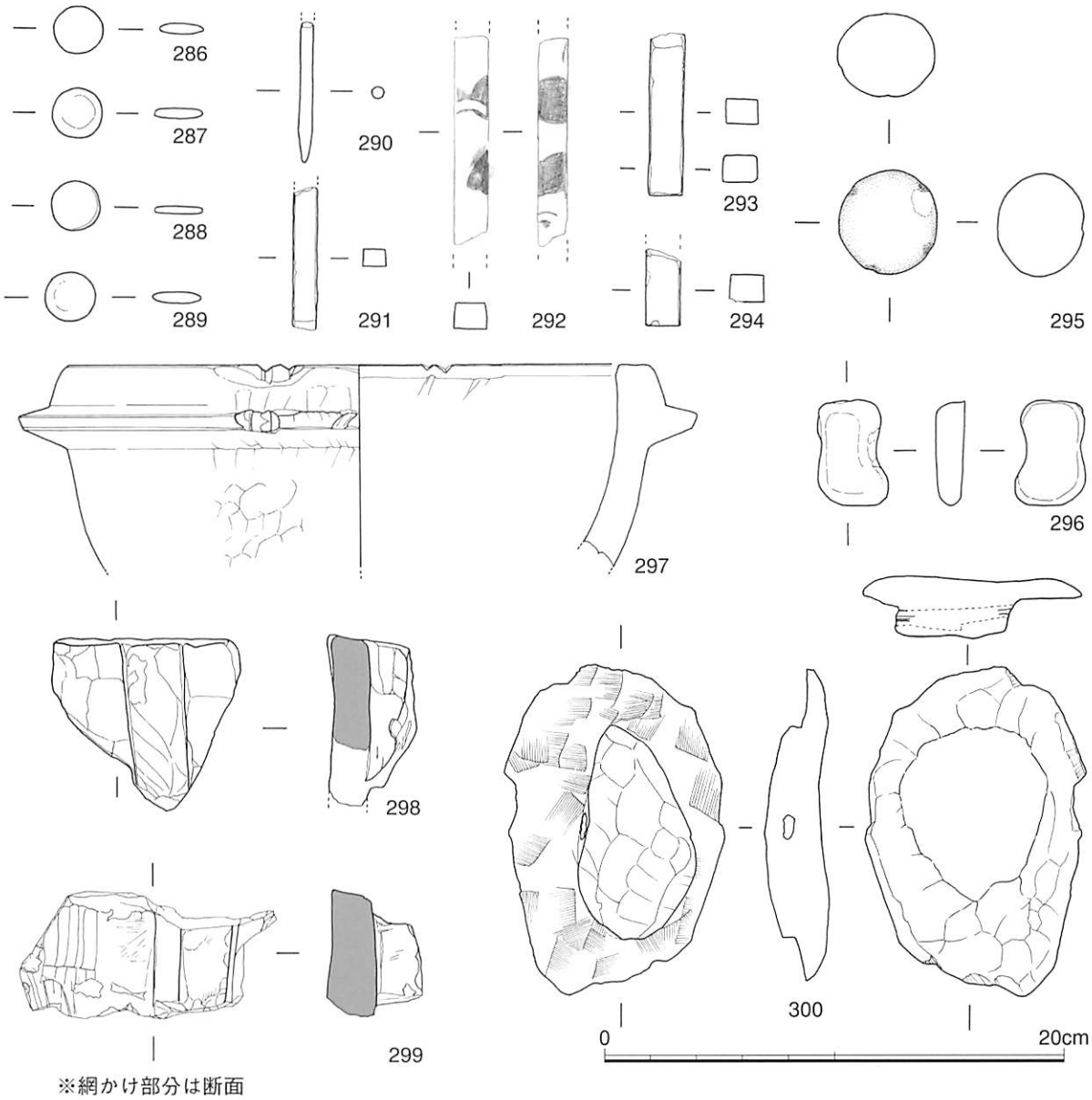


Fig.35　石製品（1/3）

また一部に細く浅い孔を穿つ。不明製品（296）は褐灰色を呈し、上・下面が平滑となる。砥石か。滑石製品は図化したもの(297～300)を含め、石鍋の転用品以外は細片化したものばかりである。(297)は緑灰色を呈し、口縁直下に廻る鍔の端部には外傾する面をもつ。丸みをもつ体部の外面は、煮沸により煤が吸着し黒色化する。口縁部先端、鍔先端、および破断面に鋸歯状の欠き込みが入るが、転用のための再加工途中のためとみられる。(298）は口縁部付近に断面隅丸五角形の縦耳をもち、体部外面には幅広く短い単位のノミ跡が残る。(299）は口縁部付近に断面台形の縦耳をもち、細く長い単位のノミ跡が残る。バレン状製品（300）は平面楕円形で、片面中央付近が突出し断面「凸」字状を呈す。もう片面は中央付近を平滑に整形しやや窪み、全体に煤が吸着する。また突出部分下半の両側から孔を穿ち貫通するが、左右の穿孔進入角度がずれがあるため内部は不整形となる。これは石鍋の転用品で、突出部分を破損した石鍋の体部または底部に挿入し、穿孔部に金属の留め金具を差し込み固定して使用する補修具と考えられている[註2)]。

【註】

註１）陶質施釉瓦については、佐賀県社会教育・文化財課　富士文化財事務所　白木原宣氏・西野元勝氏、島根県教育庁文化財課　熱田貴保氏から形体・胎土分析や、系譜などご教示いただき、また類例の窯跡や瓦についての多くの資料を提供していただいた。

註２）里田原・八児両遺跡において石鍋とバレン状石製品が近接または組み合った状態で出土したことから、バレン状石製品は石鍋の欠損部を補填する機能を有する、としている。(松尾秀昭 2007)

参考文献一覧

大橋康二（1994）『古伊万里の文様　初期肥前磁器を中心に』理工学社

三杉隆敏・榊原昭二（1989）『陶磁器染付文様辞典』柏書房

西尾克己・熱田貴保（1992）『石見空港建設予定地内遺跡』（埋蔵文化財発掘調査報告書）島根県教育委員会

河合雄吉（1998）『中尾遺跡』（石田町文化財調査報告書　第２集）長崎県石田町教育委会

山下英明・川口洋平（1997）『原の辻遺跡・安国寺前Ａ遺跡・安国寺前Ｂ遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第１集）長崎県教育委員会

安楽勉・宮崎貴夫・杉原淳史（2000）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第18集）長崎県教育委員会

副島和明・川畑敏則ほか（2006）『門前遺跡』（長崎県文化財調査報告書　第190集）長崎県教育委員会

松尾秀昭（2007）「石鍋の補修具とは」『西海考古第７号』　西海考古同人会

報告番号	出土遺構	器種	器形	産地	fig.	写真 Pla.	備考
1	Ⅲ層	土師器	皿		21	6	
2	Ⅲ層	土師器	皿		21	6	手捻り成形？
3	Ⅲ層	土師器	皿		21	6	手捻り成形？
4	Ⅲ層	土師器	皿		21	6	
5	Ⅲ層	土師器	碗？		21	6	
6	Ⅲ層	土師器	小型皿		21	6	
7	Ⅲ層	土師器	皿		21	6	
8	Ⅲ層	土師器	坏		21	6	
9	Ⅲ層	土師器	坏		21	6	
10	Ⅲ層	土師器	坏		21	6	
11	Ⅲ層	土師器	杯		21	6	
12	Ⅲ層	土師器	杯		21	6	
13	Ⅲ層	土師器	杯		21	6	
14	Ⅲ層	土師器	杯		21	6	
15	Ⅲ層	土師器	皿？		21	6	
16	Ⅲ層	土師質土器	塩壺蓋		21	6	
17	Ⅲ層	土師質土器	塩壺蓋		21	6	
18	Ⅲ層	土師質土器	塩壺蓋		21	6	
19	Ⅲ層	土師質土器	塩壺蓋		21	6	
20	Ⅲ層	土師質土器	塩壺蓋		21	6	
21	Ⅲ層	土師質土器	塩壺		21	6	
22	Ⅲ層	土師質土器	塩壺		21	6	
23	Ⅲ層	土師質土器	目皿		21	6	
24	Ⅲ層	土師質土器	目皿		21	6	
25	Ⅲ層	土製品	土錘		21	6	
26	Ⅲ層	土製品	土鈴		21	6	
27	Ⅲ層	中国産施釉陶器	碗		21	6	
28	Ⅲ層	施釉陶器	碗	輸入品？	21	6	
29	Ⅲ層	施釉陶器	皿	瀬戸・美濃系	21	6	
30	Ⅲ層	施釉陶器	皿	唐津系	21	6	
31	Ⅲ層	施釉陶器	多角形皿		21	6	
32	Ⅲ層	施釉陶器	皿		21	6	
33	Ⅲ層	施釉陶器	蓋	京都？	21	6	
34	Ⅲ層	施釉陶器			21	6	
35	Ⅲ層	施釉陶器	皿	淡路産珉平焼	21	6	
36	Ⅲ層	施釉陶器	碗	現川	21	6	
37	Ⅲ層	施釉陶器	碗	現川	21	6	
38	Ⅲ層	施釉陶器	碗	現川	21	6	
39	Ⅲ層	施釉陶器	碗	現川	21	6	
40	Ⅲ層	施釉陶器	碗	京・信楽系	21	6	
41	Ⅲ層	施釉陶器	碗	京・信楽系	21	6	
42	Ⅲ層	施釉陶器	碗	肥前系	21	6	肥前京風
43	Ⅲ層	施釉陶器	土瓶	唐津系	21	6	
44	Ⅲ層	施釉陶器	土瓶	唐津系	21	6	
45	Ⅲ層	施釉陶器	小型鍋		21	6	
46	Ⅲ層	施釉陶器	壺		21	6	
47	Ⅲ層	施釉陶器	蓋	信楽？	21	6	
48	Ⅲ層	施釉陶器	壺？		21	6	
49	Ⅲ層	焼締陶器	小鉢		21	6	
50	Ⅲ層	焼締陶器	擂鉢	瀬戸・美濃系？	21	6	
51	Ⅲ層	肥前白磁	紅皿	肥前系	22	7	
52	Ⅲ層	肥前白磁	紅皿	肥前系	22	7	
53	Ⅲ層	肥前白磁	紅皿	肥前系	22	7	
54	Ⅲ層	肥前白磁	紅皿	肥前系	22	7	
55	Ⅲ層	肥前白磁	紅皿	肥前系	22	7	
56	Ⅲ層	肥前白磁	碗		22	7	
57	Ⅲ層	国産磁器	碗		22	7	
58	Ⅲ層	国産白磁	水滴	肥前系？	22	7	
59	Ⅲ層	国産磁器	色絵人形	肥前系？	22	7	
60	Ⅲ層	肥前染付	蓋	肥前系	22	7	
61	Ⅲ層	肥前色絵付	蓋	肥前系	22	7	
62	Ⅲ層	国産染付	蓋		22	7	
63	Ⅲ層	肥前染付	小杯	肥前系	22	7	
64	Ⅲ層	肥前染付	小杯	肥前系	22	7	
65	Ⅲ層	肥前染付	小杯	肥前系	22	7	
66	Ⅲ層	肥前色絵付	小杯	肥前系	22	7	
67	Ⅲ層	肥前色絵付	碗	肥前系	22	7	
68	Ⅲ層	肥前染付	碗	肥前系	22	7	
69	Ⅲ層	肥前染付	碗	肥前系	22	7	
70	Ⅲ層	肥前染付	碗	肥前系	22	7	
71	Ⅲ層	肥前染付	碗	肥前系	22	7	
72	Ⅲ層	肥前染付	碗	肥前系	22	7	
73	Ⅲ層	肥前染付	碗	肥前系	22	7	
74	Ⅲ層	肥前染付	くらわんか碗	肥前系	22	7	
75	Ⅲ層	肥前染付	くらわんか碗	肥前系	22	7	
76	Ⅲ層	肥前染付	碗	肥前系	22	7	
77	Ⅲ層	肥前染付	碗	肥前系	22	7	
78	Ⅲ層	肥前染付	大碗	肥前系	22	7	
79	Ⅲ層	肥前染付	広東碗	肥前系	22	7	
80	Ⅲ層	肥前色絵付	鉢	肥前系	22	7	
81	Ⅲ層	肥前染付	瓶	肥前系	22	7	
82	Ⅲ層	染付	瓶	肥前系	22	7	
83	Ⅲ層	肥前染付	輪花皿	肥前系	23	8	
84	Ⅲ層	肥前染付	皿	肥前系	23	8	

Tab.10　出土土器観察表

報告番号	出土遺構	器種	器形	産地	fig.	写真 Pla.	備考
85	Ⅲ層	肥前染付	皿	肥前系	23	8	
86	Ⅲ層	肥前染付	輪花皿	肥前系	23	8	
87	Ⅲ層	肥前染付	くらわんか皿	肥前系	23	8	
88	Ⅲ層	肥前染付	皿	肥前系	23	8	
89	Ⅲ層	肥前染付	皿	肥前系	23	8	
90	Ⅲ層	色絵付	皿		23	8	
91	Ⅲ層	中国白磁	皿	中国	23	8	
92	Ⅲ層	中国白磁	皿	中国	23	8	
93	Ⅲ層	中国白磁	皿	中国	23	8	
94	Ⅲ層	中国白磁	皿	中国	23	8	
95	Ⅲ層	中国白磁	皿	中国	23	8	
96	Ⅲ層	中国白磁	碗	中国	23	8	
97	Ⅲ層	中国白磁	碗	中国	23	8	
98	Ⅲ層	中国白磁	碗	中国	23	8	
99	Ⅲ層	中国白磁	碗	中国	23	8	
100	Ⅲ層	中国白磁	碗	中国	23	8	
101	Ⅲ層	中国青磁	碗	龍泉窯系	23	8	
102	Ⅲ層	中国青磁	碗	龍泉窯系	23	8	
103	Ⅲ層	中国青磁	碗	龍泉窯系	23	8	
104	Ⅲ層	中国青磁	碗	龍泉窯系	23	8	
105	Ⅲ層	青花	饅頭心碗	景德鎮窯系	23	8	
106	Ⅲ層	青花	饅頭心碗	景德鎮窯系	23	8	
107	Ⅲ層	輸入染付	皿	東南アジア？	23	8	転用品？
108	Ⅲ層	青花	皿		23	8	
109	Ⅲ層	青花	皿		23	8	
110	Ⅲ層	青花	皿		23	8	
111	Ⅲ層	青花	碁笥底皿	漳州窯系？	23	8	
112	Ⅲ層	青花	碁笥底皿	漳州窯系？	23	8	
113	SDH	土師質土器	塩壺蓋		24	9	
114	SDH	土師器	杯		24	9	
115	SDH	青磁	碗		24	9	
116	SDH	肥前染付	碗	肥前系	24	9	
117	SDH	肥前染付	碗	肥前系	24	9	
118	SDH	肥前染付	筒型碗	肥前系	24	9	
119	SDH	肥前白磁	ミニチュア皿	肥前系	24	9	
120	SDH	肥前白磁	紅皿	肥前系	24	9	
121	SDH	肥前青磁	碗	肥前系	24	9	
122	SDH	肥前染付	皿	肥前系	24	9	
123	SDH	肥前色絵付	碗	肥前系	24	9	
124	SDH	肥前染付	皿	肥前系	24	9	
125	SDH	肥前染付	輪花皿	肥前系	24	9	
126	SDH	肥前染付	皿	肥前系	24	9	
127	SDH	肥前染付	瓶	肥前系	24	9	
128	SDH	施釉陶器	蓋	唐津系	24	9	
129	SDH	施釉陶器	蓋	京・信楽系？	24	9	墨書
130	SDH	施釉陶器	碗	現川	24	9	
131	SDH	施釉陶器	碗	現川	24	9	
132	SDH	施釉陶器	碗	京・信楽系	24	9	
133	SDH	施釉陶器	瓶	唐津系	24	9	
134	SDH	施釉陶器	土瓶	京都	24	9	
135	SDH	施釉陶器	土瓶	京都	24	9	
136	SD02	土師器	杯		24		
137	SD04	施釉陶器	片口鉢	唐津系	24	9	
138	SD09	土師器	杯		24		
139	SD09	土師器	杯		24		
140	SD09	土師器	杯		24		
141	SD09	土師器	杯		24	9	
142	SD09	肥前染付	碗	肥前系	24	9	
143	SD09	施釉陶器	鍋	唐津系	24		
144	SD09	焼締陶器	壺		24		
145	SD08	土師器	坏		24		
146	SD08	土師器	皿		24		
147	SD08	土師器	坏		24		
148	SD03	施釉陶器	碗	現川	24		
149	SD06	土師器	杯		24	9	
150	SD06	土師器	杯		24		
151	SD06	土師器	坏		24		
152	SD06	土師器	杯		24		
153	SD06	青花	碁笥底皿	漳州窯系？	24	9	転用硯？
154	SD06	肥前染付	瓶	肥前系	24		
155	SD06	土製品	土錘		24		
156	SP138	肥前色絵付	碗	肥前系	25		
157	胞衣壺遺構	施釉陶器	土瓶	唐津系	26	9	
158	SX03	土師器	杯		27	10	
159	SX03	土師器	杯		27	10	
160	SX03	土師器	杯		27	10	
161	SX03	土師器	杯		27		
162	SX03	瓦質土器	火鉢脚		27		
163	SX03	青花	皿	漳州窯系？	27		
164	SX03	青花	皿	漳州窯系？	27		
165	SX03	施釉陶器	天目茶碗	瀬戸・美濃系系	27	10	
166	SX03	施釉陶器	碗	瀬戸・美濃系系	27	10	織部？
167	SX03	施釉陶器	建水	朝鮮半島？	27	10	貝目跡
168	Ⅴ層	土師器	杯		27	10	

Tab.10　出土土器観察表

報告番号	出土遺構	器種	器形	産地	fig.	写真 Pla.	備考
169	V層	土師器	杯		27		
170	V層	土師器	杯		27	10	
171	V層	土師器	杯		27		
172	V層	土師器	杯		27		
173	V層	土師器	杯		27		
174	V層	土師質土器	瓦灯		27		
175	V層	瓦質土器			27		
176	V層	青花	蓮子碗	景德鎮窯系	27	10	
177	V層	青花	碁笥底皿	漳州窯系？	27	10	
178	V層	青花	皿		27		
179	V層	施釉陶器	碗	唐津系	27	10	
180	V層	土製品	土錘		27		
181	SD05	土師器	皿		28	11	
182	SD05	土師器	小型坏		28	11	
183	SD05	土師器	小型坏		28	11	
184	SD05	土師器	大型坏		28		
185	SD05	土師器	大型坏		28	11	
186	SD05	中国白磁	皿	中国	28		
187	SD05	中国白磁	皿	中国	28		
188	SD05	青花	碗		28		
189	SD05	青花	蓮子碗	景德鎮窯系	28	11	
190	SD05	青花	皿		28	11	
191	SD05	瓦質土器	火鉢		28		
192	SD05	施釉陶器	小型皿	朝鮮半島	28	11	灰青沙器
193	SD05	焼締め陶器	擂鉢	丹波	28		
194	SD05	施釉陶器	鉢		28	11	
195	SD05	土製品	土錘		28		
196	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	11	墨書
197	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	11	墨書
198	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	11	
199	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28		
200	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28		
201	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28		
202	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28		
203	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28		
204	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28		
205	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	12	
206	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	12	
207	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	12	
208	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	12	
209	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	12	
210	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	12	
211	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	12	
212	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28		
213	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28	12	
214	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28		
215	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28		
216	SD05土師器溜まり	土師器	小型杯		28		
217	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28		
218	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28		
219	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28	12	
220	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28		
221	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28		
222	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28		
223	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28		
224	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28	12	
225	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28	12	
226	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28	12	
227	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28	12	墨書
228	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28		
229	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28		
230	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28		
231	SD05土師器溜まり	土師器	杯		28	12	墨書
232	Ⅲ層	中国青磁	碗	越州窯	29		平安後
233	SDH	中国青磁	碗	越州窯	29		平安後

Tab.10　出土土器観察表

報告番号	遺構	種類	形状	文様	fig.	写真 Pla.	備考
234	Ⅲ層	瓦	軒丸	三つ巴	30	13	
235	Ⅲ層	瓦	軒桟	菊花均整唐草	30	13	
236	Ⅲ層	瓦	平		30	13	刻印「佐賀郡今津～」
237	SDH	瓦	軒桟	三つ巴均・整唐草	30	13	
238	SDH	瓦	軒桟	三つ巴・唐草	30	13	
239	SDH	瓦	軒平	均整唐草	30	13	中心飾り不明
240	SDH	瓦	桟		30		
241	SDH	瓦	軒桟	三つ巴	30	13	
242	SDH	瓦	軒桟	三つ巴	30	13	
243	SDH	瓦	軒桟	三つ巴	30	13	
244	SD04	瓦	平		30	13	朝鮮半島産？
245	SP138	瓦	丸		31		
246	SP138	瓦	丸		31		
247	SP138	瓦	丸		31		
248	SP138	瓦	平		31		
249	V層	瓦	丸		31		穿孔
250	V層	瓦	丸		31		

Tab.11　瓦観察表

報告番号	遺構	種類	器形	文様	fig.	写真 Pla.	備考
251	Ⅲ層	肥前染付	皿	上り藤	32	14	
252	Ⅲ層	肥前染付	皿	上り藤	32	14	
253	Ⅲ層	肥前染付	皿	上り藤	32	14	
254	Ⅲ層	肥前染付	碗	上り藤	32	14	こんにゃく印判
255	SDH	瓦	軒桟	上り藤	32	14	
256	SDH	陶質施釉	軒桟	上り藤	32	14	
257	SDH	陶質施釉	軒桟	上り藤	32	14・15	
258	SDH	陶質施釉	軒桟	上り藤	32	14・15	
259	Ⅲ層	陶質施釉	軒桟	上り藤	32	14・15	
260	Ⅲ層	陶質施釉	軒桟	上り藤	32	14・15	
261	Ⅲ層	陶質施釉	桟	上り藤	32	14	

Tab.12　諫早家御屋敷関連遺物観察表

報告番号	遺構	種類	材質	重量（残存）（g）	全長（cm）	備考	fig.	写真 Pla.
262	SDH	飾り金具	銅	2.4	2.60×4.10	塗金	33	16
263	Ⅲ層	煙管雁首	銅	16.33			33	16
264	Ⅲ層	煙管吸い口	銅	2.52			33	16
265	Ⅲ層	不明	銅	18.17			33	16
266	Ⅲ層	紐金具	銅	1.5	2.7		33	16
267	Ⅲ層	薬莢	真鍮	5.05			33	16
268	SDH	釘	鉄	2.24			33	16
269	SDH	釘	鉄	4.75			33	16
270	SDH	釘	鉄	6.62			33	16
271	SDH	釘	鉄	5.01			33	16
272	SDH	釘	鉄	14.49			33	16
273	SDH	釘	鉄	3.57			33	16
274	SDH	釘	鉄	10.68			33	16
275	SDH	釘	鉄	16.56			33	16
276	SI	釘	鉄	21.69			33	16
277	SDH	鏃	鉄	52.82			33	16
278	SD01	不明	鉄	20.91			33	16
279	Ⅴ層	刀	鉄	40.23			33	16

Tab.13　金属製品観察表

報告番号	遺構	種類	fig.	写真 Pla.	重量（残存）（g）	全長（残存）（cm）	厚み（mm）
280	Ⅲ層	古寛永	34	16	3.33	2.45×2.45	0.5
281	Ⅲ層	古寛永	34	16	3.43	2.4×2.4	0.6
282	Ⅲ層	古寛永	34	16	3.59	2.45×2.50	0.5
283	Ⅲ層	古寛永	34	16	3.59	2.4×2.45	0.5
284	Ⅲ層	古寛永	34	16	3.16	2.45×2.45	0.6
285	Ⅲ層	新寛永	34	16	2.46	2.4×2.4	0.5

Tab.14　銭観察表

報告番号	遺構	名称	fig.	写真 PL	重量（残存）（g）	全長（残存）（cm）	厚み（cm）	備考
286	Ⅲ層	碁石	35	17	3.09	2.2×2.1	0.5	
287	Ⅲ層	碁石	35	17	4.05	2.2×2.2	0.5	
288	Ⅲ層	碁石	35	17	3.05	2.2×2.2	0.4	
289	SDH	碁石	35	17	3.84	2.2×2.2	0.5	
290	Ⅲ層	石筆？	35	17	4.01		0.55	
291	Ⅲ層	文鎮？	35	17	6.8		0.8	
292	SD01	文鎮？	35	17	28.44		1.2	
293	SD01	砥石？	35	17	19.96		1.1	
294	SP 上面	文鎮？	35	17	10.19		1.2	
295	SP66	石球	35	17	76.39	4.5×3.7		
296	SDH	砥石？	35	17	25.95	4.55×3.05	1.3	
297	SP95	滑石鍋	35	17	154.9			転用途中？
298	SD06	滑石鍋	35	17	217.8			転用品？
299	Ⅴ層	滑石鍋	35	17	113.26			転用品？
300	SD06	バレン状滑石製品	35	17	358.24	14.3×9.6	2.8	滑石鍋補修具？

Tab.15　石製品観察表

Ⅵ　まとめ

諫早地方および諫早（龍造寺）家の関係する出来事を年表にまとめ、それに今回の発掘調査によって明らかになった遺構の年代観（主に出土遺物を根拠とする）を書き加えたのがTab.16である。

近世末から近代にかけては諫早家御屋敷の最後の段階である。明治維新後の廃藩置県により、諫早氏は佐賀の鍋島氏同様に東京に移住させられ、大正時代には敷地を県立諫早中学校へ寄付している。この時期に構築されたのが石組側溝（SDH01）である。この遺構は、地盤の弱い調査区北西側に構築する必要性から、胴木や裏込石を使用する本格的な石組として築かれている。また各側溝が直線的に流れ、かつ直角に交わることから区画的な意図が窺える。何らかの理由で屋敷の拡張がなされ、それにともなって築かれたものと思われる。

中世末から近世初頭にかけては、諫早地方の領主が西郷氏から龍造寺（後の諫早氏）に移行する極めて画期的な時期に相当する。この時期に構築され、かつ埋没された遺構が５号溝（SD05）である。この遺構は他の溝遺構のように直線的な流れを見せず、北西から南東へ緩やかに蛇行するという特徴がある。この軸線上には今も残る諫早家御屋敷の庭園池があり、自ずと両者の関連性が想定される。この諫早家御屋敷の庭園池は、桃山様式に似た庭園の要素をもっているため[註1)]。西郷時代につくられた可能性もある。この５号溝からは大量の土師器がまとまって出土している（土師器溜まりとして報告している）。土師器は出土総量1544.2ｇ、完形品（または完形品に極めて近い）は約30点を数える。これらは成形手法、法量などから一定の規格のもとに製作されたとみられ、墨書が確認できるものも含まれている。この庭園の池で執り行われた祭祀や、または饗宴の痕跡である可能性もあり、大変興味深い。長崎県下で行われた既往調査からは、今回のように供膳形態の土師器が一括で出土し、なおかつ供伴遺物から実年代が絞り込める資料の報告例は少ない。畿内などに比べ、このような土器の出土例が少ない本県において、今回の例は今後の研究を進める上で非常に貴重な資料であると言える。

主に造成土からの出土であるが、中世や古代の遺物が散見される点にも触れる必要がある。特に越州窯産青磁は県内の出土例が限られており、その存在は際だっている。過去に原の辻遺跡大川地区から約80点、また門前遺跡から約30点が出土しているが、この両遺跡は越州窯産青磁以外にも初期貿易陶磁器や緑釉陶器、灰釉陶器なども出土しており、当地またはその周辺に当時の官衙の存在が指摘されているところである。その他に安国寺前遺跡、大宝遺跡、馬乗石遺跡、今福遺跡、脇岬遺跡、稗田原遺跡・竹辺遺跡などから数点出土しているだけである。今回出土の２点は外部から搬入したとみられる造成土及び幕末以降の遺構に混入するものであるため、積極的にはこの調査地に古代の施設が存在した可能性を提示できないものの、この付近に、つまり人力で土を運ぶことが可能な範囲のうちに、古代における何らかの施設が存在した可能性は高いと思われる。例えば高城の築城は1469年とされるが、あるいはそれ以前から、この自然の要害である丘陵には何らかの軍事的施設が存在し、その周辺には館や生産集団の生活領域が存在した可能性がある。また調査地から約1.3kmの地点には、伊佐早氏の居城である船越城の有力な候補地である諫早農業高校が存在する。この諫早農業高校を中心とするなだらかな丘陵地帯は、古代における船越駅の比定地でもある。

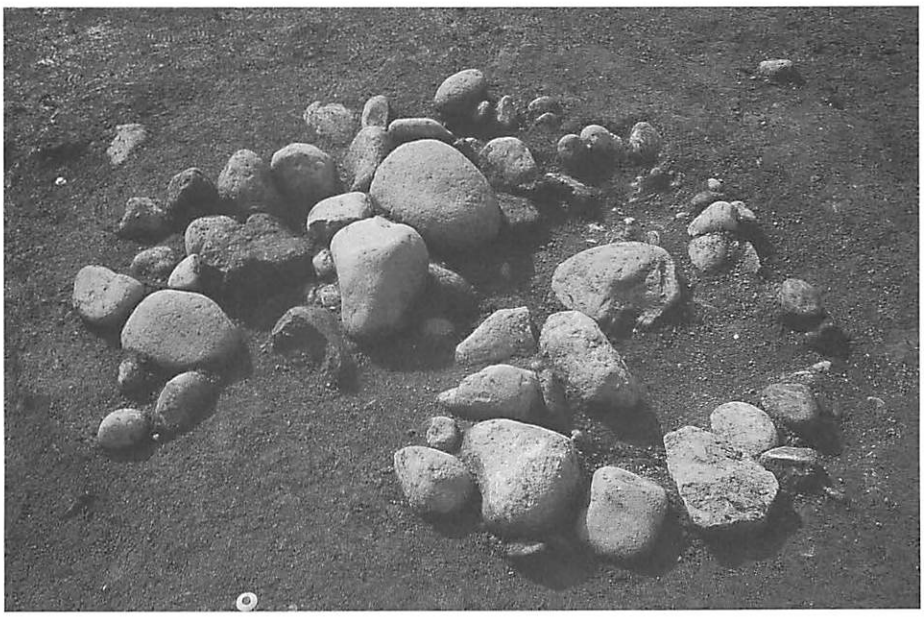
更に特徴的なものとして陶質施釉瓦が挙げられる。硬く焼締まった胎土に褐色の釉薬を掛ける手法は、代表的なものとして島根県の石州瓦を思わせる。これらは瓦当に施された上り藤文様と形態から、

諫早家に関係するものと思われるが、いずれも出土地点からは詳細な制作年代及び使用年代は判然としない。上り藤文様が描かれる肥前系染付も数点出土しているが、これも同じである。当地が諫早氏（龍造寺）に関わった中世末から近代にかけての期間に、このような陶質施釉瓦を焼いたとみられる窯は九州ではまだ報告されていないが、佐賀県において明治時代に褐色釉を掛ける、いわゆる赤瓦を焼いた窯跡が調査されている。また石州からの製作技術伝搬も指摘されており、今後の発掘資料の増加を待つとともに、石州赤瓦との比較分析も進めていかねばならない。

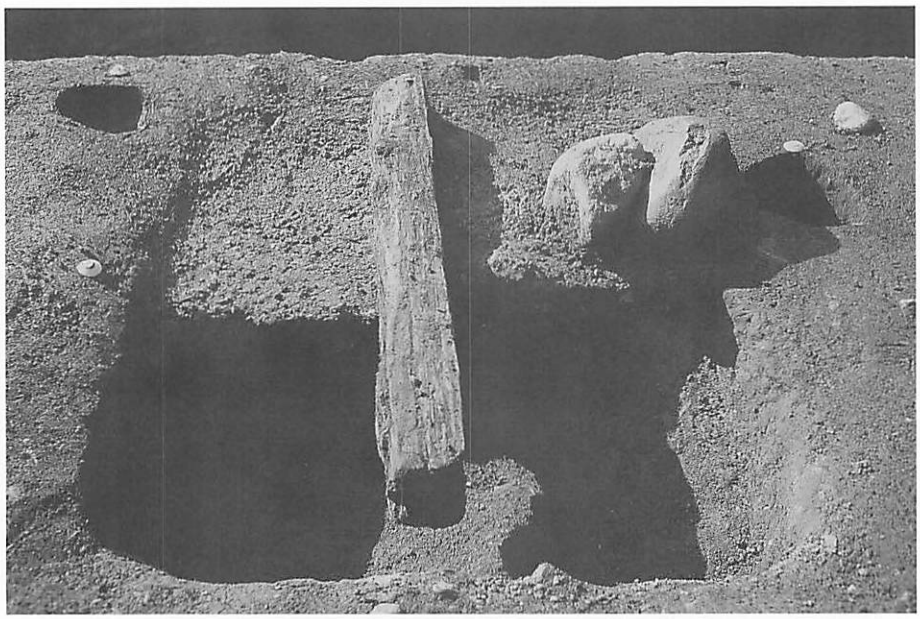
註１）山口　祐造（1981）「諫早領主の屋敷図面による御書院再考」『諫早史談』第13号

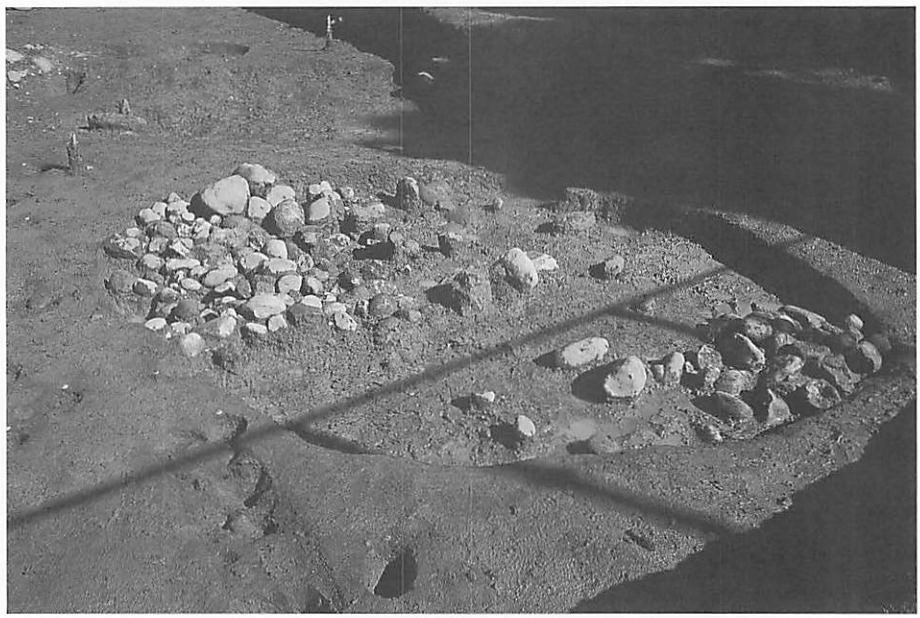
世紀	西暦	元号		遺構・層位の年代観
10世紀	920	延喜20	肥前國、伊佐早村、延喜中ニ藤井宮時コレヲ検校僧圓昭ニ譲與 『八幡宇佐宮御神領大鏡』建久八年(1197)	
11世紀				
12世紀				
13世紀	1266	文永3	仁和寺佛母院御領肥前國伊佐早庄雑掌重申… 『深江文書』正和三年(1314)	
14世紀	1315	正和4	…西郷藤三郎幸朝立石弥三郎等被□□□遣、『川上文書』正和四年(1315)	
	1320	元応2	伊佐早二郎通澄重催促之処如執達『大河文書』元応二年(1320)	
15世紀	1469	文明	西郷尚善が高城を築城する。	
16世紀	1587	天正15	西郷信尚を追い、龍造寺家晴が伊佐早を領有する。	SD05（土師器溜含） V層
17世紀	1607	慶長12	竜造寺氏2代・直孝が姓を諫早に改め鍋島藩の配下に入る。	SD02
	1699	元禄12	本明川大洪水　城下を現在の中央市街地へ移す。	
18世紀				SD09
19世紀				SD03 SD06 SD08 SP138 胞衣壺 Ⅲ層 SDH01
20世紀	1923	大正12	諫早家屋敷敷地に県立諫早中学校が設立される。	

Tab.16　諫早家御屋敷跡　関連年表

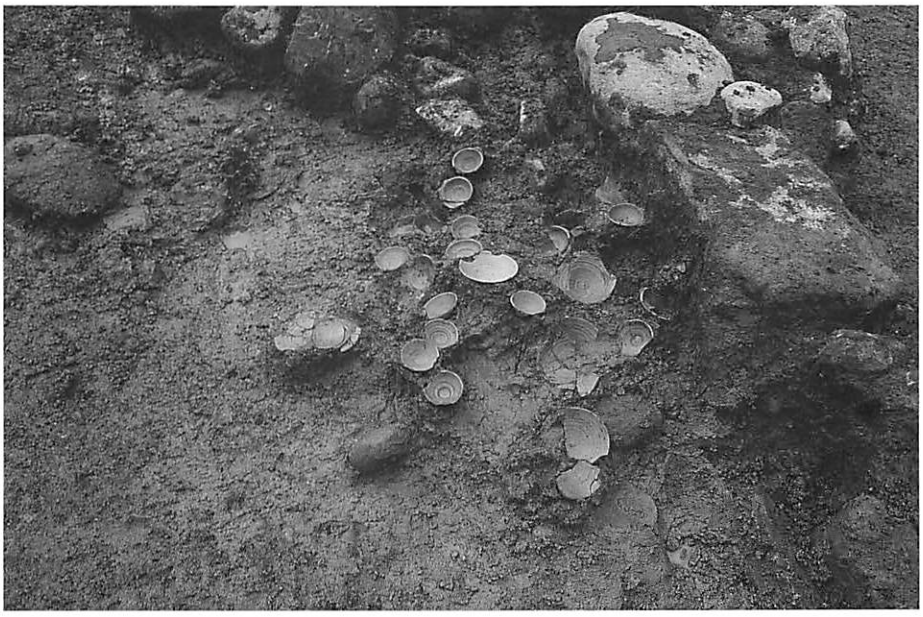


Pla. 2　発掘現場写真１（上：調査区全景　中：第１期面検出ピット検出　下：１号礎石（SJ01）検出）





Pla. 3　発掘現場写真 2（上：2 号不明遺構検出　中：3 号不明遺構完掘　下：胞衣壺遺構）



Pla. 4　発掘現場写真 3（上：西壁土層　中：北壁土層　下：土師器溜まり検出）

Pla. 5　発掘現場写真 4（上：5 号溝完掘　中：造成土内の瓦集中　下：第 2 期面完掘）

Pla. 6　Ⅲ層　土師器　土師質土器 / Ⅲ層　国産陶器

Pla. 7　Ⅲ層　国産白磁　染付・色絵付　碗・皿・その他器形

Pla. 8　Ⅲ層　国産染付皿類 / Ⅲ層　輸入磁器

Pla. 9　石組側溝 / 9 号溝 / 6 号溝 / 2 号溝 / 胞衣壺

Pla.10　3号不明遺構

Pla.11　5号溝 / 5号溝土師器溜

Pla.12　5号溝　5号溝土師器溜まり

Pla.13　石組側溝・10号溝　近世瓦

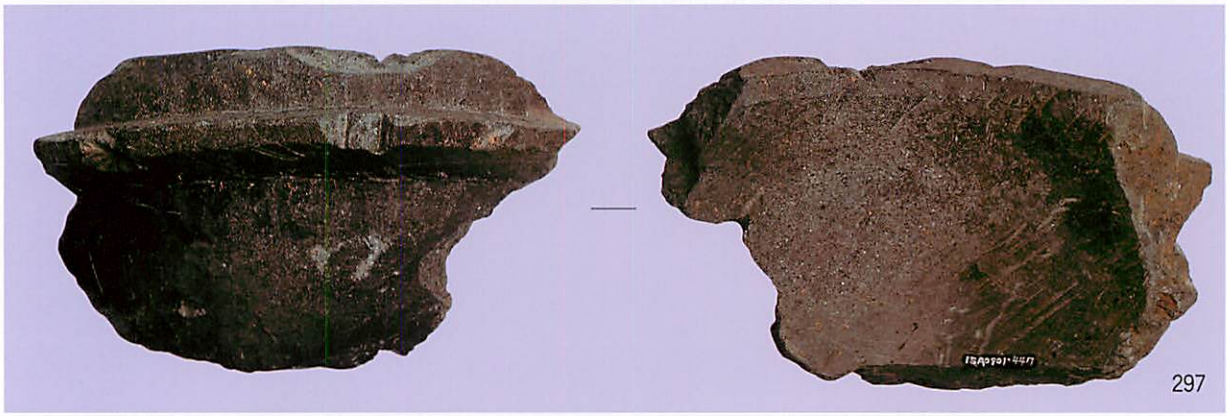
Pla.14　諫早家関連遺物

表面

裏面

Pla.15　諫早家関連遺物

Pla.16　金属製品 / 銭



Pla.17　石製品

報告書抄録

ふりがな	いさはやけおやしきあと
書名	諫早家御屋敷跡
副書名	長崎県立諫早高等学校附属中学校校舎建設工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	2
編著者名	林　隆広・河合恭典
編集機関	長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515-1　TEL 0920（45）4080
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
諫早家御屋敷跡（いさはやけおやしきあと）	長崎県諫早市東小路町（ながさきけんいさはやしひがしこうじまち）	42204	4-135	32°50′42	130°3′4	試掘調査 2009.8.22 ～ 2009.11.30 本調査 2009.11.30 ～ 2010.2.9	16m² 754m²	校舎建設工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諫早家御屋敷跡	館跡	中世／近世	石組側溝 溝 井戸 礎石 土壙 胞衣壺 ピット	磁器 陶器 土師器 瓦 施釉瓦	

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第２集

諫早家御屋敷跡

2011. 3. 31

発行　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂